

館報 2012 61

# ANNUAL REPORT

OF BRIDGESTONE MUSEUM OF ART & ISHIBASHI MUSEUM OF ART

石橋財団 ブリヂストン美術館  
石橋財団 石橋美術館





館報 2012 61

# ANNUAL REPORT

OF BRIDGESTONE MUSEUM OF ART & ISHIBASHI MUSEUM OF ART

石橋財団 ブリヂストン美術館  
石橋財団 石橋美術館

館報61号(2012年度)

編集・発行

石橋財団ブリヂストン美術館  
〒104-0031 東京都中央区京橋1-10-1

石橋財団石橋美術館  
〒839-0862 福岡県久留米市野中町1015

印刷  
株式会社昭和堂

2013年3月発行

Annual Report of Bridgestone Museum of Art &  
Ishibashi Museum of Art No. 61 (2012)

Edited and published by

Bridgestone Museum of Art, Ishibashi Foundation  
1-10-1, Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan

Ishibashi Museum of Art, Ishibashi Foundation  
1015, Nonaka-machi, Kurume-shi, Fukuoka 839-0862, Japan

Printed by  
Showado Co., Ltd.

©2013  
Bridgestone Museum of Art,  
Ishibashi Museum of Art,  
Ishibashi Foundation



---

## 目次 Contents

1	設立趣旨、機構・運営 .....	4
	Brief Histories of the Museums, Organization and Management .....	5
2	展覧会	
	• プリヂストン美術館 .....	6
	• 石橋美術館 .....	31
3	教育普及	
	• プリヂストン美術館 .....	47
	• 石橋美術館 .....	52
4	入場者数 .....	55
5	新収蔵作品 New Acquisitions .....	56
6	新収図書 .....	62
7	修復記録 .....	63
8	作品貸出記録	
	• プリヂストン美術館 .....	65
	• 石橋美術館 .....	66
9	刊行物一覧 .....	67
10	研究報告	
	• 関根正二のいま	
	貝塚 健 .....	74
11	美術館案内 Guide to the Museums .....	83
12	石橋財団職員 .....	84

# 設立趣旨

## ブリヂストン美術館

ブリヂストン美術館は、株式会社ブリヂストンの創業者・石橋正二郎(1889-1976)が多年にわたって蒐集愛蔵した内外の美術品を、社会公共のため、広く一般の鑑賞に供し、文化向上の一端に貢献したいとの趣旨に基づき、1952(昭和27)年1月8日、ブリヂストンビルディング竣工とともに同ビル内に開設されたものである。その後1956(昭和31)年4月に設立された財団法人石橋財団（現 公益財団法人石橋財団）がその経営を継承し、1961(昭和36)年9月には同財団が石橋正二郎から所蔵美術品の寄贈を受けた。なお、2003(平成15)年1月に一階部分の増床工事を行い、ティールームを開設した。

## 石橋美術館

石橋美術館は、石橋正二郎が1956(昭和31)年4月26日、株式会社ブリヂストンの創立25周年を記念して、社会公共の福祉と文化向上のために、郷土久留米市に寄贈した石橋文化センターの中心施設である。1977(昭和52)年、石橋正二郎の遺族の寄付により増改築が行われ、同年4月以降、久留米市の要請により、石橋財団がその管理運営に当たっている。

なお、本館に付随する別館は、1995(平成7)年1月8日、石橋正二郎によって蒐集された石橋コレクションのうち、書画・陶磁器類を収蔵展示する施設として石橋幹一郎により久留米市に建設寄贈され、一年余の養生期間を経て1996(平成8)年10月17日に開館した。

# 機構・運営

石橋財団 (2012年12月31日現在)

理事長	石橋 寛					
理事	島田紀夫	西嶋大二	滝口勝昭	水戸岡鋭治	石橋直樹	
監事	林 克次	今津幸子				
評議員	加嶋昭男	高階秀爾	村上 浩	小林 忠	加瀬英明	小嶋英熙
	鈴木エドワード					

## 美術館運営委員会

委員長	石橋 寛				
委員	高階秀爾	富山秀男	小林 忠	島田紀夫	西嶋大二

## 寄付助成選考委員会

委員長	石橋 寛					
委員	村上 浩	加嶋昭男	島田紀夫	小嶋英熙	石橋直樹	西嶋大二

常務理事 西嶋大二

## 事務局

事務局長 深堀幸男

## ブリヂストン美術館

館長 島田紀夫

## 石橋美術館

館長 島田紀夫



---

# Brief Histories of the Museums

## Bridgestone Museum of Art

On January 8, 1952, ISHIBASHI Shojiro (1889-1976), the founder of the Bridgestone Corporation, wishing to promote cultural development in Japan, opened to the public a museum of art within the newly-completed Bridgestone Building under the name of the “Bridgestone Gallery”. The works of art, both Japanese and foreign, which he had collected over the years formed the nucleus of the exhibits. In April 1956, the Ishibashi Foundation was established to take over the management of the Gallery, and in September 1961, ISHIBASHI donated the works in the Gallery to the Foundation. In January 1968, the English name was changed from the “Bridgestone Gallery” to the “Bridgestone Museum of Art”. In January 2003, the ground floor was enlarged and a tea room was opened.

## Ishibashi Museum of Art

On April 26, 1956, in commemoration of the 25th anniversary of the Bridgestone Corporation, ISHIBASHI Shojiro donated the Ishibashi Cultural Center to his home town of Kurume to render a public service and promote cultural development. The Ishibashi Museum of Art (originally the Ishibashi Art Gallery) is the principal institution in the Center. In 1977, the Museum building was enlarged and renovated, thanks to a contribution from the Ishibashi family, and in April of the same year the city of Kurume entrusted the Ishibashi Foundation with the management of the Museum.

On January 8, 1995, ISHIBASHI Kan’ichiro, son of ISHIBASHI Shojiro donated to the city of Kurume a new museum especially designated to exhibit Shojiro’s collection of Asian Arts, such as brush painting, calligraphy, porcelain works. It has been open to the public since October 17, 1996.

# Organization and Management

Ishibashi Foundation (As of December 31, 2012)

President of the Board of Directors		ISHIBASHI Hiroshi		
Directors	SHIMADA Norio	NISHIJIMA Taiji	TAKIGUCHI Katsuaki	MITOOKA Eiji
	ISHIBASHI Naoki			
Auditors	HAYASHI Katsuji	IMAZU Yukiko		
Council Members	KASHIMA Akio	TAKASHINA Shuji	MURAKAMI Hiroshi	KOBAYASHI Tadashi
	KASE Hideaki	KOJIMA Hidehiro	SUZUKI Edward	
Executive Committee of the Museums				
Chairman	ISHIBASHI Hiroshi			
Members	TAKASHINA Shuji	TOMIYAMA Hideo	KOBAYASHI Tadashi	SHIMADA Norio
	NISHIJIMA Taiji			
Program Development Grant Committee				
Chairman	ISHIBASHI Hiroshi			
Members	MURAKAMI Hiroshi	KASHIMA Akio	SHIMADA Norio	KOJIMA Hidehiro
	ISHIBASHI Naoki			
Managing Director	NISHIJIMA Taiji			
Administration				
Executive Secretary	FUKABORI Yukio			
Bridgestone Museum of Art				
Director	SHIMADA Norio			
Ishibashi Museum of Art				
Director	SHIMADA Norio			

## パリへ渡った「石橋コレクション」1962年、春〈コレクション展示〉

会期：2012年1月7日(土)－3月18日(日)

会場：第1、2、4－6室

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

概要：開館60周年を記念して、ちょうど50年前の1962年春、パリ国立近代美術館で開催され大変な話題となった初の海外での「石橋コレクション」展を、当時の資料とともに紹介。会場内にて記録映画（「石橋コレクション・パリ」）の上映も行った。

出品内容：絵画45点、パネル5点・資料10点、映画上映

入場者総数：33,185人(1日平均527人)

### 出品目録：

#### 【作品編】

1. カミーユ・コロー《イタリアの女》1826-28年 / 油彩・カンヴァス / 外洋6
2. カミーユ・コロー《オンフルールのトゥータン農場》1845年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋8
3. ウジェーヌ・ドラクロワ《馬習作》 / 水彩・紙 / 外洋129
4. オノレ・ドーミエ《観劇》1856-60年 / 油彩・板 / 国立西洋美術館蔵（※パネル展示）
5. シャルル＝フランソワ・ドービニー《レ＝サーブル・ドロヌ》 / 油彩・板 / 外洋10
6. ギュスターヴ・クールベ《海》1867年 / 油彩・カンヴァス / 所在不明（※パネル展示）
7. アドルフ・モンティセリ《庭園の貴婦人》1870-80年 / 油彩・板 / 外洋13
8. カミーユ・ピサロ《ブーヅヴァルのセーヌ河》1870年 / 油彩・カンヴァス / 外洋19
9. カミーユ・ピサロ《菜園》1878年 / 油彩・カンヴァス / 外洋20
10. エドゥアール・マネ《オペラ座の仮装舞踏会》1873年 / 油彩・カンヴァス / 外洋14
11. エドガー・ドガ《浴後》1900年頃 / パステル・紙 / 外洋18
12. アルフレッド・シスレー《森へ行く女たち》1866年 / 油彩・カンヴァス / 外洋25
13. アルフレッド・シスレー《サン＝マメス六月の朝》1884年 / 油彩・カンヴァス / 外洋26
14. ポール・セザンヌ《鉢と牛乳入れ》1873-77年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋28
15. ポール・セザンヌ《リンネルの上の果物》1890-94年 / 油彩・カンヴァス / 所在不明（※パネル展示）
16. ポール・セザンヌ《帽子をかぶった自画像》1890-94年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋31
17. ポール・セザンヌ《サント＝ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》1904-06年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋32
18. クロード・モネ《アルジャントウイユの洪水》1872-73年 / 油彩・カンヴァス / 外洋21
19. クロード・モネ《雨のベリール》1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋164
20. クロード・モネ《睡蓮》1903年 / 油彩・カンヴァス / 外洋22
21. クロード・モネ《黄昏、ヴェネツィア》1908年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋24
22. ピエール＝オーギュスト・ルノワール《赤いコルサージュの少女》1905年頃 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵（※パネル展示）
23. ピエール＝オーギュスト・ルノワール《カーニユのテラス》1905年 / 油彩・カンヴァス / 外洋33



- 
24. ピエール＝オーギュスト・ルノワール《すわる水浴の女》1914年 / 油彩・カンヴァス / 外洋34
  25. アンリ・ルソー《イヴリー河岸》1907年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋43
  26. アンリ・ルソー《牧場》1910年 / 油彩・カンヴァス / 外洋42
  27. ポール・ゴーガン《乾草の取入れ》1884年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵（※パネル展示）
  28. ポール・ゴーガン《ボン＝タヴェン付近の風景》1888年 / 油彩・カンヴァス / 外洋37
  29. ポール・ゴーガンに帰属《若い女の顔》1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋36
  30. ポール・シニャック《コンカルノー港》1925年 / 油彩・カンヴァス / 外洋45
  31. ピエール・ボナール《灯下》1899年 / 油彩・紙 / 外洋51
  32. ピエール・ボナール《桃》1920年 / 油彩・カンヴァス / 外洋52
  33. ピエール・ボナール《海岸》1920年 / 油彩・カンヴァス / 外洋53
  34. ピエール・ボナール《ヴェルノン付近の風景》1929年 / 油彩・カンヴァス / 外洋54
  35. アンリ・マティス《画室の裸婦》1899年 / 油彩・紙 / 外洋56
  36. アンリ・マティス《コリウール》1905年 / 油彩・厚紙 / 外洋141
  37. アンリ・マティス《縞ジャケット》1914年 / 油彩・カンヴァス / 外洋57
  38. アンリ・マティス《横たわる裸婦》1919年 / 油彩・カンヴァスボード / 外洋58
  39. アンリ・マティス《両腕をあげたオダリスク》1921年 / 油彩・カンヴァスボード / 外洋59
  40. ジョルジュ・ルオー《ピエロ》1925年 / 油彩・紙 / 外洋64
  41. ジョルジュ・ルオー《裁判所のキリスト》1935年 / 油彩・厚紙 / 個人蔵
  42. モーリス・ド・ヴラマンク《運河船》1905-06年 / 油彩・カンヴァス / 外洋69
  43. ラウル・デュフィ《静物》1915-20年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋73
  44. アンドレ・ドラン《自画像》 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
  45. パブロ・ピカソ《生木と枯木のある風景》1919年 / 油彩・カンヴァス / 外洋143
  46. パブロ・ピカソ《女の顔》1923年 / 油彩、砂・カンヴァス / 外洋84
  47. パブロ・ピカソ《茄子》1946年 / 油彩、グワッシュ・紙 / 外洋85
  48. ジョルジュ・ブラック《梨と桃》1924年 / 油彩・板 / 外洋86
  49. モーリス・ユトリロ《サン＝ドニ運河》1906-08年 / 油彩・紙 / 外洋77
  50. マルク・シャガール《ヴァンスの新月》1955-56年 / グワッシュ・紙 / 外洋90

#### 【資料編】

1. 『コネサンス・デザール』誌 / 1958（昭和33）年11月
2. プリヂストン美術館『芳名録』 / 1959（昭和34）年－1962（昭和37）年
3. 「東京石橋コレクション所蔵—コローからブラックに至るフランス絵画展」展覧会カタログ / 1962（昭和37）年
4. 「東京石橋コレクション所蔵—コローからブラックに至るフランス絵画展」展覧会ポスター / 1962（昭和37）年
5. 團伊能「ほめられた佳品ぞろい」日本経済新聞 / 1962（昭和37）年4月18日
6. 「パリの話題のまと石橋コレクション展」朝日新聞 / 1962（昭和37）年5月21日
7. ピエール・カバンス「三人の蒐集家」『アール』紙 / 1962（昭和37）年5月5日
8. 「コレクションと蒐集家」『レ・ヌーヴェル・リテレル』紙 / 1962（昭和37）年5月10日
9. 「石橋コレクションとすばらしい西洋絵画の美術館 パリに來たる」『レ・レットル・フランセーズ』紙 / 1962（昭和37）年5月10日
10. 展覧会記録アルバム / 1962（昭和37）年
11. 記録映画「石橋コレクション展 パリ」 / 1965年製作

\*所蔵表記のないものは、すべてプリヂストン美術館蔵。

## 関連事業：

土曜講座「石橋コレクション徹底研究〔西洋絵画編〕—カラーからブラックまで」→p.47  
ギャラリートーク

## 広報記録：

### 新聞・雑誌：

島田紀夫「ときの人33 正二郎の“眼”と“心” 受け継がれて60年」『新美術新聞』2011年11月11日  
島田紀夫、吉村葉子「石橋財団ブリヂストン美術館が開館60周年 3つの記念展〈パリへ渡った「石橋コレクション」1962年、春〉〈あなたに見せたい絵があります。〉〈ドビュッシー—音楽と美術(仮称)—を開催」『週刊読書人』2012年1月6日  
「ピカソ『女の顔』に思い入れ『ブリヂストン』60周年」『週刊新潮』2012年1月19日迎春特別増大号、p.137  
岸桂子「@展覧会 パリへ渡った『石橋コレクション』1962年、春 鮮明になる収集の方向性」『毎日新聞』2012年1月24日夕刊  
田所夏子「「パリへ渡った『石橋コレクション』1962年、春」展 ブリヂストン美術館の原点—開館60周年をむかえて」『新美術新聞』2012年2月1日  
田所夏子「ぎやらいいモール」『読売新聞』2012年2月7日夕刊  
「ブリヂストン美術館、開館60年記念展」『読売新聞』2012年2月2日  
窪田直子「西洋絵画 収集の原点「パリへ渡った『石橋コレクション』」展」『日本経済新聞』2012年2月1日  
下野綾「50年前の『里帰り展』再現 パリへ渡った『石橋コレクション』東京・京橋」『神奈川新聞』2012年2月8日  
木谷節子「カルチャーセクション art」『婦人公論』2012年2月7日号、p.69  
共同通信社「セザンヌやマチス展示 ブリヂストン美術館60周年」『中國新聞』2012年2月25日  
太田治子「art 美術 発見玉手箱 母と通った思い出の美術館」『毎日が発見』2012年2月号、p.140  
「Special Exhibition ② 石橋コレクションの原点を回顧する」『ギャラリー2』2012年 2月号、pp 14-15  
田所夏子「アート・トーキング アンリ・ルソー Henri Rousseau 『イヴリー河岸』」『日本経済新聞』2012年3月8日  
白坂ゆり「Don't miss it! April Art・ミュージシャン、カミヒ・カリイさんが見る『パリへ渡った「石橋コレクション」—一九六二年、春」展」『SPUR』4月号



会場風景



会場風景



会場風景



会場風景



## あなたに見せたい絵があります。—ブリヂストン美術館開館60周年記念〈特別展〉

会期：2012年3月31日(土)－6月24日(日)

会場：第1－10室、彫刻ギャラリー1、2

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

概要：開館60周年を記念して、石橋財団所蔵作品から109点の代表作を選び出し、11のテーマ別に分けて展示した。ブリヂストン美術館から84点、石橋美術館から25点。テーマは、「自画像」「肖像画」「スード」「モデル」「レジャー」「物語」「山」「川」「海」「静物」「現代美術」。あわせて前年度購入したギュスターヴ・カイユボット《ピアノを弾く若い男》、岡鹿之助《セヌ河畔》を初公開し、参考図版入り解説パネルをつけた。他の107点にはすべて、小学校高学年を対象に考えた分かりやすい作品解説を付した。

出品内容：絵画109点

入場者総数：56,545人(1日平均681人)

### 出品目録：

#### 第1章 自画像

1. レンブラント・ファン・レイン《帽子と襟巻を着けた暗い顔のレンブラント》/ 1663年 / エッチング・紙 / BMA / 外版175
2. エドゥアール・マネ《自画像》/ 1878-79年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋121
3. ポール・セザンヌ《帽子をかぶった自画像》/ 1890-94年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋31
4. 藤島武二《自画像》/ 1903年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋12
5. パブロ・ピカソ《画家とモデル》/ 1963年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋144
6. 青木繁《自画像》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋87
7. 坂本繁二郎《自像》/ 1923-30年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋300
8. 中村彝《自画像》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋141
9. 小出楯重《帽子をかぶった自画像》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋137
10. 古賀春江《自画像》/ 1916年 / 水彩・紙 / IMA / 日洋322

#### 第2章 肖像画

11. エドガー・ドガ《レオポール・ルヴェールの肖像》/ 1874年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋162
12. ピエール＝オーギュスト・ルノワール《すわるジョルジェット・シャルパンティエ嬢》/ 1876年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋169
13. ピエール＝オーギュスト・ルノワール《少女》/ 1887年 / パステル・紙 / BMA / 外洋165
14. ギュスターヴ・カイユボット《ピアノを弾く若い男》/ 1876年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋229
15. 黒田清輝《針仕事》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋7
16. パブロ・ピカソ《女の顔》/ 1923年 / 油彩、砂・カンヴァス / BMA / 外洋84
17. 岸田劉生《麗子像》/ 1922年 / テンペラ・カンヴァス / IMA / 日洋226
18. 藤田嗣治《横たわる女と猫》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋215
19. 関根正二《子供》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋178

---

### 第3章 ヌード

20. エドガー・ドガ《浴後》/ 1900年頃 / パステル・紙 / BMA / 外洋18
21. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわる水浴の女》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋136
22. アンリ・マティス《画室の裸婦》/ 1899年 / 油彩・紙 / BMA / 外洋56
23. 岡田三郎助《水浴の前》/ 1916年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋63
24. 和田英作《チューリップ》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋65
25. 安井曾太郎《水浴裸婦》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋142
26. 国吉康雄《横たわる女》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋158

### 第4章 モデル

27. カミーユ・コロー《森の中の若い女》/ 1865年 / 油彩・板 / BMA / 外洋159
28. 黒田清輝《ブレハの少女》/ 1891年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋8
29. 藤島武二《黒扇》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋26
30. 藤島武二《チョチャラ》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋25
31. アンリ・マティス《青い胴着の女》/ 1935年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋62
32. 坂本繁二郎《帽子を持てる女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋195

### 第5章 レジャー

33. ウジェーヌ・ブーダン《トルーヴィル近郊の浜》/ 1865年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋172
34. エドゥアール・マネ《オペラ座の仮装舞踏会》/ 1873年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋14
35. アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック《サーカスの舞台裏》/ 1887年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋227
36. ピエール・ボナール《灯下》/ 1899年 / 油彩・紙 / BMA / 外洋51
37. ジョルジュ・ルオー《ピエロ》/ 1925年 / 油彩・紙 / BMA / 外洋64
38. ラウル・デュフィ《オーケストラ》/ 1942年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋123
39. パブロ・ピカソ《腕を組んですわるサルタンバンク》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋160

### 第6章 物語

40. レンブラント・ファン・レイン《聖書あるいは物語に取材した夜の情景》/ 1626-28年 / 油彩・銅板 / BMA / 外洋5
41. オノレ・ドーミエ《山中のドン・キホーテ》/ 1850年頃 / 油彩・板 / BMA / 外洋171
42. 藤島武二《天平の面影》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋11
43. モーリス・ドニ《バッカス祭》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋65
44. ジョルジュ・ルオー《郊外のキリスト》/ 1920-24年 / 油彩・紙 / BMA / 外洋142
45. 青木繁《天平時代》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋91
46. 青木繁《海の幸》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋95
47. 青木繁《大穴牟知命》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋197
48. 青木繁《わだつみのいろこの宮》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋104

### 第7章 山

49. 雪舟《四季山水図》/ 室町時代(15世紀) / 絹本墨画淡彩 / IMA / 日書1、2、3、4
50. カミーユ・コロー《ヴィル・ダヴレー》/ 1835-40年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋7
51. カミーユ・コロー《オンフルールのトゥータン農場》/ 1835-40年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋8

- 
52. ギュスターヴ・クールベ《雪の中を駆ける鹿》/ 1856-57年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋170
  53. ポール・セザンヌ《サント=ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》/ 1904-06年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋32
  54. アンリ・ルソー《牧場》/ 1910年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋42
  55. ポール・ゴーガン《ポン=タヴェン付近の風景》/ 1888年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋37
  56. ポール・ゴーガン《乾草》/ 1889年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋38
  57. 坂本繁二郎《放牧三馬》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋114
  58. 岡鹿之助《雪の発電所》/ 1956年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋297

## 第8章 川

59. カミーユ・ピサロ《ブージュヴァルのセヌ河》/ 1870年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋19
60. カミーユ・ピサロ《菜園》/ 1878年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋20
61. アルフレッド・シスレー《森へ行く女たち》/ 1866年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋25
62. アルフレッド・シスレー《サン=メメス六月の朝》/ 1884年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋26
63. クロード・モネ《アルジャントウイユの洪水》/ 1872-73年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋21
64. クロード・モネ《睡蓮》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋22
65. クロード・モネ《睡蓮の池》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋23
66. アンリ・ルソー《イヴリー河岸》/ 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋43
67. フィンセント・ファン・ゴッホ《モンマルトルの風車》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋122
68. 浅井忠《グレーの洗濯場》/ 1901年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋290
69. ピエール・ボナール《ヴェルノン付近の風景》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋54
70. モーリス・ド・ヴラマンク《運河船》/ 1905-06年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋69
71. モーリス・ユトリロ《サン=ドニ運河》/ 1906-08年 / 油彩・紙 / BMA / 外洋77
72. 佐伯祐三《テラスの広告》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋174
73. 岡鹿之助《セヌ河畔》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋583

## 第9章 海

74. クロード・モネ《雨のベリール》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋164
75. クロード・モネ《黄昏、ヴェネツィア》/ 1908年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋24
76. ポール・シニャック《コンカルノー港》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋45
77. アンリ・マティス《コリウール》/ 1905年 / 油彩・厚紙 / BMA / 外洋141
78. ピート・モンドリアン《砂丘》/ 1909年 / 油彩、鉛筆・厚紙 / BMA / 外洋203
79. パウル・クレー《島》/ 1932年 / 油彩、砂を混ぜた石膏・板 / BMA / 外洋202
80. 藤島武二《淡路島遠望》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋47
81. 藤島武二《浪（大洗）》/ 1931年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋48
82. 藤島武二《屋島よりの遠望》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋50
83. 藤島武二《東海旭光》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋51
84. 青木繁《海景（布良の海）》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋100
85. 坂本繁二郎《魚を持ってきた海女》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋204

## 第10章 静物

86. ポール・セザンヌ《鉢と牛乳入れ》/ 1873-77年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋28
87. ポール・ゴーガン《馬の頭部のある静物》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋168
88. ピエール・ボナール《桃》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋52

- 
89. パブロ・ピカソ《ブルゴーニュのマール瓶、グラス、新聞紙》/ 1913年 / 油彩、砂、新聞紙・カンヴァス / BMA / 外洋173
90. 坂本繁二郎《能面と鼓の胴》/ 1962年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋568
91. 藤田嗣治《猫のいる静物》/ 1939-40年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋131
92. 藤田嗣治《ドルドーニュの家》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋132
93. 安井曾太郎《薔薇》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋143
94. 安井曾太郎《レモンとメロン》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋268
95. 古賀春江《素朴な月夜》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋161

## 第11章 現代美術

96. ワシリー・カンディンスキー《二本の線》/ 1940年 / ミクストメディア・カードボード / BMA / 外洋217
97. ハンス・ホフマン《Push and Pull II》/ 1950年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋211
98. フェルナン・レジェ《抽象的コンポジション》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋219
99. ジョアン・ミロ《絵画》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋187
100. ジャン・フォートリエ《旋回する線》/ 1963年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / BMA / 外洋189
101. セルジュ・ボリアコフ《コンポジション》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋215
102. ジャン・デュビュッフェ《暴動》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋193
103. アンス・アルトウング《T.1963-K 7》/ 1963年 / アクリル・カンヴァス / BMA / 外洋228
104. 斎藤義重《WORK》/ 1961年 / 油彩・合板 / BMA / 日洋578
105. ジャクソン・ポロック《Number 2, 1951》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋209
106. 菅井汲《赤い鬼》/ 1954年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋579
107. ピエール・スーラージュ《絵画、26 May 1969》/ 1969年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋210
108. 野見山暁治《風の便り》/ 1997年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋520
109. ザオ・ウーキー《07.06.85》/ 1985年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋197

\*BMA はブリヂストン美術館、IMA は石橋美術館の所蔵を示す。

## 関連事業：

土曜講座「ブリヂストン美術館と私」→p.47  
ギャラリートーク

## 広報記録：

### 新聞・雑誌：

「ブリヂストン美術館60周年記念展 近代絵画の名品を一堂に」『日本経済新聞』2012年3月24日夕刊  
貝塚健「『あなたに見せたい絵があります。—ブリヂストン美術館開館60周年記念』展に寄せて」『週刊読書人』2012年4月6日  
貝塚健「石橋財団コレクションとの新たな出会いを期待」『新美術新聞』2012年4月11日  
貝塚健「アートを楽しむコツ / 2012年東京はアートのあたり年」『東京リビング』2012年4月12日  
岸桂子「アート小路『あなたに見せたい絵があります。』展 終わりにき努力」『毎日新聞』2012年4月16日夕刊  
増田愛子「美の履歴書『放牧三馬』馬を通して見たものは」『朝日新聞』2012年4月25日夕刊  
「ブリヂストン収蔵の絵画展示」『産経新聞』2012年5月4日  
ヨミウリジュニアプレス「なるほど鑑賞室『物語』『川』…テーマ別に展示」『読売新聞』2012年5月12日夕刊

島田紀夫「良質な日本と西洋の近代絵画コレクション・新たな魅力を伝えたい」『公明新聞』2012年5月23日  
西岡一正「近代の傑作集め「還暦」2館 東京国立近代美術館・ブリヂストン美術館」『朝日新聞』  
2012年5月30日夕刊

「Tokyo BRIDGESTONE MUSEUM OF ART AT SIXTY: YOU'VE GOT TO SEE THESE PAINTINGS」『International Herald Tribune』2012年6月2、3日

「西洋美術史総まとめ12 ピカソ降臨。」『BRUTUS』2012年5月1日号、p.73

秋川ゆか「60周年を迎えた石橋コレクションの多彩な名画の数々を一堂に展示」『男の隠れ家』2012年5月号、  
p.136

峰順一「峰順一の私立美術館めぐり⑥石橋財団・ブリヂストン美術館⑤—あなたに見せたい絵があります。」  
『メディカル クォール』2012年5月号、pp.76-77

米谷一志「ブリヂストン美術館 洋の東西、時代を超え、名品たちが一堂に会う 開館60周年記念展」『芸術新潮』2012年5月号

金子美樹「底光りする写実から外光派のアカデミズムまで 近代日本洋画の流れを読む」『月刊美術』  
2012年6月号、pp.32-35

「2012年開催の近代美術展覧会ガイド 近代美術の傑作には、ここで出会える！」『美術手帖』2012年6月号、  
pp.198-199

清川妙「新・言葉の森 神話の国の物語 海佐知 山佐知【前編】」『いきいき』2012年12月6月号、pp.56-61

清川妙「新・言葉の森 神話の国の物語 海佐知 山佐知【後編】」『いきいき』2012年12月7月号、pp.44-49

平間理香「蔵出し水墨画の逸品③ 雪舟《四季山水図》」『月刊水墨画』2012年7月号、p.62

テレビ・ラジオ：

「あしたへ笑顔りんりん」（美術展紹介）エフエム江戸川、2012年3月14日放送

「RENDEZ-VOUS」（FIND TOMORROW）J-WAVE、2012年4月12日放送

「チェックタイムニュース」（イベント紹介）東京 MX テレビ、2012年4月13日放映

「チェックタイムニュース」（イベント紹介）東京 MX テレビ、2012年4月27日放映

「Re: wind」（アイコバナシ）FM ヨコハマ、2012年5月25日放送

「エル・ムンド」（木曜美術館）NHKBS 1、2012年6月7日放映



エントランス・バナー



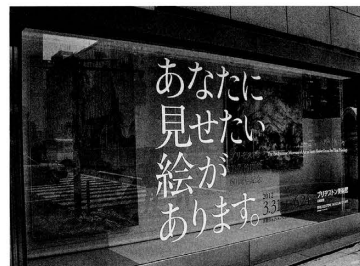
会場風景



会場風景



会場風景



西ウィンド

## ドビュッシー、音楽と美術—印象派と象徴派のあいだで〈特別展〉

会期：2012年7月14日(土)－10月14日(日)

会場：第1、2、4－8室

主催：オルセー美術館 / オランジュリー美術館 / 石橋財団ブリヂストン美術館 / 日本経済新聞社

後援：フランス大使館

協賛：NEC / 大日本印刷 / 東レ / みずほ銀行

協力：日本航空

概要：クロード・ドビュッシーは、19世紀末から20世紀初頭にかけて活躍したフランスを代表する作曲家。ドビュッシーが生きた時代には、音楽や美術、文学、舞台芸術が、互いに影響し合い、時に共同で作品をつくり上げたが、彼は作曲家の中ではその代表的な人物と言えるだろう。本展では、ドビュッシーと印象派や象徴派、さらにはジャポニスム等の関係に焦点をあて、19世紀フランス美術の新たな魅力を紹介した。なお、本展はドビュッシーの生誕150年を記念して、オルセー美術館とオランジュリー美術館、ブリヂストン美術館で共同開催した。

出品内容：絵画91点、彫刻・工芸31点、写真19点、楽譜・手紙22点  
計163点

入場者総数：137,366人(1日平均1,655人)



### 出品目録：

#### 第1章 ドビュッシー、音楽と美術

1. マルセル・バシエ《クロード・ドビュッシーの肖像》/ 1885年 / 油彩・板 / オルセー美術館
2. 不詳《クロード・ドビュッシーとヴィラ・メディチの寄宿生たち》/ 1885年頃 / 写真(複製) / クロード・ドビュッシー記念館
3. 不詳《ピアノを弾くクロード・ドビュッシーとエルネスト・ショーソン》/ 1893年5月 / 写真 / 個人蔵
4. ピエール・ルイス《クロード・ドビュッシーの肖像》/ 1894年5月 / 写真(複製) / クロード・ドビュッシー記念館
5. アンリ=エドモン・クロス《黄金の島》/ 1891-92年 / 油彩・カンヴァス / オルセー美術館

#### 第2章 《選ばれし乙女》の時代

6. エドワード・バーン=ジョーンズ《王女サブラ》/ 1865年 / 油彩・カンヴァス / オルセー美術館
7. エドワード・バーン=ジョーンズ《目をふせた若い女の頭部》/ 1872年頃 / 鉛筆・紙 / オルセー美術館
8. ダンテ・ガブリエル・ロセッティ《祝福されし乙女(習作)》/ 1873年頃 / 黒と赤のチョーク・紙 / ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館
9. マルセル・バシエ《春(習作)》/ 1887年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
10. モーリス・ドニ《ミューズたち》/ 1893年 / 油彩・カンヴァス / オルセー美術館
11. モーリス・ドニ《木々の下の人々の行列(緑の木々)》/ 1893年 / 油彩・カンヴァス / オルセー美術館



- 
12. クロード・ドビュッシー、モーリス・ドニ《選ばれし乙女》/ 1893年 / 楽譜、カラー・リトグラフの表紙 / ジャン=ダヴィッド・ジュモー=ラフォン氏蔵
  13. クロード・ドビュッシー、モーリス・ドニ《選ばれし乙女》/ 1893年 / 楽譜、カラー・リトグラフの表紙 / モーリス・ドニ美術館
  14. アンドレ・ジッド、モーリス・ドニ《ユリアンの旅》/ 1893年 / 書籍、リトグラフによる挿絵 / 個人蔵

### 第3章 美術愛好家との交流—ルロール、ショーソン、フォンテーヌ

15. ジャック=エミール・ブランシュ《クロード・ドビュッシーの肖像》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / ドゥニーズ・ジョベール=ジョルジュ夫人蔵
16. 不詳《ピアノを弾くドビュッシーとジャンヌ・ショーソン、ルロール家、ショーソン家とともに、リュザンシー》/ 1893年5月 / 写真 / 個人蔵
17. ピエール・ルイス《クロード・ドビュッシーの肖像》/ 1894年5月4日 / 写真 / 個人蔵
18. ピエール・ルイス《男性の帽子をかぶったギャビー・デュボン、ピエール・ルイス邸にて》/ 1894年頃 / 写真（複製） / フランス国立図書館（音楽部門）
19. 不詳《柳のそばに立つリリー・ドビュッシー》/ 1900年頃 / 写真（複製） / フランス国立図書館（音楽部門）
20. エドゥアル・ヴェイヤール《苦悩の人》/ 1890-91年 / パステル、木炭・黄褐色の紙 / オルセー美術館
21. エドゥアル・ヴェイヤール《アルチュール・フォンテーヌの肖像》/ 1901年頃 / 油彩・厚紙 / オルセー美術館
22. アンリ・ルロール《森にて》/ 1885年頃 / 油彩・板 / 個人蔵
23. アンリ・ルロール《肘掛け椅子のある室内》/ 1890年頃 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
24. アンリ・ルロール《室内、ピアノを弾くルロール夫人》/ 1890年頃 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
25. アンリ・ルロール《チュイルリー公園、夕暮れ》/ 1890年頃 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵、パリ
26. アンリ・ルロール《ピエール・ルイスへの手紙》/ 1896年6月11日 / ジャン=ダヴィッド・ジュモー=ラフォン氏蔵
27. カミユ・クローデル《立てる女性のトルソ》/ 1888年頃 / ブロンズ / リュシル・オードウィ氏蔵
28. モーリス・ドニ《結婚行進曲》/ 1894年 / 油彩・カンヴァス / リュシル・オードウィ氏蔵
29. モーリス・ドニ《ファランドール》/ 1895年 / 油彩・カンヴァス / 個人蔵
30. ピエール・ピュヴィ・ド・シャヴァンヌ《オルフェウス》/ 1895年 / 油彩・カンヴァス / オルセー美術館
31. ピエール=オーギュスト・ルノワール《ピアノに向かうイヴォンヌとクリスティーヌ・ルロール》/ 油彩・カンヴァス / オランジュリー美術館
32. ギュスターヴ・カイユボット《ピアノを弾く若い男》/ 1876年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋229
33. エドガー・ドガ《レオポール・ルヴェールの肖像》/ 1874年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋162
34. エドガー・ドガ《浴後》/ 1900年頃 / パステル・紙 / BMA / 外洋18
35. エドガー・ドガ《踊りの稽古場にて》/ 1895-98年 / パステル・紙 / BMA / 外洋17
36. エドガー・ドガ《イヴォンヌとクリスティーヌ・ルロールと一緒にいるドガ》/ 1895年 / 写真（複製） / オルセー美術館
37. エドガー・ドガ《鏡のそばのアンリ・ルロールと二人の娘、クリスティーヌとイヴォンヌ》/ 1895-96年 / 写真（複製） / オルセー美術館
38. エドモン・アマン=ジャン《イヴォンヌ・ルロールの肖像》/ 1896年 / 油彩・カンヴァス / リュシ

#### 第4章 アール・ヌーヴォーとジャポニスム

39. モーリス・ドニ《木の葉に埋もれたはしご（天井装飾のための詩情に満ちたアラベスク文様）》/ 1892年 / 油彩・板に貼られたカンヴァス / モーリス・ドニ美術館
40. モーリス・ドニ《黄色の舟》/ 1893年 / グアッシュ・厚紙に貼られた紙 / モーリス・ドニ美術館
41. モーリス・ドニ《バッカス祭》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋65
42. エミール・ガレ《たまり水》/ 1889-90年 / ガラス / オルセー美術館
43. エミール・ガレ《蜻蛉草花文花瓶》/ 1880-1900年頃 / ガラス / BMA / 雑56
44. エミール・ガレ《過ぎ去りし苦しみの葉》/ 1900年 / ガラス / ヘントリッヒ・ガラス美術館
45. ジャン・カリエス《壺》/ 不詳 / 陶器 / パリ市立プティ・パレ美術館
46. ジャン・カリエス《花瓶》/ 不詳 / 陶器 / パリ市立プティ・パレ美術館
47. ジャン・カリエス《水筒》/ 不詳 / 陶器 / パリ市立プティ・パレ美術館
48. アレクサンドル・シャルパンティエ《歌》/ 1892年 / ブロンズ（錠前）/ オルセー美術館
49. アレクサンドル・シャルパンティエ《ヴァイオリン（音楽）》/ 1892年 / ブロンズ（錠前）/ オルセー美術館
50. クロード・ドビュッシー《叙情的散文》/ 1895年 / 楽譜 / フィリップ・アントルモン氏蔵
51. エルネスト・ショーソン《ピアノ曲「風景 op.38」》/ 1899年 / 楽譜 / フランス国立図書館（音楽部門）
52. ポール・ランソン《春》/ 1895年 / カンヴァスに貼られたタピスリー / オルセー美術館
53. オーギュスト・ロダン《青銅時代》/ 1904年 / ブロンズ / BMA / 外彫38
54. カミユ・クローデル《懇願》/ 1900年 / ブロンズ / ロダン美術館
55. カミユ・クローデル《ワルツ》/ 1893-95年 / 石膏 / ポール・デュヴォワ=アルフレッド・ブーシェ美術館
56. 不詳《眠る中国人のいるインク壺》/ 18世紀 / 鍋島焼 / パリ音楽博物館（クロード・ドビュッシー記念館に寄託）
57. 不詳《文鎮「アルケル」》/ 19世紀 / 檜材 / パリ音楽博物館（クロード・ドビュッシー記念館に寄託）
58. 不詳《煙草入れ》/ 20世紀初頭（日本）/ 金属の上に蒔絵 / クロード・ドビュッシー資料センター
59. 南州《金の魚》/ 19世紀 / 蒔絵（日本の家具の一部か）/ クロード・ドビュッシー記念館
60. 不詳《ペーパーナイフ》/ 19世紀 / 木、絹の紐の飾り / クロード・ドビュッシー資料センター
61. ウイリアム・アーサー・スミス・ベンソン《オイルランプ（電化された）》/ 鉄、銅、真ちゅう / クロード・ドビュッシー記念館
62. 不詳《酒器》/ 17世紀（中国）/ 白磁 / ギメ国立東洋美術館
63. 不詳《ヒョウタン》/ 江戸時代末-明治初頭 / 磁器 / ギメ国立東洋美術館
- 64-1. 葛飾北斎《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》/ 1831-34年 / 大判・錦絵 / 平木浮世絵美術館  
※展示期間7月14日-8月12日
- 64-2. 葛飾北斎《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》/ 1831-34年 / 大判・錦絵 / 原コレクション
- 64-3. 葛飾北斎《富嶽三十六景 神奈川沖浪裏》/ 1831年頃 / 大判・錦絵 / 墨田区  
※展示期間8月14日-8月26日
65. クロード・ドビュッシー《海—3つの交響的スケッチ》/ 1905年 / 楽譜 / 個人蔵
66. クロード・ドビュッシー《版画、塔、グラナダの夕べ、雨の庭》/ 1903年 / 楽譜 / 個人蔵
67. クロード・ドビュッシー《子供の領分》/ 1908年 / 楽譜 / 個人蔵
68. イーゴリ・ストラヴィンスキーに帰属《クロード・ドビュッシーとエリック・サティ、ボワ＝ド＝ブローニユのドビュッシー邸にて》/ 1910年6-7月 / 写真 / ティエリー・ボダン氏蔵

- 
69. 不詳《弥勒菩薩半跏思惟像》/ 6-7世紀(朝鮮) / ブロンズ / ギメ国立東洋美術館
70. 不詳《僧座像》/ 江戸時代(18-19世紀) / 彩色された木 / ギメ国立東洋美術館
- 71-1. 歌川広重《名所江戸百景 深川洲崎十萬坪》/ 1857年 / 大判・錦絵 / 平木浮世絵美術館  
※展示期間7月14日-8月12日
- 71-2. 歌川広重《名所江戸百景 深川洲崎十萬坪》/ 1857年 / 大判・錦絵 / 東京国立博物館  
※展示期間8月14日-9月9日
- 72-1. 歌川広重《東海道五十三次之内 庄野 白雨》/ 1833-34年 / 大判・錦絵 / 平木浮世絵美術館  
※展示期間7月14日-8月12日
- 72-2. 歌川広重《東海道五十三次之内 庄野 白雨》/ 天保中期(1830-44年) / 木版 / 東京都歴史文化財団(東京都江戸東京博物館寄託)  
※展示期間9月11日-10月14日
- 72-3. 歌川広重《東海道五十三次之内 庄野 白雨》/ 1833年 / 大判・錦絵 / 原コレクション
- 73-1. 歌川広重《名所江戸百景 真間の紅葉手古那の社継はし》/ 1857年 / 大判・錦絵 / 平木浮世絵美術館  
※展示期間7月14日-8月12日
- 73-2. 歌川広重《名所江戸百景 真間の紅葉手古那の社継はし》/ 1857年 / 大判・錦絵 / 東京都江戸東京博物館  
※展示期間9月11日-10月14日
- 73-3. 歌川広重《名所江戸百景 真間の紅葉手古那の社継はし》/ 1857年 / 大判・錦絵 / 東京国立博物館  
※展示期間8月14日-9月9日
74. 歌川広重《東海道五十三次 水口》/ 1838-40年 / 錦絵 / ドミニク・ブラシェ=ペテル氏蔵
75. 不詳《日本の扇子》/ 19世紀末 / 紙に着色、木、絹糸 / ピエレットとティエリー・ボダン氏蔵
76. ジェームズ・アボット・マクニール・ホイッスラー《紫と緑のヴァリエーション》/ 1871年 / 油彩・カンヴァス / オルセー美術館
77. ボール・ゴガン《馬の頭部のある静物》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋168
78. ボール・ゴガン《乾草》/ 1889年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋38

## 第5章 古代への回帰

79. クロード・ドビュッシー《牧神の午後のための前奏曲》/ 1895年 / 楽譜 / フランス国立図書館(音楽部門)
80. アドルフ・メイヤー《身をかがめたニンフ》/ 1914年 / 写真(複製) / オルセー美術館
81. アドルフ・メイヤー《両腕を上げたニンフ》/ 1914年 / 写真(複製) / オルセー美術館
82. アドルフ・メイヤー《牧神と4人のニンフ》/ 1914年 / 写真(複製) / オルセー美術館
83. アドルフ・メイヤー《両腕を上げた半面像のニンフ》/ 1914年 / 写真(複製) / オルセー美術館
84. アドルフ・メイヤー《笛に口をあて右脚を立てて横たわるニジンスキー》/ 1914年 / 写真(複製) / オルセー美術館
85. アドルフ・メイヤー《牧神(ヴァーツラフ・ニジンスキー)と大ニンフ(リディア・ネリドヴァ)》/ 1914年 / 写真(複製) / オルセー美術館
86. アドルフ・メイヤー《大ニンフのスカーフの上に横たわる牧神(バレエの最終場面)》/ 1914年 / 写真(複製) / オルセー美術館
87. 「ヴェイイの画家」周辺 アッティカ赤絵式キュリクス《サテュロス図》/ 紀元前5世紀中頃 / 陶器 / BMA / 陶器89
88. 「ビスティッチの画家」に帰属《メナドを追いかけるサテュロス》/ 紀元前430年頃 / 陶器 / ルーヴル美術館(古代ギリシア・エトルリア・ローマ部門)
89. 不詳《カノーポスの壺》/ エジプト新王朝時代 / 彩色された陶土 / パリ音楽博物館(クロード・ド

---

ビュッシー記念館に寄託)

90. 不詳《ピリティス》/ 紀元前5世紀前半 / 彩色された粘土 / ルーヴル美術館 (古代ギリシア・エトルリア・ローマ部門)
91. アーノルド・ロイトリンガー工房《ピエール・ルイスの肖像》/ 1893年頃 / 写真(複製) / クロード・ドビュッシー記念館

## 第6章 《ベレアスとメリザンド》

92. アンリ=エドモン・クロス《髪》/ 1892年頃 / 油彩・カンヴァス / オルセー美術館
93. エドワード・スタイケン《モーリス・メーテルリンクの肖像》/ 1906年 / 写真(複製) / オルセー美術館
94. カルロス・シュヴァーベ《モーリス・メーテルリンク『ベレアスとメリザンド』》/ 1924年 / 書籍 / ジャン=ダヴィッド・ジュモー=ラフォン氏蔵
95. モーリス・ドニ《ベレアスとメリザンド》/ 1892年 / リトグラフ / モーリス・ドニ美術館
96. モーリス・ドニ《イヴォンヌ・ルロールの3つの肖像》/ 1897年 / 油彩・カンヴァス / オルセー美術館
97. クロード・ドビュッシー《「ベレアスとメリザンド」第4幕第3場のための試作》/ 手書き原稿 / フランス国立図書館 (音楽部門)
98. クロード・ドビュッシー《ベレアスとメリザンド》/ 1902年 / 楽譜 / 個人蔵
99. クロード・ドビュッシー《ベレアスとメリザンド》/ 1907年 / 楽譜 / ジャン=ミシェル・ネクトゥー氏蔵
100. クロード・ドビュッシー《アンリ・ルロールへの手紙》/ 1895年8月17日 / インク・紙 / ステファン・ルロール氏蔵
101. シャルル・ビアンキーニ《メリザンド「ベレアスとメリザンド」第1幕第3場・第2幕第1場のための衣装》/ 1902年 / 鉛筆、ペン、インク、水彩・紙 / ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館 (演劇・パフォーマンス部門)
102. シャルル・ビアンキーニ《ベレアス「ベレアスとメリザンド」第2幕第1場のための衣装》/ 1902年 / 鉛筆、ペン、インク、水彩・紙 / ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館 (演劇・パフォーマンス部門)
103. シャルル・ビアンキーニ《負傷したゴロー「ベレアスとメリザンド」第2幕第1場のための衣装》/ 1902年 / 鉛筆、ペン、インク、水彩・紙 / ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館 (演劇・パフォーマンス部門)
104. シャルル・ビアンキーニ《イニョルド「ベレアスとメリザンド」のための衣装》/ 1902年 / 鉛筆、ペン、インク、水彩・紙 / ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館 (演劇・パフォーマンス部門)
105. シャルル・ビアンキーニ《老王アルケル「ベレアスとメリザンド」のための衣装》/ 1902年 / 鉛筆、ペン、インク、水彩・紙 / ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館 (演劇・パフォーマンス部門)
106. シャルル・ビアンキーニ《ジュヌヴィエーヴ「ベレアスとメリザンド」のための衣装》/ 1902年 / 鉛筆、ペン、インク、水彩・紙 / ヴィクトリア・アンド・アルバート博物館 (演劇・パフォーマンス部門)
107. ヴァレンティヌス・ユゴー《「ベレアスとメリザンド」のための舞台装飾：第1幕第1場》/ 1947年 / 色鉛筆・紙 / フランス国立図書館 (オペラ座図書館)
108. ヴァレンティヌス・ユゴー《「ベレアスとメリザンド」のための舞台装飾：第2幕第1場、第4幕第3場》/ 1947年 / 色鉛筆・紙 / フランス国立図書館 (オペラ座図書館)
109. ヴァレンティヌス・ユゴー《「ベレアスとメリザンド」のための舞台装飾：第3幕第1場》/ 1947年 / 色鉛筆・紙 / フランス国立図書館 (オペラ座図書館)

## 第7章 《聖セバスチアンの殉教》《遊戯》

- 110. レオン・バクスト 《「聖セバスチアンの殉教」のための舞台装飾：第3幕「異教神の宗教会議」》 / 1910年 / 鉛筆、グワッシュ・紙 / コンスタンティノヴィッツ・コレクション ※不出品
- 111. ガブリエル・ダヌンツィオ 《「聖セバスチアンの殉教」の序文》 / 1911年 / 手書き原稿、赤と黒のインク / ティエリー・ボダン氏蔵
- 112. レオン・バクスト 《「遊戯」のためのデザイン》 / 1913年頃 / 鉛筆、パステル・カンヴァス / マクネイ美術館
- 113. ピエール・ボナール 《「遊戯」のための素描》 / 1920年 / 鉛筆・紙 / ボナール美術館
- 114. クロード・ドビュッシー、アンドレ・エレ 《おもちゃ箱》 / 1913年 / 手書き原稿 / フランス国立図書館（オペラ座図書館）

## 第8章 美術と文学と音楽の親和性

- 115. アンリ・ド・グルー 《クロード・ドビュッシーの胸像》 / 1919年 / ブロンズ / フランス国立図書館（オペラ座図書館）
  - 116. ルイズ・オクセ 《クロード・ドビュッシーのマスク》 / 1920年頃 / 石膏 / 個人蔵
  - 117. ルイズ・オクセ 《クロード・ドビュッシーのマスク》 / 1920年頃 / ブロンズ / 個人蔵
  - 118. エドゥアール・マネ 《ステファヌ・マラルメの肖像》 / 1876年 / 油彩・カンヴァス / オルセー美術館
  - 119. ウジェーヌ・カリエール 《ポール・ヴェルレーヌの肖像》 / 1890年 / 油彩・カンヴァス / オルセー美術館
  - 120. アンリ・デトゥーシュ 《クロード・ドビュッシーの肖像》 / 1908年頃 / 鉛筆・紙 / フィリップ・アントルモン氏蔵
  - 121. クロード・ドビュッシー 《「みやびやかな宴」第1集第3曲「月の光」》 / 1891-92年 / 手書き原稿 / ティエリー・ボダン氏蔵
  - 122. クロード・ドビュッシー 《「みやびやかな宴」第2集》 / 1904年 / 手書き原稿 / フランス国立図書館（音楽部門）
  - 123. クロード・ドビュッシー 《トリスタン・レルミットの3つの詩》 / 1910年 / 手書き原稿 / フランス国立図書館（音楽部門）
  - 124. クロード・ドビュッシー 《「おもちゃ箱」「花火」そしてマラルメの詩「あらはれ」「ため息」「扇」のためのエスキス》 / 1912-13年 / 黒鉛筆、青鉛筆、青インク、黒インク、赤インク・紙 / フランス国立図書館（音楽部門）
  - 125. エリック・サティ 《薔薇十字会の鐘》 / 1892年 / 楽譜（初版） / フランス国立図書館（音楽部門）
  - 126. オディロン・ルドン 《神秘の語らい》 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋178
  - 127. オディロン・ルドン 《供物》 / 油彩・厚紙 / BMA / 外洋179
  - 128. オディロン・ルドン 《『夢想』Ⅲ うつろいやすい光、夢幻に吊されたひとつの顔》 / 1891年 / リトグラフ / BMA / 外版434-4  
※展示期間8月28日-10月14日
  - 129. オディロン・ルドン 《『夢想』Ⅳ 日の光》 / 1891年 / リトグラフ / BMA / 外版434-7
  - 130. オディロン・ルドン 《『幽霊屋敷』2 私は大きく蒼い微光を見た》 / 1896年頃 / リトグラフ / 神奈川県立近代美術館  
※展示期間7月14日-8月26日
- 特別出品 ギュスターヴ・モロー 《化粧》 / 1885-90年頃 / グワッシュ、水彩・紙 / BMA / 外洋120

## 第9章 靈感源としての自然—ノクターン、海景、風景

- 131. カミーユ・コロー 《トルーヴィル、海峡に集まる漁船》 / 1848-75年 / 油彩・カンヴァスに貼られた

---

紙 / オルセー美術館

132. ウジェーヌ・ブーダン《トルーヴィル近郊の浜》/ 1865年頃 / 油彩・板 / BMA / 外洋172  
133. エドゥアール・マネ《浜辺にて》/ 1873年 / 油彩・カンヴァス / オルセー美術館  
134. ウィンスロー・ホーマー《夏の夜》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / オルセー美術館  
135. クロード・モネ《嵐、ベリール》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / オルセー美術館  
136. クロード・モネ《雨のベリール》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋164  
137. クロード・モネ《睡蓮》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋22  
138. クロード・モネ《睡蓮の池》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋23  
139. クロード・モネ《黄昏、ヴェネツィア》/ 1908年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋24  
140. エミール・ガレ《海》/ 1900年 / ガラス / オルセー美術館  
141. ポール・ゴーガン《牛のいる風景》/ 1888年 / 油彩・カンヴァス / オルセー美術館  
142. ポール・ゴーガン《ポン=タヴェン付近の風景》/ 1888年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋37  
143. ウジェーヌ・カリエール《クリュシー広場、夜》/ 1899-1900年 / 油彩・カンヴァス / オルセー美術館  
144. アレクサンダー・ハリソン《海景》/ 1892-93年 / 油彩・カンヴァス / オルセー美術館  
145. ポール・セリュジエ《タリスマン（護符）》/ 1888年 / 油彩・板 / オルセー美術館  
146. ピエール・ボナール《ヴェルノン付近の風景》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋54  
147. エミール・ベルナール《イポールの断崖》/ 1892年 / 油彩・カンヴァス / ダニエル・マラング氏蔵  
148. ジョルジュ・ラコンブ《紫色の波》/ 1895-96年 / 油彩・カンヴァス / オルセー美術館  
149. シャルル・ラコスト《影の手》/ 1896年 / 油彩・カンヴァス / オルセー美術館  
150. クロード・ドビュッシー《「ピアノのために プレリユード、サラバンド、トッカータ」》/ 1901年 / 楽譜 / 個人蔵  
151. クロード・ドビュッシー《「水に映る影」(「映像」第1集)》/ 1905年 / 手書き原稿 / フランス国立図書館 (音楽部門)

## 第10章 新しい世界

152. ポール・シニャック《コンカルノー港》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋45  
153. アンリ・マティス《画室の裸婦》/ 1899年 / 油彩・紙 / BMA / 外洋56  
154. モーリス・ド・ヴラマンク《運河船》/ 1905-06年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋69  
155. ビート・モンドリアン《砂丘》/ 1909年 / 油彩、鉛筆・厚紙 / BMA / 外洋203  
156. パウル・クレー《島》/ 1932年 / 油彩、砂を混ぜた石膏・板 / BMA / 外洋202  
157. ワシリー・カンディンスキー《二本の線》/ 1940年 / ミクストメディア・カードボード / BMA / 外洋217

\*BMA はブリヂストン美術館の所蔵であることを示す。

### 関連事業：

土曜講座「ドビュッシー—音楽と美術」→p.48

スライドトーク

展覧会イベント

「ドビュッシー展」「バーン=ジョーンズ展」開催記念館長対談「世紀末芸術—イギリス VS フランス」

2012年7月29日(日)14:00-16:00

島田紀夫 (ブリヂストン美術館館長)、高橋明也 氏 (三菱一号館美術館館長)



---

レクチャー&コンサート「ドビュッシーと近代フランス音楽を奏でる」

2012年8月12日(日)、8月26日(日)14:00-15:00

演奏：鈴木大介 氏 (ギター)

「ドビュッシー、往時の音色—ツァイト・フォト・サロン SP レコード・コレクション鑑賞会」

2012年8月22日(水)12:30-14:00

「新倉瞳 ドビュッシー誕生日記念コンサート」

2012年8月22日(水)17:00-20:00 \*コンサート17:00-18:00 / 特別鑑賞会18:00-20:00

演奏：新倉 瞳 氏 (チェロ)、柘植涼子 氏 (ピアノ)

レクチャー・コンサート「ドビュッシーとジャポニスム—その美学が会おうところ」

2012年8月25日(土)14:00-16:00

講師・演奏：鶴園紫磯子 氏 (桐朋学園大学講師)

レクチャー&コンサート「ドビュッシー弦楽四重奏曲ト短調 op.10」カルテット演奏

2012年9月2日(日)、9月9日(日)14:00-15:00

演奏：福田悠一郎 氏、外園彩香 氏 (ヴァイオリン)、古屋聡見 氏 (ヴィオラ)、  
小林幸太郎 氏 (チェロ)

特別公演「ドビュッシーと北杜夫朗読劇『幽霊』」

2012年9月7日(金)18:30-19:45

出演：山本芳樹 氏 (Studio Life)、岩崎 大 氏 (Studio Life)、坂本岳大 氏、矢代朝子 氏

## 広報記録

---

新聞・雑誌：

共同通信「ドビュッシー軸に美術紹介」『西日本新聞』2012年6月21日 (山形新聞他複数掲載)

小松潔、関優子「革新の作曲家 先入観覆す ドビュッシー生誕150年」『日本経済新聞』2012年6月30日

窪田直子「『ドビュッシー、音楽と美術』展特集」『日本経済新聞』2012年7月8日

新畑泰秀「ジャンルを超えた芸術創造の精華」『新美術新聞』2012年7月11日

「ドビュッシー展 東京で開幕」『日本経済新聞』2012年7月14日

「アート・ライフ・芸術の交流、美術の名品で紹介」『日本経済新聞』2012年7月15日

木村泰司「目からウロコの『印象派』鑑賞案内」『和楽』2012年7月号、pp.58-63

樺山紘一「欧人異聞、ドビュッシーの20フラン札」『日本経済新聞』2012年8月5日

高階秀爾「目は語る アート逍遙・ドビュッシーと文芸 多彩な交友 新時代の息吹」『毎日新聞』

2012年8月9日夕刊

「目で“聴く”生誕150年“ドビュッシー”」『週刊新潮』2012年8月9日号

窪田直子「オルセーを変える館長 多義的展示 世界に問う」『日本経済新聞』2012年8月11日

矢澤孝樹「for your Collection・音楽家の心情を体感 ドビュッシーの時代」『朝日新聞』2012年8月13日夕刊

梅津時比呂「音のかなたへ、ワルツ」『毎日新聞』2012年8月15日夕刊

栗原詩子「お出かけ&クラシック ドビュッシー生誕150年」『毎日新聞』(北九州版)2012年8月18日夕刊

「アート・ライフ、創造の源となった神聖な乙女」『日本経済新聞』2012年8月19日

中塚慧「感性の作曲家ドビュッシー」『朝日小学生新聞』2012年8月21日

川村隆「この一点『ドビュッシー、音楽と美術』展・上 アンリ・ルロール『チュイルリー公園、夕暮れ』」  
『日本経済新聞』2012年8月23日夕刊

馬淵明子「この一点『ドビュッシー、音楽と美術』展・中 カミーユ・クロデル『ワルツ』」『日本経済新聞』2012年8月24日夕刊

青柳いづみこ「この一点『ドビュッシー、音楽と美術』展・下 モーリス・ドニ『イヴォンヌ・ルロールの

---

3つの肖像』『日本経済新聞』2012年8月25日夕刊

三枝成彰「展覧会へようこそ・ドビュッシー、音楽と美術—印象派と象徴派のあいだで」『クロワッサン』2012年8月25日号、p.95

黒沢綾子「美の扉 ドビュッシー、音楽と美術 ただよう東洋の薫り」『産経新聞』2012年8月26日

青柳いづみこ「青柳いづみこ先生の誌上レッスン」『月刊 PIANO』8月号

賀川恭子「ドビュッシーは、こんな人」『ムジカノーバ』2012年8月号、pp.118-120

新畑泰秀「ドビュッシー生誕150年」『ふらんす』2012年8月号、pp.12-13

たなかようこ「ドビュッシーの音楽と色彩 生誕150年」『ACT 4』2012年8月号、pp.76-95

鶴園紫磯子「ピアニストが語る ドビュッシーとベル・エポック」『PIANO STYLE』2012年8月号、pp.22-23

堀内みさ「ドビュッシー、ベル・エポックの作曲家」『PIANO STYLE』2012年8月号、pp.12-21

「ドビュッシー、音楽と美術—印象派と象徴派のあいだで」『婦人公論』2012年8月22日号

山内宏泰「Art info、音楽家ドビュッシーを軸に集められたフランス美術の名品」『サンデー毎日』2012年9月2日号

小内将人「ジャンルを超えた交流で、新時代の音楽を創作」『公明新聞』2012年9月5日

下野綾「音楽と美術の関係探る ジャンルを超え影響、日本に関心」『神奈川新聞』2012年9月5日

黒沢綾子「懐かしさおぼえる東洋の薫り『ドビュッシー、音楽と美術』展」『サンケイエクスプレス』2012年9月9日

「フランス文化黄金期の音と色とかたち」『都政新報』2012年9月11日

大西若人「美の履歴書、空が広いのはなぜ」『朝日新聞』2012年9月12日夕刊

学芸通信社「新・東京ホットスポット、音楽と視覚の融合 ドビュッシー展覧会」『三陸新報』2012年9月12日

共同通信「多彩な分野の芸術が共鳴 作品が生まれる瞬間」『四国新聞』2012年9月17日（岐阜新聞他、地方紙に配信）

大井民生「美術、楽譜表紙は北斎の絵から」『しんぶん赤旗』2012年9月26日

中村宏美「アート x ファッション、音楽と美術と文学の響き合い」『織研新聞』2012年9月26日

「ドビュッシー展 入場10万人突破」『日本経済新聞』2012年9月28日

KAORU「こちら Art 探偵社! vol.52 今月は象徴派」『BAILA』2012年9月号、p.249

木谷節子「『クロード・ドビュッシー』の生きた時代」『marisol』2012年9月号、pp.182-185

「ドビュッシーとその時代」『eclat』2012年9月号、pp.142-145

小沼純一「フランスのオルセー、オランジェリー美術館との共同企画 ドビュッシー、音楽と美術—印象派と象徴派のあいだで」『intoxicate』2012年9月号（vol.99）

花田志織「「ドビュッシー、音楽と美術—印象派と象徴派のあいだで」展」『音楽の友』2012年9月号

「ドビュッシー生誕150年 音楽や芸術、文学、舞台芸術…芸術家たちとの交流の中で」『新婦人しんぶん』2012年10月4日

豊田エリー「エリーの気ままな ART 巡り『ドビュッシー、音楽と美術—印象派と象徴派のあいだで』」『Tokyo Walker』2012年10月5日号

井上さつき「エンタ目クラシック『前衛作曲家』ドビュッシー生誕150年 浮世絵、蒔絵…東洋好き」『中日新聞』2012年10月11日

平野啓一郎「クロスボーダーレビュー、平野啓一郎が見た美術展『ドビュッシー、音楽と美術』」『日本経済新聞』2012年10月11日

川岸徹「Art & Art、美術展の1枚」『日経おとなの OFF』2012年10月号、p.106

鈴木淳史「ドビュッシーが描いた『音楽』」『芸術新潮』2012年10月号、pp.134-135

高木陽子「Art、ブリヂストン美術館60周年記念 オルセー美術館、オランジェリー美術館共同企画『ドビュッシー、音楽と美術—印象派と象徴派のあいだで』展」『ミセス』2012年10月号、pp.182-185

林家たい平「今月の美術、分野や海を超えて共鳴した芸術家たちの縁」『家庭画報』2012年10月号、p.327

---

テレビ・ラジオ :

「シンフォニア・フライデー」 TOKYO FM、2012年8月17日放送

「ショコラ」 POTCAST インタビュー：新畑泰秀、2012年8月25日～放送

「日曜美術館」(アートシーン) NHK 教育テレビ、2012年9月16日放送



西側広報ウィンド



ティールーム前ウィンド



会場風景



会場風景

## 気ままにアートめぐり

### —印象派、エコール・ド・パリと20世紀美術〈コレクション展示〉

会期：2012年10月26日(金)ー12月24日(月・祝)

会場：第1ー10室、彫刻ギャラリー1、2

主催：石橋財団ブリヂストン美術館

概要：開館60周年を迎えた本年における唯一の常設展示。新収蔵として迎えた作品を当館の常設展に取り込み、印象派をはじめエコール・ド・パリの画家や彼等と交流のあった日本人画家たち、20世紀以降の抽象絵画など約170点を展示した。

出品内容：絵画129点、彫刻31点、陶器13点 計173点

入場者総数：26,474人(1日平均509人)



#### 出品目録：

##### エントランス

1. クリスチャン・ダニエル・ラウホ《勝利の女神》/ 大理石 / 外彫81

##### 階段

2. アリストイド・マイヨール《欲望》/ 1905-08年 / ブロンズ / 外彫66

##### 彫刻ギャラリー1

3. オーギュスト・ロダン《立てるフォーネス》/ 1884年頃 / 大理石 / 外彫40
4. オーギュスト・ロダン《考える人》/ 1902年頃 / ブロンズ / 外彫39
5. オーギュスト・ロダン《青銅時代》/ 1904年 / ブロンズ / 外彫38
6. エミール=アントワヌ・ブールデル《風の中のベートーヴェン》/ 1904-08年 / ブロンズ / 外彫43
7. エミール=アントワヌ・ブールデル《ペネロープ》/ 1909年 / ブロンズ / 外彫45
8. エミール=アントワヌ・ブールデル《弓をひくヘラクレス》/ 1909年 / ブロンズ / 外彫46
9. シャルル・デスピオ《アントワネットの顔》/ 1918年 / ブロンズ / 外彫48
10. シャルル・デスピオ《クラ=クラ》/ 1919年 / ブロンズ / 外彫49

##### 彫刻ギャラリー2

11. コンスタンティン・ブランクーシ《接吻》/ 1907-10年 / 石膏 / 外彫100
12. アレキサンダー・アーキペンコ《ゴンドラの船頭》/ 1914年 / ブロンズ / 外彫86
13. オシップ・ザツキン《母子》/ 1919年 / 着色されたセメント / 外彫54
14. オシップ・ザツキン《三美神》/ 1950年 / ブロンズ / 外彫56
15. オシップ・ザツキン《ポモナ(トルソ)》/ 1951年 / 黒檀 / 外彫55
16. マリノ・マリーニ《騎手》/ 1952年 / ブロンズ / 外彫70
17. マリノ・マリーニ《騎士のための構想(習作)》/ 1955年 / ブロンズ / 外彫102
18. ペリクレ・ファッツィーニ《爽風(B)》/ 1972-73年 / ブロンズ / 外彫88

### 第3室 古代美術

19. シュメール 《女の胸像》 / 紀元前24世紀 / 閃緑石 / 外彫1
20. パルミユラ 《人物像》 / 1-2世紀 / 石灰岩 / 外彫27
21. エジプト 《セクメト神像》 / 紀元前14世紀 / 黒花崗岩 / 外彫64
22. エジプト レリーフ断片 《柘榴と葡萄》 / 紀元前1360年頃 / 石灰岩、彩色 / 外彫95
23. エジプト レリーフ断片 《アヌビス神礼拝図》 / 紀元前13世紀 / 砂岩 / 外彫7
24. エジプト レリーフ断片 《神牛》 / 紀元前1300-1200年 / 石 / 外彫8
25. エジプト 《彩色木棺》 / 紀元前13世紀 / 木 / 外彫67
26. エジプト 《ホルス神浮彫》 / 紀元前1000-350年 / 大理石 / 外彫5
27. エジプト 《聖猫》 / 紀元前950-660年 / ブロンズ / 外彫90
28. ギリシア 《獅子頭部》 / 紀元前5世紀 / 大理石 / 外彫13
29. ギリシア 《哲人の顔》 / 紀元前4世紀 / 大理石 / 外彫15
30. ギリシア 《ヴィーナス》 / ヘレニスティック期（紀元前323-30年） / 大理石 / 外彫14
31. グレコ=ローマン 《アテナ頭部》 / 大理石 / 外彫79
32. ギリシア コリントス球形アリュパロス 《鷺と鶏図》 / 紀元前610-590年 / 陶器182
33. ギリシア アッティカ黒絵式頭部アンフォラ「プーローニユの画家」《ヘラクレスとケルベロス図》 / 紀元前520-510年 / 陶器197
34. ギリシア アッティカ黒絵式オイノコエ《デュオニュソスとマイナス図》 / 紀元前500年頃 / 陶器76
35. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソス、サテュロスとマイナス図》 / 紀元前490-480年 / 陶器67
36. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソスとアリアドネ図》 / 紀元前490-480年 / 陶器66
37. ギリシア アッティカ黒絵式レキュトス《ディオニュソスとマイナス図》 / 紀元前490-480年 / 陶器68
38. ギリシア アッティカ赤絵式キュリクス《サテュロス図》 / 紀元前5世紀中頃 / 陶器89
39. ギリシア アッティカ白地レキュトス《墓参図》 / 紀元前5世紀第4四半期 / 陶器71
40. ギリシア アッティカ赤絵式レベス・ガミコス《ニケと女性図》 / 紀元前4世紀第1四半期 / 陶器91
41. ギリシア カンパニア赤絵式魚文皿 / 紀元前375-350年頃 / 陶器42
42. ギリシア カンパニア赤絵式ヒュドリア「ラゲットの画家」《ディオスクーロイ図》 / 紀元前350年頃 / 陶器87
43. ギリシア カンパニア赤絵式ヒュドリア《エロス図》 / 紀元前350-325年頃 / 陶器88
44. ギリシア アブリア赤絵式柱形把手クラテル《男女図》 / 紀元前330年頃 / 陶器92
45. エトルリア 建築装飾フリーズ部分《泉水に向う二頭の馬》 / 紀元前550-540年 / 彩色テラコッタ / 外彫92
46. ローマ 《ヴィーナスの頭部》 / 大理石 / 外彫23
47. ローマ モザイク断片《牧神頭部》 / 1世紀 / 陶器114
48. ヘルクラネウム 壁画断片《ディオニュソス図》 / 1世紀 / フレスコ / 外洋2

### 第1室 第1章：印象派の誕生

49. カミーユ・コロー 《イタリアの女》 / 1826-28年 / 油彩・カンヴァス / 外洋6
50. カミーユ・コロー 《ヴィル・ダヴレー》 / 1835-40年 / 油彩・カンヴァス / 外洋7
51. カミーユ・コロー 《オンフルールのトゥータン農場》 / 1845年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋8
52. オノレ・ドーミエ 《山中のドン・キホーテ》 / 1850年頃 / 油彩・板 / 外洋171
53. オノレ・ドーミエ 《ラタボワール》 / 1850年頃 / ブロンズ / 外彫91
54. ジャン=フランソワ・ミレー 《乳しぼりの女》 / 1854-60年 / 油彩・カンヴァス / 外洋119
55. シャルル=フランソワ・ドービニー 《レ・サーブル=ドロンス》 / 油彩・板 / 外洋10

- 
56. ギュスターヴ・クールベ《雪の中を駆ける鹿》/ 1856-57年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋170  
57. ギュスターヴ・クールベ《石切り場の雪景色》/ 1870年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋11  
58. カミーユ・ピサロ《ブーヅヴァルのセース河》/ 1870年 / 油彩・カンヴァス / 外洋19  
59. カミーユ・ピサロ《菜園》/ 1878年 / 油彩・カンヴァス / 外洋20  
60. アルフレッド・シスレー《森へ行く女たち》/ 1866年 / 油彩・カンヴァス / 外洋25  
61. アルフレッド・シスレー《サン=マメス六月の朝》/ 1884年 / 油彩・カンヴァス / 外洋26

#### 第4室 第1章：印象派の誕生

62. ウジェーヌ・ブーダン《トルーヴィル近郊の浜》/ 1865年頃 / 油彩・板 / 外洋172  
63. エドゥアール・マネ《オペラ座の仮装舞踏会》/ 1873年 / 油彩・カンヴァス / 外洋14  
64. エドゥアール・マネ《自画像》/ 1878-79年 / 油彩・カンヴァス / 外洋121  
65. エドゥアール・マネ《メリー・ローラン》/ 1882年 / パステル・カンヴァス / 外洋15  
66. エドガー・ドガ《レオポール・ルヴェールの肖像》/ 1874年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋162  
67. エドガー・ドガ《右足で立ち、右手を地面にのばしたアラベスク》/ 1882-95年 / ブロンズ / 外彫76  
68. クロード・モネ《アルジャントゥイユの洪水》/ 1872-73年 / 油彩・カンヴァス / 外洋21  
69. クロード・モネ《アルジャントゥイユ》/ 1874年 / 油彩・カンヴァス / 外洋180  
70. クロード・モネ《雨のペリール》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋164  
71. クロード・モネ《睡蓮》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / 外洋22  
72. クロード・モネ《黄昏、ヴェネツィア》/ 1908年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋24  
73. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわるジョルジェット・シャルパンティエ嬢》/ 1876年 / 油彩・カンヴァス / 外洋169  
74. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわる水浴の女》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 外洋34  
75. ギュスターヴ・カイユボット《ピアノを弾く若い男》/ 1876年 / 油彩・カンヴァス / 外洋229

#### 第5室 第2章：印象派を乗り越えて

76. ポール・セザンヌ《鉢と牛乳入れ》/ 1873-77年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋28  
77. ポール・セザンヌ《帽子をかぶった自画像》/ 1890-94年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋31  
78. ポール・セザンヌ《サント=ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》/ 1904-06年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋32  
79. オディロン・ルドン《神秘の語らい》/ 油彩・カンヴァス / 外洋178  
80. オディロン・ルドン《供物》/ 油彩・厚紙 / 外洋179  
81. ポール・ゴーガン《馬の頭部のある静物》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋168  
82. ポール・ゴーガン《ポン=タヴェン付近の風景》/ 1888年 / 油彩・カンヴァス / 外洋37  
83. ポール・ゴーガン《乾草》/ 1889年 / 油彩・カンヴァス / 外洋38  
84. フィンセント・ファン・ゴッホ《モンマルトルの風車》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / 外洋122  
85. ポール・シニャック《コンカルノー港》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / 外洋45  
86. アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック《サーカスの舞台裏》/ 1887年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋227  
87. ピエール・ボナール《灯下》/ 1899年 / 油彩・紙 / 外洋51  
88. ピエール・ボナール《ヴェルノン付近の風景》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 外洋54  
89. モーリス・ドニ《バッカス祭》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / 外洋65

#### 第6室 第3章：20世紀美術の広がり Iーフォーヴィスムの画家たち

90. アンリ・マティス《画室の裸婦》/ 1899年 / 油彩・紙 / 外洋56  
91. アンリ・マティス《コリウール》/ 1905年 / 油彩・厚紙 / 外洋141
-



- 
92. アンリ・マティス《縞ジャケット》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 外洋57
  93. アンリ・マティス《両腕をあげたオダリスク》/ 1921年 / 油彩・カンヴァスボード / 外洋59
  94. アンリ・マティス《青い胴着の女》/ 1935年 / 油彩・カンヴァス / 外洋62
  95. ジョルジュ・ルオー《郊外のキリスト》/ 1920-24年 / 油彩・紙 / 外洋142
  96. ジョルジュ・ルオー《ピエロ》/ 1925年 / 油彩・紙 / 外洋64
  97. アルベール・マルケ《道行く人、ラ・フレット》/ 1946年 / 油彩・カンヴァス / 外洋181
  98. モーリス・ド・ヴラマンク《運河船》/ 1905-06年 / 油彩・カンヴァス / 外洋69
  99. ラウル・デュフィ《静物》/ 1915-20年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋73
  100. ラウル・デュフィ《オーケストラ》/ 1942年 / 油彩・カンヴァス / 外洋123

#### 第7室 第4章：日本の近代洋画Ⅰ—明治から大正へ

101. 浅井忠《グレーの洗濯場》/ 1901年 / 油彩・カンヴァス / 日洋290
102. 浅井忠《縫物》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / 日洋4
103. 黒田清輝《ブレハの少女》/ 1891年 / 油彩・カンヴァス / 日洋8
104. 藤島武二《黒扇》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / 日洋26
105. 藤島武二《淡路島遠望》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋47
106. 藤島武二《東海旭光》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋51
107. 岡田三郎郎《婦人像》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / 日洋60
108. 青木繁《天平時代》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / 日洋91

#### 第8室 第4章：日本の近代洋画Ⅱ—大正・昭和期

109. 山下新太郎《供物》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / 日洋84
110. 川上凉花《麦秋》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / 日洋326
111. 中村彝《自画像》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / 日洋141
112. 小出檐重《帽子をかぶった自画像》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / 日洋137
113. 小出檐重《横たわる裸身》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋140
114. 安井曾太郎《風景》/ 1911年 / 油彩・カンヴァス / 日洋459
115. 安井曾太郎《薔薇》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / 日洋143
116. 梅原龍三郎《脱衣婦》/ 1912年 / 油彩・カンヴァス / 日洋200
117. 梅原龍三郎《ノートルダム》/ 1965年 / 油彩・金箔押しした羊皮紙 / 日洋191
118. 岸田劉生《南瓜を持てる女》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / 日洋293
119. 岸田劉生《麗子坐像》/ 1920年 / 水彩・紙 / 日洋154
120. 岡鹿之助《セーヌ河畔》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋583
121. 岡鹿之助《雪の発電所》/ 1956年 / 油彩・カンヴァス / 日洋297
122. 岡鹿之助《望楼》/ 1960年 / 油彩・カンヴァス / 日洋299

#### 第9室 第5章：エコール・ド・パリの時代

123. アンリ・ルソー《イヴリー河岸》/ 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋43
  124. アンリ・ルソー《牧場》/ 1910年 / 油彩・カンヴァス / 外洋42
  125. ケース・ヴァン・ドンゲン《シャンゼリゼ大通り》/ 1924-25年 / 油彩・カンヴァス / 外洋87
  126. モーリス・ユトリロ《サン＝ドニ運河》/ 1906-08年 / 油彩・紙 / 外洋77
  127. モーリス・ユトリロ《パリのアンジュー河岸》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 外洋185
  128. マリー・ローランサン《二人の少女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 外洋72
  129. マリー・ローランサン《女と犬》/ 1923年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋186
  130. マリー・ローランサン《手鏡を持つ女》/ 1937年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋145
-

- 
131. アメデオ・モディリアーニ《若い農夫》/ 1918年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋115  
132. アンドレ・ロート《海浜》/ 1922年頃 / 油彩・カンヴァス / 外洋89  
133. 藤田嗣治《巴里風景》/ 1918年 / 油彩・カンヴァス / 日洋123  
134. 藤田嗣治《猫のいる静物》/ 1939-40年 / 油彩・カンヴァス / 日洋131  
135. 国吉康雄《夢》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / 日洋304  
136. 国吉康雄《横たわる女》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / 日洋158  
137. カイム・スーティン《大きな樹のある南仏風景》/ 1924年 / 油彩・紙 / 外洋114  
138. 佐伯祐三《テラスの広告》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 日洋174  
139. 佐伯祐三《ガラージュ》/ 1927-28年 / 油彩・カンヴァス / 日洋175

#### 第10室 第6章：20世紀美術の広がりⅡ—キュビズム、シュルレアリスム

140. フェルナン・レジェ《抽象的コンポジション》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / 外洋219  
141. パブロ・ピカソ《道化師》/ 1905年 / ブロンズ / 外彫61  
142. パブロ・ピカソ《ブルゴーニュのマール瓶、グラス、新聞紙》/ 1913年 / 油彩、砂、新聞紙・カンヴァス / 外洋173  
143. パブロ・ピカソ《生木と枯木のある風景》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / 外洋143  
144. パブロ・ピカソ《腕を組んですわるサルタンバンク》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / 外洋160  
145. パブロ・ピカソ《女の顔》/ 1923年 / 油彩、砂・カンヴァス / 外洋84  
146. パブロ・ピカソ《茄子》/ 1946年 / 油彩、グワッシュ・紙 / 外洋85  
147. ジョルジュ・ブラック《梨と桃》/ 1924年 / 油彩・板 / 外洋86  
148. ジョルジョ・デ・キリコ《吟遊詩人》/ 油彩・カンヴァス / 外洋91  
149. ジョアン・ミロ《絵画》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / 外洋187  
150. 古賀春江《涯しなき逃避》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス / 日洋166  
151. 古賀春江《感傷の静脈》/ 1931年 / 油彩・カンヴァス / 日洋165  
152. アルベルト・ジャコメッティ《ディエゴの胸》/ 1954-55年 / ブロンズ / 外彫75  
153. ピート・モンドリアン《砂丘》/ 1909年 / 油彩、鉛筆・厚紙 / 外洋203

#### 第2室 第7章：戦後の抽象芸術

154. パウル・クレー《鳥》/ 1932年 / 油彩、砂を混ぜた石膏・板 / 外洋202  
155. ハンス・ホフマン《Push and Pull II》/ 1950年 / 油彩・カンヴァス / 外洋211  
156. ワシリー・カンディンスキー《二本の線》/ 1940年 / ミクストメディア・カードボード / 外洋217  
157. ジャン・フォートリエ《人質の頭部》/ 1945年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 外洋188  
158. ジャン・フォートリエ《旋回する線》/ 1963年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / 外洋189  
159. ジャン・デュビュッフエ《スカーフを巻くエディット・ボワソナス》/ 1947年 / 油彩・紙 / 外洋192  
160. ジャン・デュビュッフエ《暴動》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / 外洋193  
161. アンス・アルトゥング《T.1963-K 7》/ 1963年 / アクリル・カンヴァス / 外洋228  
162. 斎藤義重《WORK》/ 1961年 / 油彩・合板 / 日洋578  
163. セルジュ・ポリアコフ《コンポジション》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス  
164. ジャクソン・ポロック《Number 2, 1951》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / 外洋209  
165. ヴォルス《葵色と黄土色》/ 1946年頃 / グワッシュ・紙 / 外洋230  
166. ピエール・スーラージュ《絵画、26 May 1969》/ 1969年 / 油彩・カンヴァス / 外洋210  
167. 菅井汲《赤い鬼》/ 1954年 / 油彩・カンヴァス / 日洋579  
168. ザオ・ウーキー《21. Sep. 50》/ 1950年 / 油彩・カンヴァスボード / 外洋194  
169. ザオ・ウーキー《07. 06. 85》/ 1985年 / 油彩・カンヴァス / 外洋197  
170. 白髪一雄《観音普陀落浄土》/ 1972年 / 油彩・カンヴァス / 日洋544
-

- 
171. ビエール・アレシンスキー《田園の一隅》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / 外洋99  
172. 堂本尚郎《連続の溶解9》/ 1964年 / 油彩、アクリル・カンヴァス / 日洋530  
173. 田中敦子《無題》/ 1965年 / エナメル塗料・カンヴァス / 日洋566

\*所蔵はすべてブリヂストン美術館。

#### 関連事業：

---

土曜講座「画家とモデルたち一名画に秘められた物語」→p.48

ギャラリートーク

ブリヂストン美術館ナイト

日時：12月2日(日)17:30-20:00

トークイベント —ブリヂストン美術館開館60周年を振り返って—

第一部：学芸員対談 ブリヂストン美術館 VS 三菱一号館美術館

出演：ブリヂストン美術館学芸員 賀川恭子 / 三菱一号館美術館学芸員 阿佐美淑子

第二部：アートプロガーを交えての意見交換会

特別出演：「忒代目・青い日記帳」Tak / はろると / 6次元 中村邦夫

司会進行：ブリヂストン美術館学芸課長 新畑泰秀

特別内覧会・懇親会

#### 広報記録：

---

新聞・雑誌：

「Art Walk: Selections from the Collection of the Bridgestone Museum of Art」『The Japan Times』2012年10月25日

「Culture ブリヂストン美術館コレクション展 気ままにアートめぐりー印象派、エコール・ド・パリと20世紀美術」『NEWS TOKYO』2012年11月20日

島田紀夫・新畑泰秀「美術館探訪 第一回ブリヂストン美術館」『bun ten vol.43』2012年9月30日発行、pp.228-229

吉田宏子「気ままにアートめぐりー印象派、エコール・ド・パリと20世紀美術」『美術手帖』2012年11月号、pp.120-121

「印象派の名画を訪ねる 全国美術館巡り ブリヂストン美術館／東京・京橋」『男の隠れ家』2012年12月号、pp.62-63

「展覧会へようこそ 注目したいその他の展覧会」『クロワッサン』2012年11月10日号、p.113

結城昌子「青い大気の律動に包まれた、セザンヌのサント=ヴィクトワール山」『ねんきんネット』2013年冬号、p.16

山内晃子「CULTURE PATROL・気ままにアートめぐりー印象派、エコール・ド・パリと20世紀美術」『STORY』12月号、p.358

原田マハ「Art 原田マハの30代女子に効くアートサプリ」『In Red』2012年1月号、p.176

Web：

藤丸由華「東京の観光・旅行 歩いていける！東京駅周辺的美術館」All About、

<http://allabout.co.jp/gm/gc/400853/>

仲宇佐ゆり「サラリーマンのための美術館ガイド 名画でホッ 印象派はなぜ『スーツ族』を魅了するのか」

---

東洋経済 ONLINE、<http://toyokeizai.net/articles/-/11626>

「催し」WEB サライ、<http://www.webserai.jp/cat21378408/index.html>

「今すぐ行きたい美術展」シティリビング Web、<http://city.living.jp/>

テレビ・ラジオ：

「Atlier Nova」(Reading Portraits)、2012年10月27日放送

「TOKYO MX NEWS」(美術館へ行こう！) 東京 MX、2012年12月6日放映

「TOKYO ART TRIP」(東京の美術館) CS 放送、2012年11月22日-12月25日リピート放送



会場風景



会場風景



会場風景

## もっと知る美術・展 エピソード編〈コレクション展示〉

---

2011年10月26日(水)－2012年3月18日(日)

会場：本館、別館9室

主催：石橋財団石橋美術館 / TVQ九州放送

後援：久留米市 / 公益財団法人久留米文化振興会

概要：作家や作品にまつわるエピソードを紹介することで、石橋美術館のコレクション、さらには日本近代美術に親しんでもらおうという企画。展示内容は館報60号（2011）に掲載、本号では最終入場者数の記録にとどめる。

出品内容：絵画157点、版画6点、彫刻6点、工芸4点、資料15点 計190点

入場者総数：7,337人(1月4日から3月18日まで) (1日平均113人)

### 関連事業：

---

ギャラリートーク→p.52

### 広報記録：

---

新聞・雑誌：

田箆良太「比べてみよう 石橋美術館コレクション展」『西日本新聞』2012年1月25日、2月3日、9日、15日、23日（5回連載、筑後版）

## くらべる。つながる石橋コレクション ブリヂストン美術館開館60周年を祝う1 〈特別展〉

2012年3月31日(土)ー6月24日(日)

会場：本館、別館9室

主催：石橋財団石橋美術館 / 久留米市 / 西日本新聞社 / TVQ九州放送  
/ テレビ西日本

後援：久留米市教育委員会 / 公益財団法人久留米文化振興会

概要：2点の作品の比較をとおり、それぞれの作品のよさとおもしろさ、  
意外な一面に気づいてもらおうというもの。絵画と絵画以外に、絵  
画と彫刻、絵画と陶器、また古代と現代、西洋と日本などのいろい  
ろな組み合わせを提案した。展示は、石橋コレクションより70組140  
点によって構成、2点に共通するキーワードを設定し、短い解説を  
付した。

出品内容：油彩82点、デッサン他5点、書画16点、版画18点、彫刻9点、  
工芸10点 計140点

入場者総数：16,684人(1日平均222人)



### 出品目録：

#### 本館

- 1 a. クロード・モネ《アルジャントウイユ》/ 1874年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋180
- 1 b. 藤島武二《糸杉 (ヴィラ・ファルコニエリ)》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋27
- 2 a. ピエール=オーギュスト・ルノワール《カーニユのテラス》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋33
- 2 b. 三岸節子《フランス風景》/ 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋287
- 3 a. 藤田嗣治《カルポーの公園》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋133
- 3 b. 長谷川利行《動物園風景》/ 1937年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋155
- 4 a. アルフレッド・シスレー《レディーズ・コーヴ、ウェールズ》/ 1897年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋133
- 4 b. 青木繁《海》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋498
- 5 a. 青木繁《海》/ 1904年 / 油彩・板 / IMA / 日洋94
- 5 b. ベン・シャーン《XV海そのものの姿 (『リルケ「マルテの手記」より 一行の詩のために…』より)》/ 1968年刊 / リトグラフ・手漉き紙 / BMA / 外版252
- 6 a. アンリ・リヴィエール《波 (マルティ版『レストラン・オリジナル』第4号所収)》/ 1893年刊 / 8色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版209
- 6 b. ジョアン・ミロ《砕ける波》/ 1958年 / アクアチント・紙 / BMA / 外版233
- 7 a. ピエール・ボナール《海岸》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋53
- 7 b. 金山平三《港》/ 1945-56年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋120
- 8 a. 青木木米《秋渡溪橋》/ 江戸時代 / 紙本墨画淡彩 / IMA / 日書55
- 8 b. 竹内栖鳳《溪山雨後》/ 1927年頃 / 紙本墨画 / IMA / 日書20
- 9 a. 《古今和歌集卷一断簡 高野切》/ 平安時代 11世紀 / 紙本墨書 / IMA / 日書44
- 9 b. 安井曾太郎《桜》/ 1946年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋145



- 
- 10 a. ラウル・デュフィ《静物》/ 1915-20年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋73  
10 b. 坂本繁二郎《鶏卵》/ 1942年 / 油彩・カンヴァス / IMA 寄託作品  
11 a. 坂本繁二郎《箱》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / IMA 寄託作品  
11 b. 坂本繁二郎《香炉》/ 1947年 / 油彩・カンヴァス / IMA 寄託作品  
12 a. 坂本繁二郎《植木鉢》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / IMA 寄託作品  
12 b. 児島善三郎《海芋とキリン草》/ 1954年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋203  
13 a. ピエール=オーギュスト・ルノワール《水浴の女》/ 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋136  
13 b. 岡田三郎助《髪梳く女》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋62  
14 a. 和田英作《読書》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋64  
14 b. 満谷国四郎《坐婦》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋67  
15 a. 山下新太郎《供物》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋84  
15 b. 北川民次《ごくろを持つ女》/ 1954年 / リトグラフ・紙 / IMA / 日版122  
16 a. アンリ=エドモン・クロス《シャンゼリゼで (『パン』第4年次第1号所収)》/ 1898年刊 / リトグラフ・紙 / BMA / 外版196-72  
16 b. ケース・ヴァン・ドンゲン《シャンゼリゼ大通り》/ 1924-25年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋87  
17 a. ジャン=バティスト・パテル《水浴》/ 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋175  
17 b. 古賀春江《海水浴の女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋168  
18 a. 小出檜重《裸婦》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋138  
18 b. 安井曾太郎《画家とモデル》/ 1934年 / 木版・紙 / IMA / 日版33  
19 a. ラウル・デュフィ《ボワレの服を着たモデルたち、1923年の競馬場》/ 1943年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋184  
19 b. ゲオルゲ・グロッス《ブロムナード》/ 1926年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋167  
20 a. アンリ・マティス《オダリスク》/ 1926年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋60  
20 b. 岸田劉生《南瓜を持てる女》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋293  
21 a. ジョルジュ・ピゴー《日本の女》/ 油彩・カンヴァス / IMA / 外洋111  
21 b. 岡田三郎助《婦人像》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋60  
22 a. 富岡鉄斎《飲中八仙図》/ 紙本著色 / IMA / 日書16  
22 b. 松田諦晶《コンポジション》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋572  
23 a. 仙厓《猫鼠》/ 江戸時代 19世紀初期 / 紙本墨画 / IMA / 日書14  
23 b. 猪熊弦一郎《犬と猫》/ 1954年 / グワッシュ、ペン、インク、鉛筆・紙 / IMA / 日洋486  
24 a. レンブラント・ファン・レイン《大きな樹と小屋のある風景》/ 1641年 / エッチング・紙 / BMA / 外版2  
24 b. カイム・スーティン《大きな樹のある南仏風景》/ 1924年 / 油彩・紙 / BMA / 外洋114  
25 a. 坂本繁二郎《肉弾三勇士》/ 1935年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋115  
25 b. オシップ・ザツキン《三つの冒険》/ 1951年 / グワッシュ・紙 / BMA / 外洋93  
26 a. 坂本繁二郎《窓の馬》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / IMA 寄託作品  
26 b. 古賀春江《二階より》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / IMA 寄託作品  
27 a. アンドレ・ドラン《聖母子》/ 1913年頃 / 油彩・板 / BMA / 外洋71  
27 b. ヘンリー・ムア《母と子 (ルーベンス風)》/ 1979年 / ブロンズ / BMA / 外彫101  
28 a. グレゴリオ・ラッザリーニ《黄金の子牛の礼拝》/ 1700-07年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋127  
28 b. ジャン=フランソワ・ミレー《乳しぼりの女》/ 1854-60年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋119  
29 a. パブロ・ピカソ《道化師》/ 1905年 / ブロンズ / BMA / 外彫61
-

- 
- 29 b. 青木繁《顔》/ 1903-04年 / 色鉛筆、淡彩・紙 / IMA / 日洋567
- 30 a. 「アプルーター・クラス」《アッティカ黒絵式頸部アンフォラ〈サテュロス図〉》/ 紀元前6世紀末 / BMA / 陶器60
- 30 b. パブロ・ピカソ《三人の裸婦と笛を吹いているサテュロス（『ヴォラルのための連作』より）》/ 1931年 / ドライポイント・紙 / BMA / 外版71
- 31 a. オディロン・ルドン《耳の細胞（マルティ版『レスタンプ・オリジナル』第2号所収）》/ 1893年刊 / リトグラフ・紙 / BMA / 外版18
- 31 b. 古賀春江《単純な哀話》/ 1930年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋162
- 32 a. カミュー・コロエ《イタリアの女》/ 1826-28年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋6
- 32 b. 村井正誠《モードの女》/ 1976年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋548
- 33 a. アンドレ・ロート《海浜》/ 1922年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋89
- 33 b. 古賀春江《海女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋169
- 34 a. レンブラント・ファン・レイン《聖母の死》/ 1639年 / エッチング、ドライポイント・紙 / BMA / 外版1
- 34 b. パブロ・ピカソ《レンブラントの顔とさまざまな習作（『ヴォラルのための連作』より）》/ 1934年 / エッチング・紙 / BMA / 外版87
- 35 a. オーギュスト・ロダン《カミュー・クロデル》/ 1889年 / ブロンズ / BMA / 外彫42
- 35 b. オシップ・ザツキン《ロダんに捧ぐ》/ 1967年 / リトグラフ・紙 / BMA / 外版152-2
- 36 a. オーギュスト・ロダン《アンリ・ベックの肖像（マルティ版『レスタンプ・オリジナル』第2号所収）》/ 1893年刊 / ドライポイント・紙 / BMA / 外版20
- 36 b. 小磯良平《二人》/ 1954年 / リトグラフ・紙 / IMA / 日版131
- 37 a. マリー・ローランサン《二人の少女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋72
- 37 b. 上村松篁《春日》/ 1996年 / 紙本金地著色 / IMA / 日書94
- 38 a. 岸田劉生《画家の妻》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋229
- 38 b. ベン・シャーン《XXII 一篇の最初の言葉（『リルケ「マルテの手記」より 一行の詩のために…』より）》/ 1968年刊 / リトグラフ・手漉き紙 / BMA / 外版259
- 39 a. 青木繁《眼（二つ）》/ 1904年 / コンテ、鉛筆、淡彩・紙 / IMA 寄託作品
- 39 b. アメデオ・モディリアーニ《若い農夫》/ 1918年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋115
- 40 a. ポール・ゴーガン《マナオ・トゥパバウ（死霊が見ている）（マルティ版『レスタンプ・オリジナル』第6号所収）》/ 1894年刊 / リトグラフ・紙 / BMA / 外版222
- 40 b. 国吉康雄《夢》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋304
- 41 a. 安井曾太郎《玉蟲先生像》/ 1934年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋144
- 41 b. ジャン・デュビュッフェ《スカーフを巻くエディット・ボワソナス》/ 1947年 / 油彩・紙 / BMA / 外洋192
- 42 a. 青木繁《輪転》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋90
- 42 b. 今井俊満《Eclipse》/ 1964年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋552
- 43 a. 藤島武二《五剣山の日の出》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋49
- 43 b. 平野遼《朝》/ 1991年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋532
- 44 a. ジョルジョ・デ・キリコ《吟遊詩人》/ 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋91
- 44 b. 古賀春江《厳しき伝統》/ 1931年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋163
- 45 a. 藤田嗣治《インク壺の静物》/ 1926年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋124
- 45 b. 斎藤義重《作品》/ 1965年 / 油彩・合板 / BMA / 日洋527
- 46 a. アルベルト・ジャコメッティ《ディエゴの胸像》/ 1954-55年 / ブロンズ / BMA / 外彫75
- 46 b. アルベルト・ジャコメッティ《歩く人》/ コンテ・紙 / BMA / 外洋205
- 47 a. シャルル=フランソワ・ドービニー《レ・サーブル=ドロンヌ》/ 油彩・板 / BMA / 外洋10
-

- 47 b. 松本英一郎《退屈な風景 茶畑》/ 1974年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋553  
48 a. 日本 有田焼《色絵竹梅虎文六角瓶》/ 江戸時代 1670-1700年 / 磁器 / IMA / 陶器209  
48 b. 杉全直《キッコウ》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋187  
49 a. 斎藤義重《作品》/ 1961年 / 油彩・合板 / BMA / 日洋524  
49 b. 豊福知徳《透過する立像 (白)》/ 1991年 / 木彫彩色 / IMA / 日彫19  
50 a. 坂本繁二郎《牛》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋301  
50 b. 田淵安一《孤独の山 Montagne Solitaire》/ 1956年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋525  
51 a. 横山大観《糺の森 秋雨》/ 1919年 / 絹本著色 / IMA / 日書22  
51 b. ザオ・ウーキー《10.06.75》/ 1975年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋157  
52 a. 坂本繁二郎《柿》/ 1944年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋210  
52 b. 田中敦子《無題》/ 1965年 / エナメル塗料・カンヴァス / BMA / 日洋566  
53 a. 藤島武二《奈良風景》/ 1934年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋52  
53 b. 菅井汲《OKA》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋526  
54 a. 猪熊弦一郎《Sky Triangle》/ 1968年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋482  
54 b. キャサリン・ペチャリ《棘魔王トカゲのドリーミング》/ 2003年 / 合成ポリマー絵具・ベルギーリネン / BMA / 外洋218  
55 a. 村井正誠《人びと》/ 1983年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋549  
55 b. 吉原英雄《彼と彼女》/ 1969年 / リトグラフ・紙 / BMA / 日版14-4  
56 a. ジャン・フォートリエ《人質の頭部》/ 1945年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / BMA / 外洋188  
56 b. 佐伯祐三《コルドヌリ (靴屋)》/ 1925年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋173  
57 a. ジャン=オーギュスト=ドミニク・アングル《若い女の頭部》/ 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋161  
57 b. 戸張孤雁《曇り》/ 1917年 / ブロンズ / IMA / 日彫1

## 別館

- 58 a. 《唐子蓋置》/ 銅 / IMA / 雑76  
58 b. 仙厓《虎溪三笑》/ 江戸時代 19世紀初 / 紙本墨画 / IMA / 日書12  
59 a. 因陀羅《禅機図断簡 丹霞焼仏図》/ 元時代 14世紀 / 紙本墨画 / IMA / 日書100  
59 b. カルロス・シュヴァーベ《受胎告知 (マルティ版『レスタンプ・オリジナル』第3号所収)》/ 1893年刊 / リトグラフ・紙 / BMA / 外版216  
60 a. 狩野典信《墨松墨梅図屏風 (松図)》/ 江戸時代 18世紀後半 / 紙本金地墨画 / IMA / 日書52  
60 b. パブロ・ピカソ《生木と枯木のある風景》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋143  
61 a. 狩野典信《墨松墨梅図屏風 (梅図)》/ 江戸時代 18世紀後半 / 紙本金地墨画 / IMA / 日書52  
61 b. 前田青邨《紅白梅》/ 1970年頃 / 紙本著色 / IMA / 日書38  
62 a. 前田青邨《風神雷神》/ 1949年頃 / 紙本墨画淡彩 / IMA / 日書37  
62 b. ペリクレ・ファッツィーニ《爽風 (B)》/ 1972-73年 / ブロンズ / BMA / 外彫88  
63 a. 片桐石州《桜の歌》/ 江戸時代 17世紀 / 紙本墨書 / IMA / 日書99  
63 b. 《吉野山蒔絵小簞笥》/ 大正-昭和時代 / 木製漆塗 / IMA / 漆器23  
64 a. 《武蔵野図屏風》/ 江戸時代 17世紀中葉 / 紙本金地著色 / IMA / 日書49  
64 b. 千宗左 (6代) 覚々翁《赤楽雁文茶碗 銘「武蔵野」》/ 江戸時代 18世紀初期 / 陶器 / IMA / 陶器274  
65 a. 中丸精十郎《瀑》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋1  
65 b. 野口小蘗《谿山疊翠図》/ 1899年 / 絹本著色 / IMA / 日書17  
66 a. 日本 有田焼《色絵花鳥文瓶》/ 江戸時代 1670-1700年 / 磁器 / IMA / 陶器210  
66 b. アンリ・マティス《両腕をあげたオダリスク》/ 1921年 / 油彩・カンヴァスボード / BMA / 外洋59

- 
- 67 a. イラン テペ・シアルク《幾何文台付鉢》/ 紀元前4千年紀 / 土器 / IMA / 陶器200  
67 b. パブロ・ピカソ《カップとスプーン》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋83  
68 a. 江馬長閑《須磨明石蒔絵小硯函》/ 近代 20世紀前半 / 木製漆塗 / IMA / 漆器10  
68 b. 青木繁《月下滞船図》/ 1908年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋105  
69 a. 中国 龍泉窯《青磁長頸花生》/ 南宋時代 12-13世紀 / 磁器 / IMA / 陶器190  
69 b. 日本 有田焼《色絵竹梅文竹形水注》/ 江戸時代 1670-90年 / 磁器 / IMA / 陶器208  
70 a. オノレ・ドーミエ《ラタポワール》/ 1850年頃 / ブロンズ / BMA / 外彫91  
70 b. エドガー・ドガ《左足を洗う女》/ 1896-1911年 / ブロンズ / BMA / 外彫36

\*IMA は石橋美術館、BMA はブリヂストン美術館の所蔵を示す。

#### 関連事業：

---

関連イベント→p.52

ギャラリートーク→p.52

#### 広報記録：

---

新聞・雑誌：

田箆良太「くらべる。石橋コレクション」『西日本新聞』2012年5月10日、11日、12日、15日、16日、17日  
(6回連載、筑後版)



会場風景



会場風景

---

## あなたに見せたい絵があります。 ブリヂストン美術館開館60周年を祝う2 〈特別展〉

---

2012年7月7日(土)ー10月14日(日)

会場：全館

主催：石橋財団石橋美術館 / 久留米市 / 西日本新聞社 / TVQ 九州放送  
/ テレビ西日本

後援：久留米市教育委員会 / 公益財団法人久留米文化振興会

概要：ブリヂストン美術館開館60周年を祝う展覧会の第二弾。

石橋コレクションを代表する作品約100点を肖像画、ヌード、物語、山、川など題材やジャンルに分けて紹介。通常はブリヂストン美術館でしか見られない西洋絵画も加え、またテーマ別の展示により、石橋コレクションの魅力をストレートに伝える。出品作品は先にブリヂストン美術館で開催された同名の展覧会を基本とし、一部変更して構成。

出品内容：油彩画等96点、水彩・版画等7点、日本画1点 計104点

入場者総数：21,353人(1日平均237人)

### 出品目録：

---

#### 自画像

1. レンブラント・ファン・レイン《帽子と襟巻を着けた暗い顔のレンブラント》/ 1633年 / エッチング・紙 / BMA / 外版175
2. 中村彝《自画像》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋141
3. 小出檐重《帽子をかぶった自画像》/ 1924年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋137
4. 藤島武二《自画像》/ 1903年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋12
5. 青木繁《自画像》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋87
6. 坂本繁二郎《自像》/ 1923-30年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋300
7. 古賀春江《自画像》/ 1916年 / 水彩・紙 / IMA / 日洋322
8. パブロ・ピカソ《画家とモデル》/ 1963年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋144

#### 肖像画

9. シャルル・モーラン《トゥールーズ=ロートレックの肖像（マルティ版『レスタンプ・オリジナル』第1号所収）》/ 1893年刊 / エッチング、アクアチント・紙 / BMA / 外版31
10. ピエール=オーギュスト・ルノワール《少女》/ 1887年 / パステル・紙 / BMA / 外洋165
11. 安井曾太郎《安倍能成君像》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋217
12. 藤田嗣治《横たわる女と猫》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋215
13. 黒田清輝《針仕事》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋7
14. 岸田劉生《画家の妻》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋229
15. 岸田劉生《麗子像》/ 1922年 / テンペラ・カンヴァス / IMA / 日洋226
16. 関根正二《子供》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋178
17. パブロ・ピカソ《女の顔》/ 1923年 / 油彩、砂・カンヴァス / BMA / 外洋84

---

## モデル

18. 坂本繁二郎《帽子を持てる女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋195
19. カミーユ・コロー《イタリアの女》/ 1826-28年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋6
20. カミーユ・コロー《森の中の若い女》/ 1865年 / 油彩・板 / BMA / 外洋159
21. 藤島武二《チョチャラ》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋25
22. アンリ・マティス《青い胴着の女》/ 1935年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋62

## ヌード

23. 国吉康雄《横たわる女》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋158
24. アンリ・マティス《両腕をあげたオダリスク》/ 1921年 / 油彩・カンヴァスボード / BMA / 外洋59
25. 安井曾太郎《水浴裸婦》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋142
26. ピエール=オーギュスト・ルノワール《すわる水浴の女》/ 1914年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋34
27. 岡田三郎助《水浴の前》/ 1916年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋63
28. 和田英作《チューリップ》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋65

## 物語

29. 青木繁《海の幸》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋95
30. 青木繁《大穴牟知命》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋197
31. 青木繁《わだつみのいるこの宮》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋104
32. 青木繁《輪転》/ 1903年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋90
33. 青木繁《天平時代》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋91
34. レンブラント・ファン・レイン《聖書あるいは物語に取材した夜の情景》/ 1626-28年 / 油彩・銅板 / BMA / 外洋5
35. ジョルジュ・ルオー《郊外のキリスト》/ 1920-24年 / 油彩・紙 / BMA / 外洋142
36. オノレ・ドーミエ《山中のドン・キホーテ》/ 1850年頃 / 油彩・板 / BMA / 外洋171
37. 小杉未醒（放庵）《山幸彦》/ 1917年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋85
38. 今村紫紅《海の幸山の幸屏風》/ 1908年 / 絹本金地著色 / IMA / 日書88、89

## レジャー

39. ピエール・ボナール《灯下》/ 1899年 / 油彩・紙 / BMA / 外洋51
40. エドゥアール・マネ《オペラ座の仮装舞踏会》/ 1873年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋14
41. アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック《ムーラン・ルージュにて、ラ・グーリュとその姉》/ 1892年 / カラーリトグラフ・紙 / BMA / 外版39
42. アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック《サーカスの舞台裏》/ 1887年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋227
43. パブロ・ピカソ《腕を組んですわるサルタンバンク》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋160
44. ジョルジュ・ルオー《ピエロ》/ 1925年 / 油彩・紙 / BMA / 外洋64
45. 長谷川利行《動物園風景》/ 1937年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋155
46. ラウル・デュフィ《ボワレの服を着たモデルたち、1923年の競馬場》/ 1943年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋184
47. ラウル・デュフィ《ドーヴィルの突堤》/ 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋75
48. アンドレ・ロート《海浜》/ 1922年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋89

- 
49. 古賀春江《海水浴の女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋168

## 山

50. カミーユ・コロー《オンフルールのトゥータン農場》/ 1845年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋8  
51. カミーユ・コロー《ヴィル・ダヴレー》/ 1835-40年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋7  
52. ギュスターヴ・クールベ《雪の中を駆ける鹿》/ 1856-57年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋170  
53. 児島善三郎《トレド風景》/ 1928年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋159  
54. パブロ・ピカソ《生木と枯木のある風景》/ 1919年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋143  
55. アンリ・ルソー《牧場》/ 1910年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋42  
56. 岡鹿之助《雪の発電所》/ 1956年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋297  
57. 坂本繁二郎《放牧三馬》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋114

## 川

58. アルフレッド・シスレー《森へ行く女たち》/ 1866年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋25  
59. カミーユ・ピサロ《ブーヅヴァルのセーヌ河》/ 1870年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋19  
60. クロード・モネ《アルジャントウイユの洪水》/ 1872-73年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋21  
61. モーリス・ユトリロ《サン＝ドニ運河》/ 1906-08年 / 油彩・紙 / BMA / 外洋77  
62. モーリス・ユトリロ《パリのアンジュー河岸》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋185  
63. フィンセント・ファン・ゴッホ《モンマルトルの風車》/ 1886年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋122  
64. 浅井忠《グレーの洗濯場》/ 1901年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋290  
65. 藤島武二《ルツェルン》/ 1908年 / 油彩・板 / BMA / 日洋23  
66. アンリ・ルソー《イヴリー河岸》/ 1907年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋43  
67. 佐伯祐三《テラスの広告》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋174

## 海

68. 青木繁《海景（布良の海）》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋100  
69. 坂本繁二郎《魚を持ってきた海女》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋204  
70. 古賀春江《海女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋169  
71. 藤島武二《屋島よりの遠望》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋50  
72. 藤島武二《東海旭光》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋51  
73. 藤島武二《浪（大洗）》/ 1931年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋48  
74. 藤島武二《淡路島遠望》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋47  
75. ポール・シニャック《サン＝トロペ（マルティ版『レスタンブ・オリジナル』第7号所収）》/ 1894年刊 / 6色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版36  
76. ポール・シニャック《プティ・タンドリー》/ 水彩、コンテ・紙 / BMA / 外洋174  
77. アンリ・マティス《コリウール》/ 1905年 / 油彩・厚紙 / BMA / 外洋141  
78. ビエール・ボナール《海岸》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋53  
79. ダヴィッド・ブルリユク《船の図》/ 1921年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋151  
80. ザオ・ウーキー《21. Sep. 50》/ 1950年 / 油彩・カンヴァスボード / BMA / 外洋194

## 静物

81. 古賀春江《素朴な月夜》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋161  
82. ビエール・ボナール《桃》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋52
-

83. 安井曾太郎《レモンとメロン》 / 1955年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋268
84. 安井曾太郎《薔薇》 / 1932年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋143
85. 藤田嗣治《ドルドーニュの家》 / 1940年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋132
86. 藤田嗣治《猫のいる静物》 / 1939-40年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋131
87. ポール・セザンヌ《鉢と牛乳入れ》 / 1873-77年頃 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋28
88. パブロ・ピカソ《ブルゴーニュのマル瓶、グラス、新聞紙》 / 1913年 / 油彩、砂、新聞紙・カンヴァス / BMA / 外洋173

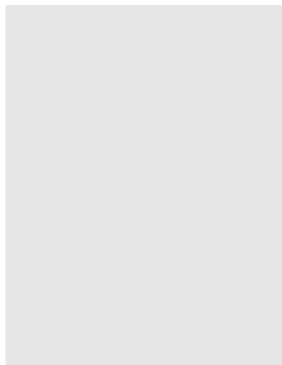
## 現代美術

89. ジョアン・ミロ《絵画》 / 1927年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋187
90. ジャン・フォートリエ《人質の頭部》 / 1945年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / BMA / 外洋188
91. ジャン・フォートリエ《旋回する線》 / 1963年 / 油彩・カンヴァスに貼られた紙 / BMA / 外洋189
92. ジャン・デュビュッフエ《暴動》 / 1961年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋193
93. アンス・アルトウング《T.1963-K 7》 / 1963年 / アクリル・カンヴァス / BMA / 外洋228
94. セルジュ・ポリアコフ《コンポジション》 / 1959年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋215
95. ジャクソン・ポロック《Number 2, 1951》 / 1951年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋209
96. フェルナン・レジェ《抽象的コンポジション》 / 1919年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋219
97. ピエール・スーラージュ《絵画、26 May 1969》 / 1969年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋210
98. ハンス・ホフマン《Push and Pull II》 / 1950年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋211
99. 川端実《作品》 / 1963年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋569
100. 菅井汲《赤い鬼》 / 1954年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋579
101. 田淵安一《孤独の山 Montagne Solitaire》 / 1956年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋525
102. 斎藤義重《WORK》 / 1961年 / 油彩・合板 / BMA / 日洋578
103. 野見山暁治《風の便り》 / 1997年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋520
104. ザオ・ウーキー《07.06.85》 / 1985年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 外洋197

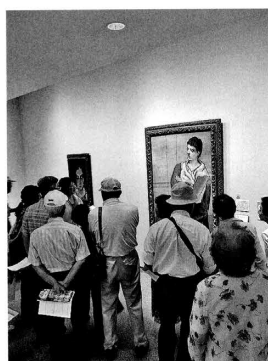
\*IMA は石橋美術館、BMA はブリヂストン美術館の所蔵であることを示す。

## 関連事業：

美術講座→p.52



会場風景



会場風景



イベント風景



## 8人の作家たち〈コレクション展示〉

会期：2012年10月26日(金)－2012年12月27日(木)

会場：全館

主催：石橋財団石橋美術館 / TVQ 九州放送

後援：久留米市 / 久留米市教育委員会 / 公益財団法人久留米文化振興会

概要：石橋コレクションの核をなす、古賀春江、安井曾太郎、藤田嗣治、岡田三郎助、藤島武二、青木繁、坂本繁二郎を画家ごとに紹介。また、2010年にブリダストン美術館で取り上げたヘンリー・ムアを、別館にコーナーを設けて紹介した。あわせてオリエントの陶器・ガラスを展示。

出品内容：油彩70点、水彩・素描等38点、版画34点、彫刻2点、工芸10点  
計154点

入場者総数：9,562人(1日平均174人)

### 出品目録：

#### 古賀春江

1. 古賀春江《柳川風景》/ 1914年 / 水彩・紙 / IMA / 日洋523
2. 古賀春江《街の風景》/ 1923年頃 / 水彩・紙 / IMA / 日洋325
3. 古賀春江《窓外風景》/ 1925年頃 / 水彩・紙 / IMA / 日洋577
4. 古賀春江《静物》/ 1925年頃 / 水彩・紙 / IMA / 日洋302
5. 古賀春江《円筒形の画像》/ 1926年頃 / 水彩・紙 / IMA / 日洋574
6. 古賀春江《素朴な月夜》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋161
7. 古賀春江《窓外風景》/ 1927年 / 水彩・紙 / IMA / 日洋582
8. 古賀春江《美しき博覧会》/ 1926年 / 水彩・紙 / IMA / 日洋321
9. 古賀春江《散歩》/ 1932年頃 / 水彩・紙 / IMA / 日洋584
10. 古賀春江《〈檻〉(『東京パック』表紙) のためのスケッチ》/ 1929年 / 水彩・紙 / IMA / 日洋365
11. 古賀春江《片岡鉄兵『女性讃』表紙のためのデザイン》/ 1930年 / 水彩・紙 / IMA / 日洋360
12. 古賀春江《龍胆寺雄『放浪時代』表紙のためのデザイン》/ 1930年 / 水彩・紙 / IMA / 日洋361
13. 古賀春江《『詩神』表紙のためのデザイン》/ 1930年頃 / 鉛筆、水彩・紙 / IMA / 日洋366
14. 古賀春江《菊池寛『有憂華』函絵のためのデザイン》/ 1931年 / 鉛筆、墨・紙 / IMA / 日洋362
15. 古賀春江《〈街頭の初夏〉(『週刊朝日』表紙) のためのデザイン》/ 1933年 / 水彩・紙 / IMA / 日洋375
16. 古賀春江《鳥籠》/ 1929年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋164

#### 安井曾太郎

17. 安井曾太郎《安倍能成君像》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋217
18. 安井曾太郎《玉蟲先生像》/ 1934年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋144
19. 安井曾太郎《りんご》/ 1942年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋265
20. 安井曾太郎《レモンとメロン》/ 1955年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋268
21. 安井曾太郎《読書(『文藝春秋』第25巻第8号 1947年9月号表紙絵)》/ 1947年 / グワッシュ、色鉛筆、チョーク、コラージュ・紙 / BMA 寄託作品

- 
22. 安井曾太郎《薔薇（『文藝春秋』第28巻第6号 1950年5月号表紙絵）》/ 1950年 / 水彩、グワッシュ、鉛筆、色鉛筆・紙 / BMA 寄託作品
  23. 安井曾太郎《夜の光（『文藝春秋』第28巻第16号 1950年12月号表紙絵）》/ 1950年 / 色鉛筆、コラージュ・紙 / BMA 寄託作品
  24. 安井曾太郎《スケート（『文藝春秋』第29巻第2号 1951年2月号表紙絵）》/ 1951年 / 鉛筆、色鉛筆・紙 / BMA 寄託作品
  25. 安井曾太郎《金魚（『文藝春秋』第29巻第8号 1951年6月号表紙絵）》/ 1951年 / 油彩・紙 / BMA 寄託作品
  26. 安井曾太郎《窓際（『文藝春秋』第29巻第9号 1951年7月号表紙絵）》/ 1951年 / 油彩・紙 / BMA 寄託作品
  27. 安井曾太郎《梨と葡萄（『文藝春秋』第29巻第13号 1951年10月号表紙絵）》/ 1951年 / 油彩・紙 / BMA 寄託作品
  28. 安井曾太郎《静物（『文藝春秋』第29巻第15号 1951年11月号表紙絵）》/ 1951年 / 油彩・紙 / BMA 寄託作品
  29. 安井曾太郎《ミシン（『文藝春秋』第30巻第2号 1952年2月号表紙絵）》/ 1952年 / 油彩・紙 / BMA 寄託作品
  30. 安井曾太郎《温泉（『文藝春秋』第30巻第8号 1952年6月号表紙絵）》/ 1952年 / 油彩・紙 / BMA 寄託作品
  31. 安井曾太郎《蝦（『文藝春秋』第31巻第1号 1953年1月号表紙絵）》/ 1952年 / 油彩・紙 / BMA 寄託作品
  32. 安井曾太郎《湘南電車にて（『文藝春秋』第31巻第2号 1953年2月号表紙絵）》/ 1952年 / 油彩・紙 / BMA 寄託作品
  33. 安井曾太郎《饅頭（『文藝春秋』第31巻第4号 1953年3月号表紙絵）》/ 1953年 / 油彩・紙 / BMA 寄託作品
  34. 安井曾太郎《アイスクリーム（『文藝春秋』第31巻第10号 1953年7月号表紙絵）》/ 1953年 / 油彩・紙 / BMA 寄託作品
  35. 安井曾太郎《銀座の雨（『文藝春秋』第31巻第17号 1953年12月号表紙絵）》/ 1953年 / 油彩・紙 / BMA 寄託作品
  36. 安井曾太郎《庭（『文藝春秋』第32巻第2号 1954年2月号表紙絵）》/ 1953年 / 油彩・紙 / BMA 寄託作品
  37. 安井曾太郎《犬（『文藝春秋』第32巻第4号 1954年3月号表紙絵）》/ 1954年 / 油彩・紙 / BMA 寄託作品
  38. 安井曾太郎《温泉旅館（『文藝春秋』第32巻第10号 1954年7月号表紙絵）》/ 1954年 / 油彩・紙 / BMA 寄託作品
  39. 安井曾太郎《黒卓と犬（『文藝春秋』第33巻第3号 1955年2月号表紙絵）》/ 1955年 / 油彩・紙 / BMA 寄託作品
  40. 安井曾太郎《菊（『別冊文藝春秋』第25号 1951年12月号表紙絵）》/ 1951年 / 油彩・紙 / BMA 寄託作品

#### 藤田嗣治

41. 藤田嗣治《自画像》/ 1927年 / エッチング・紙 / BMA / 日版1
42. 藤田嗣治《インク壺の静物》/ 1926年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋124
43. 藤田嗣治《少女像》/ 1927年 / 鉛筆・紙 / IMA / 日洋126
44. 藤田嗣治《婦人像》/ 1927年 / 鉛筆・紙 / IMA / 日洋125
45. 藤田嗣治《二人の裸婦》/ 1927年 / エッチング・絹 / IMA / 日版2

- 
46. 藤田嗣治《横たわる女と猫》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋215
  47. 藤田嗣治《婦人像》/ 1932年 / 墨、淡彩・紙 / IMA / 日洋129
  48. 藤田嗣治《婦人像》/ 墨、淡彩・紙 / IMA / 日洋127
  49. 藤田嗣治《猫》/ 1934年 / 胡粉、墨、顔彩・和紙 / IMA / 日洋262
  50. 藤田嗣治《猫》/ エッチング・紙 / IMA / 日版3
  51. 藤田嗣治《女と猫》/ 1938年頃 / 墨、淡彩・紙 / IMA / 日洋263
  52. 藤田嗣治《裸婦》/ 1949年 / 墨・紙 / IMA / 日洋128
  53. 藤田嗣治《人形を抱く子供》/ 1948年 / 墨、淡彩・紙 / IMA / 日洋130
  54. 藤田嗣治《ドルドーニュの家》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋132
  55. 藤田嗣治《カルポーの公園》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋133
  56. 藤田嗣治《室内》/ 1943年頃 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋134

#### オリエントのガラス

57. シリア・パレスチナ《突起文瓶》/ 3世紀 / ガラス / IMA / 雑51
58. シリア・パレスチナ《突起文括碗》/ 3世紀中葉-後半 / ガラス / IMA / 雑19
59. シリア・パレスチナ《脚台把手付瓶》/ 4世紀 / ガラス / IMA / 雑26
60. シリア・パレスチナ《貼付紐文広口瓶》/ 4世紀前半 / ガラス / IMA / 雑52-1
61. シリア・パレスチナ《貼付紐文広口瓶》/ 4世紀前半 / ガラス / IMA / 雑53-2
62. イラク《円形切子碗》/ 6世紀前半 / ガラス / IMA / 雑17

#### 岡田三郎助

63. 岡田三郎助《薔薇の少女》/ 1901年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋231
64. 岡田三郎助《臥裸婦》/ 1901年 / 油彩・カンヴァス / BMA / 日洋230
65. 岡田三郎助《雪景》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋61
66. 岡田三郎助《髪梳く女》/ 1915年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋62
67. 岡田三郎助《水浴の前》/ 1916年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋63
68. 岡田三郎助《富士山》/ 1918年 / 油彩・板 / IMA / 日洋522
69. 和田英作《早春（富士）》/ 1939年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋66
70. 和田英作《チューリップ》/ 1927年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋65
71. 和田英作《読書》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋64
72. 黒田清輝《針仕事》/ 1890年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋7
73. 黒田清輝《鉄砲百合》/ 1909年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋9

#### 藤島武二

74. 藤島武二《天平の面影》/ 1902年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋11
  75. 藤島武二《雲（ローマ）》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋33
  76. 藤島武二《糸杉》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァスボード / IMA / 日洋41
  77. 藤島武二《池》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァスボード / IMA / 日洋42
  78. 藤島武二《ネミ湖》/ 1908年 / 油彩・板 / IMA / 日洋24
  79. 藤島武二《チョチャラ》/ 1908-09年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋25
  80. 藤島武二《唐様三部作》/ 1924年 / 水彩、油彩、パステル、木炭、チョーク・紙 / IMA / 日洋45-1
  81. 藤島武二《朝鮮婦人》/ 1914年頃 / 油彩・紙 / IMA / 日洋45-2
  82. 藤島武二《朝鮮婦人》/ 1914年頃 / 油彩、パステル・紙 / IMA / 日洋45-3
  83. 藤島武二《浪（大洗）》/ 1931年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋48
  84. 藤島武二《五剣山の日の出》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋49
-

- 
85. 藤島武二《屋島よりの遠望》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋50  
86. 藤島武二《蒙古の日の出》/ 1937年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋56

#### 青木 繁

87. 青木繁《上京途中スケッチ》/ 1902年 / 鉛筆・紙 / IMA / 日洋586  
88. 青木繁《車中風景》/ 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙 / IMA / 日洋496  
89. 青木繁《神塞妙義》/ 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙 / IMA / 日洋507  
90. 青木繁《馬肉屋》/ 1902年 / 鉛筆、淡彩・紙 / IMA 寄託作品  
91. 青木繁《海》/ 1904年 / 油彩・板 / IMA / 日洋94  
92. 青木繁《海の幸》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋95  
93. 青木繁《海》/ 1904年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋498  
94. 青木繁《大穴牟知命》/ 1905年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋197  
95. 青木繁《狂女》/ 1906年 / 水彩・紙 / IMA / 日洋381  
96. 青木繁《雪景》/ 1906年 / 油彩・板 / IMA / 日洋103  
97. 青木繁《わだつみのいろこの宮》/ 1907年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋104  
98. 青木繁《月下滞船図》/ 1908年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋105  
99. 青木繁《晚帰》/ 1908年 / 木炭・紙 / IMA / 日洋497  
100. 青木繁《菊籬》/ 1909年 / 鉛筆、淡彩・紙 / IMA 寄託作品  
101. 青木繁《橋のある風景》/ 1910年 / 鉛筆、淡彩・紙 / IMA 寄託作品

#### 坂本繁二郎

102. 坂本繁二郎《夏野》/ 1898年 / 油彩・カンヴァス / IMA 寄託作品  
103. 坂本繁二郎《魚を持ってきた海女》/ 1913年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋204  
104. 坂本繁二郎《牛》/ 1920年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋301  
105. 坂本繁二郎《少女》/ 1922年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋111  
106. 坂本繁二郎《読書の女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋112  
107. 坂本繁二郎《帽子を持てる女》/ 1923年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋195  
108. 坂本繁二郎《老婆》/ 1923年 / パステル、水彩・紙 / IMA / 日洋538  
109. 坂本繁二郎《放牧三馬》/ 1932年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋114  
110. 坂本繁二郎《窓の馬》/ 1940年 / 油彩・カンヴァス / IMA 寄託作品  
111. 坂本繁二郎《能面と謡本》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / IMA 寄託作品  
112. 坂本繁二郎《塩屋の娘人形》/ 1951年 / 油彩・カンヴァス / IMA 寄託作品  
113. 坂本繁二郎《林檎 蜜柑 柿》/ 1958年 / 油彩・カンヴァス / IMA / 日洋216  
114. 坂本繁二郎《箱》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / IMA 寄託作品  
115. 坂本繁二郎《植木鉢》/ 1959年 / 油彩・カンヴァス / IMA 寄託作品  
116. 坂本繁二郎《植木鉢》/ 1961年 / 油彩・カンヴァス / IMA 寄託作品

#### ヘンリー・ムア

117. ヘンリー・ムア《横たわる人体》/ 1976年 / ブロンズ / BMA / 外彫89  
118. ヘンリー・ムア《横たわる人体のための習作》/ 1949年 / 鉛筆、ワックス・クレヨン、水彩・紙 / BMA / 外洋163  
119. ヘンリー・ムア《八人の横たわる人物と建築的背景》/ 1963年 / 5色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版159-5  
120. ヘンリー・ムア《赤い映像の上の黒》/ 1963年 / 2色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版159-4  
121. ヘンリー・ムア《ロダンに捧ぐ》/ 1966年 / 4色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版152-1
-

- 
122. ヘンリー・ムア《横たわる3つの人体》/ 1971年 / 3色刷リトグラフ・紙 / BMA / 外版433
  123. ヘンリー・ムア《母と子 (ルーベンス風)》/ 1979年 / ブロンズ / BMA / 外彫101
  124. ヘンリー・ムア《波を背景にした母と子Ⅰ (ハードグレー)》/ 1976年 / 5色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版272
  125. ヘンリー・ムア《波を背景にした母と子Ⅱ (イエロー)》/ 1976年 / 5色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版273
  126. ヘンリー・ムア《波を背景にした母と子Ⅲ (ソフトグレー)》/ 1976年 / 5色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版274
  127. ヘンリー・ムア《『ヘルメット・ヘッド』黙視》/ 1974年 / 10色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版262
  128. ヘンリー・ムア《『ヘルメット・ヘッド』直視》/ 1974年 / 8色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版263
  129. ヘンリー・ムア《『ヘルメット・ヘッド』隠視》/ 1974年 / 11色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版264
  130. ヘンリー・ムア《『ヘルメット・ヘッド』優越視》/ 1974年 / 8色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版265
  131. ヘンリー・ムア《『ヘルメット・ヘッド』狂視》/ 1974年 / 10色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版266
  132. ヘンリー・ムア《『ストーンヘンジⅠ』バランスのとれた楣石》/ 1973年 / 3色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版192-1
  133. ヘンリー・ムア《『ストーンヘンジⅡ』サルセンと楣石》/ 1973年 / 3色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版192-2
  134. ヘンリー・ムア《『ストーンヘンジⅢ』空にそびえる》/ 1973年 / 3色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版192-3
  135. ヘンリー・ムア《『ストーンヘンジⅣ』環の内側》/ 1973年 / 2色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版192-4
  136. ヘンリー・ムア《『ストーンヘンジⅤ』刻み目のある石》/ 1973年 / 2色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版192-5
  137. ヘンリー・ムア《『ストーンヘンジⅥ』倒された巨人》/ 1973年 / 2色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版192-6
  138. ヘンリー・ムア《『ストーンヘンジⅦ』雨に洗われた石》/ 1973年 / 3色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版192-7
  139. ヘンリー・ムア《『ストーンヘンジⅧ』見張り》/ 1973年 / 3色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版192-8
  140. ヘンリー・ムア《『ストーンヘンジⅨ』巨人の頭》/ 1973年 / 2色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版192-9
  141. ヘンリー・ムア《『ストーンヘンジⅩ』光の裂け目》/ 1973年 / 1色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版192-10
  142. ヘンリー・ムア《『ストーンヘンジⅪ』キュクロープス》/ 1973年 / 2色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版192-11
  143. ヘンリー・ムア《『ストーンヘンジⅫ』月明の闇》/ 1973年 / 1色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版192-12
  144. ヘンリー・ムア《『ストーンヘンジⅬ』腕と胴体》/ 1973年 / 1色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版192-13
  145. ヘンリー・ムア《『ストーンヘンジⅭⅣ』月明の滝》/ 1973年 / 1色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版192-14
-

146. ヘンリー・ムア 《『ストーンヘンジXV』 暗黒の洞窟》 / 1973年 / 1色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版192-15
147. ヘンリー・ムア 《『ストーンヘンジ A』》 / 1973年 / 1色刷りリトグラフ・紙 / BMA / 外版192-16
148. ヘンリー・ムア 《『ストーンヘンジ B』》 / 1972年 / エッチング・紙 / BMA / 外版192-17
149. ヘンリー・ムア 《『ストーンヘンジ C』》 / 1972年 / エッチング、アクアチント、ドライポイント、ビュラン・紙 / BMA / 外版192-18
150. ヘンリー・ムア 《『ストーンヘンジ 表紙』》 / 1973年 / エッチング、アクアチント・紙 / BMA / 外版192-19

## オリエントの陶器

151. イラン 《白地多彩鳥文鉢》 / 10-11世紀 / 陶器 / IMA / 陶器116
152. イラン 《白搔落象文鉢》 / 11-12世紀 / 陶器 / IMA / 陶器117
153. イラン 《青緑釉藍黒彩花文瓶》 / 13世紀 / 陶器 / IMA / 陶器205
154. イラン 《ラスター彩草花文輪花鉢》 / 13世紀後半 / 陶器 / IMA / 陶器181

\* 寄託作品以外で、IMA は石橋美術館、BMA はブリヂストン美術館の所蔵であることを示す。

## 関連事業：

ギャラリートーク→p.52



会場風景



会場風景

〈土曜講座〉

土曜日 14:00－16:00 ホール

通算回数 月 日 講座題目 講師

《「石橋コレクション徹底研究（西洋絵画編）—カラーからブラックまで」》

企画＝田所夏子

- |      |             |   |                     |
|------|-------------|---|---------------------|
| 2224 | 2012年 2月11日 | カラー—フランス風景の発見                               | 馬淵明子 氏（日本女子大学教授）    |
| 2225 | 2月18日       | モネと日本                                       | 六人部昭典 氏（実践女子大学教授）   |
| 2226 | 2月25日       | マネ《オペラ座の仮装舞踏会》                              | 大森達次 氏（女子美術大学名誉教授）  |
| 2227 | 3月 3日       | ブラックとピカソ：革新から伝統へ                            | 村上博哉 氏（国立西洋美術館学芸課長） |
| 2228 | 3月10日       | 晩年のセザンヌ—ブリヂストン美術館所蔵「自画像」と「サント・ヴィクトワール山」を中心に | 新関公子 氏（東京藝術大学名誉教授）  |

《ブリヂストン美術館と私》

企画＝貝塚 健

- |      |            |                       |                              |
|------|------------|-----------------------|------------------------------|
| 2229 | 2012年3月31日 | モナ・リザの変貌—レオナルドからピカソまで | 高階秀爾 氏（大原美術館館長、東京大学名誉教授）     |
| 2230 | 4月 7日      | 日本洋画収集の軸線             | 富山秀男 氏（前ブリヂストン美術館館長）         |
| 2231 | 4月14日      | ギリシア陶器画とパルテノン彫刻       | 水田 徹 氏（東京学芸大学名誉教授、前大和文庫館長）   |
| 2232 | 4月21日      | 印象派と浮世絵               | 小林 忠 氏（学習院大学名誉教授、国際浮世絵学会理事長） |
| 2233 | 4月28日      | 印象派のジャンル—風景画と風俗画      | 島田紀夫（ブリヂストン美術館館長）            |

《地中海学会春期連続講演会「地中海世界の歴史、中世～近代—異なる文明の輝きと交流」》

企画＝高山 博 氏（東京大学教授、地中海学会）

- |      |             |                                |                    |
|------|-------------|--------------------------------|--------------------|
| 2234 | 2012年 5月12日 | ノルマンと地中海世界—三大文化の交差点、中世シチリア王国   | 高山 博 氏（東京大学教授）     |
| 2235 | 5月19日       | オスマン帝国と地中海世界—『オスマンの平和』がもたらしたもの | 飯田巳貴 氏（専修大学講師）     |
| 2236 | 5月26日       | ルネサンスと地中海世界—古代復興の多面性—美術の視座から   | 水野千依 氏（京都造形芸術大学教授） |
| 2237 | 6月 2日       | ヴェネツィアと地中海世界—“海との結婚” から生まれたもの  | 和栗珠里 氏（桃山学院大学准教授）  |
| 2238 | 6月 9日       | 地中海文明—地中海の北と南、東と西              | 青柳正規 氏（国立西洋美術館館長）  |

---

《ドビュッシー—音楽と美術》

企画＝新畑泰秀

- 2239 2012年 7月14日 ドビュッシーの音楽の絵画的な響き  
————— グザヴィエ・レイ氏（オルセー美術館学芸員）※逐次通訳付
- 2240 7月21日 象徴主義のただ中で：ドビュッシー、音楽、絵画、詩  
————— ジャン＝ミシェル・ネクトゥー氏（フランス国立科学研究所学芸員）※講演中止
- 2241 7月28日 ドビュッシー、印象派と象徴派のあいだで  
————— 新畑泰秀（ブリヂストン美術館学芸課長）
- 2242 8月 4日 ドビュッシーと美術愛好家 ————— 賀川恭子（ブリヂストン美術館学芸員）
- ※7月21日に予定していた土曜講座は、講師の都合により中止となった。なお、当日は、島田紀夫（ブリヂストン美術館館長）による特別講演「ドビュッシーと美術」を開催した。

《地中海学会秋期連続講演会「芸術家と地中海都市Ⅱ」》

企画＝小池寿子 氏（國學院大學教授、地中海学会）

- 2243 2012年 9月 1日 ダヴィッド、ドラクロワとギリシャ ————— 鈴木杜幾子 氏（明治学院大学教授）
- 2244 9月 8日 フィリッポ・リッピとプラート ————— 金原由紀子 氏（尚美学園大学准教授）
- 2245 9月15日 ヴィラ・メディチとフランスの画家たち  
—ローマのフランス・アカデミーをめぐる—  
————— 三浦 篤 氏（東京大学教授）
- 2246 9月22日 ミラノのスフォルツァ宮廷のレオナルド・ダ・ヴィンチ  
—アンブロジーナのコレクションから — 小佐野重利 氏（東京大学教授）
- 2247 9月29日 ローマとハドリアヌス帝 ————— 池上英洋 氏（國學院大學准教授）

《画家とモデルたち—名画に秘められた物語》

企画＝中村節子

- 2248 2012年11月 3日 ルノワール、作曲家ワーグナーを描く  
—パリの前衛と後期ルノワール ————— 荒屋鋪透 氏（ポーラ美術館館長）
- 2249 11月10日 マティスとモデル—揺らめくイメージ — 天野知香 氏（お茶の水女子大学大学院教授）
- 2250 11月17日 ドガの描いた人々—レオポール・ルヴェールから踊り子まで  
————— 坂上桂子 氏（早稲田大学教授）
- 2251 11月24日 『麗子像』からせまる岸田劉生の全体像 — 萬木康博 氏（日本近代美術研究者）
- 2252 12月 1日 優美を演ずる—岡田三郎助《婦人像》 ————— 松本誠一 氏（佐賀県立美術館副館長）



---

## 〈ギャラリートーク〉

---

展示室でのギャラリートークをドビュッシー展期間中を除く毎週水曜日と金曜日、下記の時間帯に当館学芸員が実施した。

水曜日、金曜日 15:00－16:00

---

## 〈スライドトーク〉

---

ドビュッシー展の開催にあわせて、スライドトークを美術館1階ホールにて実施した。

水曜日、金曜日 15:00－16:00

---

## 〈ファミリープログラム〉

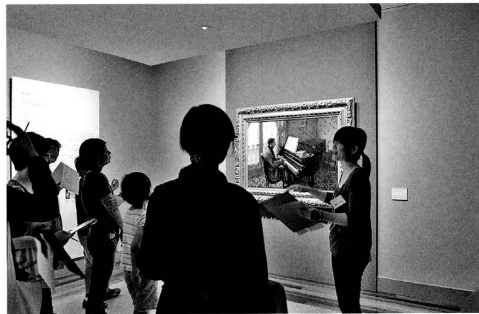
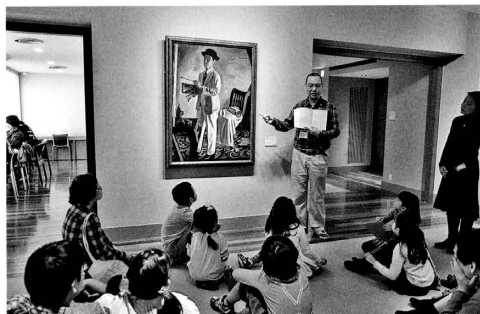
---

小学生を含む家族を対象にしたプログラムを、下記の時間帯に実施した。

日曜日10:30－12:30

- 2012年 1月22日 「H<sub>2</sub>O」  
4組11人（子ども6人、大人5人）  
1月29日 「H<sub>2</sub>O」  
4組9人（子ども4人、大人5人）  
2月 5日 「H<sub>2</sub>O」  
6組16人（子ども8人、大人8人）  
2月26日 「人をみつめて」  
5組12人（子ども5人、大人7人）  
3月 4日 「人をみつめて」  
6組16人（子ども9人、大人7人）  
3月11日 「人をみつめて」  
6組12人（子ども6人、大人6人）  
4月29日 「アート・サファリ」  
4組9人（子ども5人、大人4人）  
5月 6日 「アート・サファリ」  
6組18人（子ども10人、大人8人）  
5月13日 「アート・サファリ」  
6組15人（子ども7人、大人8人）  
6月 3日 「せなか」  
3組6人（子ども3人、大人3人）  
6月10日 「せなか」  
6組14人（子ども7人、大人7人）
-

- 
- 6月17日 「せなか」  
5組12人（子ども6人、大人6人）  
11月11日 「たてもの」  
6組16人（子ども7人、大人9人）  
11月18日 「たてもの」  
6組14人（子ども7人、大人7人）  
11月25日 「たてもの」  
5組15人（子ども8人、大人7人）  
12月 9日 「絵の中のドラマ」  
5組11人（子ども5人、大人6人）  
12月16日 「絵の中のドラマ」  
7組18人（子ども9人、大人9人）  
12月23日 「絵の中のドラマ」  
5組12人（子ども5人、大人7人）



## 〈インターンシップ〉

---

2012年4月8日から2013年3月31日まで、下記の通り教育普及部門のインターンシップを行った。

インターン：

小西あゆみ（お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科比較社会文化学専攻 修士課程）

高木文絵（埼玉大学大学院 教育学研究科 修士課程）

永谷侑子（慶應義塾大学大学院 文学研究科 美学美術史学専攻 修士課程）

横田かさね（中央大学大学院 文学研究科仏文学専攻（西洋美術史） 修士課程）

実習活動日：48日間

主な実習内容：美術館における教育普及活動の実務

担当：貝塚 健、細矢 芳

---

## 〈職場体験学習〉

---

2012年 9月11日(火)－14日(金) 中央区立晴海中学校2年 2人

11月 6日(火)－ 8日(木) 東京都立白鷗高校附属中学校2年 4人

12月11日(火)、12日(水)、14日(金) 星美学園中学校3年 5人

担当：貝塚 健、細矢 芳

## 〈美術講座〉

---

月 日	講座題目	講師
《「あなたに見せたい絵があります。」関連美術講座》 講座室 14:00-15:30		
2012年 9月 1日	「11に分けた石橋コレクション」	貝塚 健（プリヂストン美術館学芸課課長）
9月 8日	「画家とモデル」	森山秀子（石橋美術館学芸課長）
9月15日	「印象派の風景画と風俗画」	島田紀夫（石橋美術館館長）
9月22日	「古事記 いろいろな豊玉姫」	平間理香（石橋美術館学芸員）
9月29日	「セザンヌ以後のフランス絵画」	新畑泰秀（プリヂストン美術館学芸課長）

## 〈展覧会関連イベント〉

---

《「くらべる。つながる石橋コレクション」関連イベント》

2012年 5月12日(土) 17:00-19:30 映画上映会 「モディリアーニ 真実の愛」 石橋美術館別館ロビー

## 〈ギャラリートーク〉

---

学芸員とサポートボランティアがギャラリートークを行った。

「もっと知る美術・展エピソード編」、「くらべる。つながる石橋コレクション」、「8人の作家たち」は土曜日はボランティア、日曜日は学芸員。

「あなたに見せたい絵があります」は7/7(土)、21(土)に学芸員による拡大版ギャラリートーク、日曜日はボランティア。

## 〈学習の場としての美術館利用〉

---

2012年	2月15日(水)	久留米市立明星中学校1年「地域発見学習」	5名（対応＝泉田）
	7月17日(火)	福岡教育大付属久留米中学校2年「職場体験」	2名（対応＝泉田）
	7月25日(水)	久留米信愛女学院中学校3年「職場体験」	4名（対応＝泉田）
	9月20日(木)	久留米市立江南中学校3年「職場体験」	3名（対応＝泉田）
	10月 5日(金)	久留米市立南薫小学校2年「生活科町探検」	6名（対応＝泉田）

---

## 〈館外活動〉

---

- 2012年 2月12日(日) 「坂本繁二郎と青木繁」 於：坂本繁二郎生家 約30名 (担当＝森山)  
4月21日(土) アクロス・文化学び塾「くらべて楽しむ。—もうひとつの石橋コレクション」  
於：アクロス福岡 約50名 (担当＝森山)  
6月 8日(金) 石橋文化センター早朝緑陰講座「美術館で笑顔になろう」  
於：文化センター園内 約70名 (担当＝森山)  
7月17日(火) 平成24年度えーるびあシニアカレッジ「あなたに見せたい絵があります。」  
於：えーるびあ久留米 約200名 (担当＝平間)  
10月 4日(木) 久留米学 (文化と社会)「青木繁と坂本繁二郎」  
於：久留米大学 約200名 (担当＝森山)  
10月 6日(土) 坂本繁二郎・青木繁生誕130年記念美術講演会「坂本繁二郎と青木繁 ふたつの個性」  
於：石橋美術館講座室 約50名 (担当＝森山)

---

## 〈夏休みイベント〉

---

夏休みイベントとして小学3年生以上と保護者を対象とした「展覧会のヒ・ミ・ツ」を実施した。ボランティアの解説付きで展覧会「あなたに見せたい絵があります。」を鑑賞した後、ヤマトロジスティクスとの協力を得て展示の裏側を紹介した。

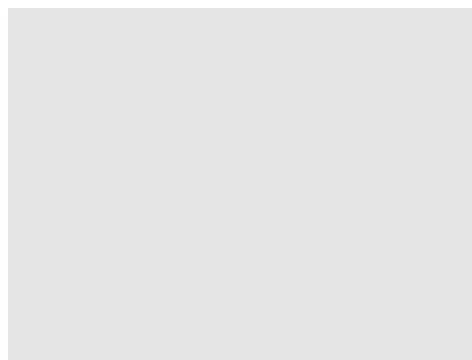
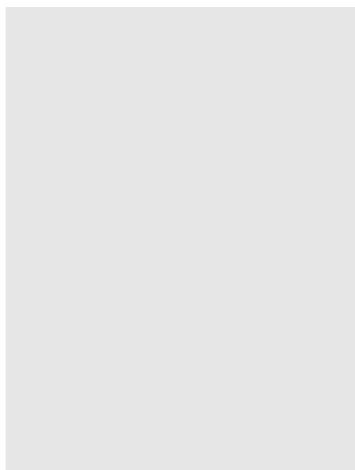
場所：石橋美術館 展示室、講座室、1階ギャラリー

時間：14:00－16:00

日程・参加者数

2012年 8月 4日(土) 8組20名

8月25日(土) 5組21名



---

## 〈サポートボランティア〉

---

2012年度の登録者は21名。年間6回の研修を実施、ギャラリートーク、坂本旧アトリエ解説、学校を主とする団体受入や、文化センター内のイベント等で3,000名を超える来館者に対応した。

（ボランティアの活動期間は4月から翌3月までの1年間）

### サポートボランティア

赤尾征子、稲益円、小島裕子、近藤孝子、坂井弘美、里中健、佐野由美子、高橋有嘉子、高橋佑太、豊福真知子、仲上祥世、中野直美、藤井喜美子、藤木康宏、細川典彦、虫明しのぶ、牟田麻里耶、森房乃、諸富孝子、矢ヶ部節子、渡邊睦美 以上21名（50音順 敬称略）

## 入場者数

### ブリヂストン美術館

月	開館日数	有 料				無 料		総 計	一日平均
		一般	大高生	団体	合計	合計	(中小生)		
1	22	5,151	402	47	5,600	3,841	139	9,441	429
2	25	10,371	541	181	11,093	3,074	688	14,167	567
3	17	6,973	484	265	7,722	2,718	160	10,440	614
4	28	11,053	623	297	11,973	2,496	305	14,469	517
5	30	13,834	896	360	15,090	3,716	369	18,806	627
6	24	14,693	931	657	16,281	6,289	431	22,570	940
7	16	12,205	1,326	231	13,762	4,056	750	17,818	1,114
8	27	24,535	2,920	379	27,834	11,124	2,372	38,958	1,443
9	27	25,828	2,826	782	29,436	20,989	900	50,425	1,868
10	18	21,404	2,822	321	24,547	7,991	588	32,538	1,808
11	26	8,409	556	1,310	10,275	2,513	417	12,788	492
12	21	6,996	765	655	8,416	2,897	248	11,313	539
合計	281	161,452	15,092	5,485	182,029	71,704	7,367	253,733	903

### 石橋美術館

月	開館日数	有 料				無 料			総 計	一日平均
		一般	大高生	団体	合計	中小生	招待他	合計		
1	24	1,601	54	230	1,885	428	163	591	2,476	103
2	25	1,616	48	341	2,005	473	199	672	2,677	107
3	17	1,211	82	513	1,806	112	548	660	2,466	145
4	26	2,501	71	1,262	3,834	122	522	644	4,478	172
5	27	3,893	99	1,459	5,451	316	984	1,300	6,751	250
6	21	2,155	49	1,061	3,265	534	1,374	1,908	5,173	246
7	22	1,547	93	647	2,287	514	347	861	3,148	143
8	28	3,024	175	882	4,081	912	424	1,336	5,417	193
9	27	4,037	139	1,405	5,581	292	1,008	1,300	6,881	254
10	18	3,342	104	1,361	4,807	837	1,445	2,282	7,089	393
11	26	2,337	46	1,169	3,552	1,341	535	1,876	5,428	208
12	24	1,214	55	349	1,618	651	683	1,334	2,952	123
合計	285	28,478	1,015	10,679	40,172	6,532	8,232	14,764	54,936	192

### 坂本繁二郎旧アトリエ（石橋文化センター内）

イベント名	開催日	日数	入場者数
つばきまつり	3/17～18	2	273
SAKURA まつり	3/31～4/1	2	715
バラフェア	5/3～6	4	1,372
はなしょうぶまつり	6/9～10	2	323
秋のバラフェア	10/27～28	2	267
合 計		12	2,950

## 新収蔵作品 New Acquisitions

絵画 Paintings

ヴォルス

Wols (Alfred Otto Wolfgang SCHULZE)

1913-1951

葵色と黄土色

1946年頃

グワッシュ・紙

23.1×17.5cm

外洋230

Mauve and Ocher

c.1946

Gouache on paper

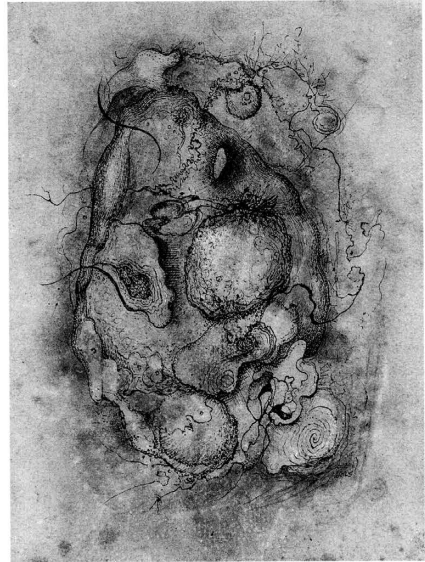
23.1×17.5cm

来歴：山本進、東京

Prov.: Yamamoto Susumu, Tokyo

展覧会歴 Exh.：

Galerie Europe, Paris, Wols, no.G.28; Galerie Bonnier, Lausanne, 50 *Gouaches de Wols*, no.15; 1965-66, Kunstverein Steinernes Haus, Frankfurt a M, *Wols Gemälde Aquarelle Zeichnungen Fotos*, no.134; 1966, Tekenirgen Stedelijk Van Abbenmuseum, Eindhoven, *Wols Schilderijen Gouaches, Aquarellen*, no.119; 1975、フジテレビギャラリー「20世紀の巨匠たち—素描と彫刻小品展」no.28; 1978、尼崎市総合文化センター「ヴォルス展」no.13; 1980、北九州市立美術館「ヴォルス展—油彩、水彩、素描、版画」no.16; 2011、ブリヂストン美術館「アンフォルメルとは何か?—20世紀フランス絵画の挑戦」no.49



ヴォルスはドイツ出身の画家で、本名をアルフレート・オットー・ヴォルフガング・シュルツェという。1913年にベルリンで生まれ、幼い頃はドレスデンで育った。父親は法学博士でドイツ帝国内務省の枢密顧問官をつとめており、ヴォルスは裕福な家庭環境で音楽に親しんで育った。父親は当時まだ評価の定まっていなかったバウハウスにかかわる芸術家の作品を所蔵していたという。これも関係してか、ヴォルスはデッサウのバウハウスに通い、パウル・クレーに師事した。しかし同校はすでに廃校が決定していたため、モホリ・ナギの勧めで1932年にパリに出た。パリでは当初、シュルレアリスム風の絵を描きながら、写真家として生計をたてた。1937年、パリのギャラリー・レ・プレイヤードで写真展を催し、この時はじめてヴォルスを名乗った。

ヴォルスは、第二次世界大戦がはじまるとすぐ敵国人として収監され、各地の収容所を転々とすることを余儀なくされた。この間マックス・エルンストと出会っている。収容所では、差し入れられた画材で素描や水彩画を盛んに手がけた。1940年、フランス国籍がある女性と結婚したため、収容所から解放された。この後本格的に作品制作に励むことになる。

1947年末、タピエは画家ジョルジュ・マチウらと共同で企画した「想像的なもの」展でヴォルスの作品を出品。以降もタピエは1948年の「H.W.P.S.M.T.B.」展や「白と黒」展、1951年の「激情の対決」展など、アンフォルメル芸術が概念として成長していく展覧会において、ヴォルスを常に残している。

1951年9月、ヴォルスは腐った馬肉で食中毒にかかり、38歳の若さで早世する。しかし、タピエは、ヴォルスをデュビュッフェ、フォートリエと並ぶアンフォルメルの先駆者と位置づけることをやめることはなかった。

日本でヴォルスの名は、1950年代より、岡本太郎、瀧口修造らのテキストで言及されていたが、富永惣一は、1956（昭和31）年12月に『みづゑ』第617号に発表した「今日の空間」において、アンフォルメルの先駆者として紹介した。実際の作品が展示されたのは、翌年の「世界現代芸術展」、1964年には南画廊で個展が開催されている。

本作が制作されたのは、1946年頃のこと。画家が収容所より解放された後の1945年に画商ルネ・ドルーアンの眼に留まり、同年12月にその画廊で個展を開催し、画家としての活動を本格化させた時期の作品である。この時、ヴォルスは不安定な生活と精神状態のなかで、内面世界を抽象的形態に託して表現した。比較的小さな空間の中に、非常に微細かつ繊細な線描で有機物のような形態が表現されており、薄塗りの色彩がそれに生命を宿しているかのようである。この頃、画家は油彩画、版画などの手法もとっていたが、本作に見られるような素描と水彩からなる作品は、ヴォルスが収容所時代より発展させた技法であり、画家の様式的特徴が明確に示されている。幾何学的抽象とは対極をなすこのような表現は、多大な影響を同時代の画家たちに与えることになる。

この頃のヴォルスの作品は、マチウ、フォートリエ、そしてタピエを惹きつけ、アンフォルメルの先駆的存在のひとりとして位置づけられるようになった。一方でその作品は、20世紀フランスを代表する哲学者ジャン＝ポール・サルトルがその作品を高く評価し、後にヴォルスはサルトルの作品の挿絵を担当することとなった。



オディロン・ルドン

Odilon Redon

1840-1916

リトグラフ集『夢想』(全6葉)

1891年

リトグラフ・紙

外版434

Dreams (In the memory of my friend  
Armand Clavaud)

1891

Lithograph on paper

来歴 Prov. : R. L. Mayer, U.S.A (He owned this set for about 50 years);  
Private Collection, USA (He owned this set for about 30 years).

文献 Bibl. : André Mellerio, *Odilon Redon*, Paris, 1913, p.109, No.110-115; André Mellerio, *Odilon Redon: Les Estampes — The Graphic Work, Catalogue Raisonné*, Edited by Alan Hyman, San Francisco, 2010, pp.234-245, No.110-115.

展覧会歴 Exh. :

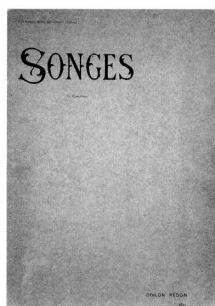
2012、ブリヂストン美術館「ドビュッシー、音楽と美術—印象派と象徴派のあいだで」nos. 128 (Ⅲ)、129 (Ⅳ)

19世紀後半のフランスの画家オディロン・ルドン(1840-1916)は、幻想と夢にあふれた独自の作風で知られる。1878年頃より石版の技法を学び、最初の版画集《夢のなかで》(1879年)を出版する。初期は木炭や版画で白と黒の幻想的な世界をつくりあげた。1890年頃からは油彩画やパステル画の制作をはじめ、明るい色彩を用いて神秘的な世界を描くようになった。オディロン・ルドンは、1870年代に木炭によるデッサンを好んで描いていたが、1878年にファンタン＝ラトゥールから石版技法を習い、最初の石版画集《夢の中で》(1879年)を発表した。1880年にカミーユ・ファルトと結婚し、ルドンの創作活動は急激に豊かになっていった。そして、《エドガー・ポーに捧ぐ》(1882年)、《起源》(1883年)、《ゴヤ頌》(1885年)、《夜》(1886年)、《聖アントワヌの誘惑》(1888年)、《ギユスターヴ・フロベールに》(1889年)、《悪の華》(1890年)、《夢想》(1891年)、《聖アントワヌの誘惑第三集》(1896年)、《ヨハネ黙示録》(1899年)、と次々に発表し、これらはマラルメ、ユイスマンズを含め多くの象徴主義文学者に高く評価された。

1891年に刊行された石版画集《夢想》は、1890年に自殺した年長の友人で植物学者のアルマン・クラヴォー(1828-1890)に捧げた版画集であり、「わが友アルマン・クラヴォーのために」という副題を持つ。二人は1860年頃に出会ってから、長年交流をつづけていた。アルマン・クラヴォーはシャラント県ブランザック出身。顕微鏡下の世界や進化論などの科学の世界への関心、ボードレール、ポーら同時代文学、あるいはスピノザやインド哲学など幅広い分野へのルドンの関心は、この植物学者からの影響が大きいと見られている。それゆえルドンの作品にしばしば登場する植物的なモチーフは、クラヴォーとの交流により生み出されたと考えられている。1890年12月1日にクラヴォーはボルドーの自宅で首を吊って亡くなる。本作品はクラヴォーの死の翌年に制作されたものである。第1葉のペロニカの聖顔布にルドンはキリストのかわりにクラヴォーの顔を描き込んでいる。限定80部。

表紙

Cover



---

I. それは一枚の帳、ひとつの刻印であった

I. It was a veil, an imprint

18.7×13.3cm

II. そして彼方には星の偶像、神格化

II. And beyond the astral idol, the apotheosis

27.7×19.2cm

III. うつろいやすい光、無限に吊されたひとつの頭

III. Precarious glow, a head suspended from infinity

27.5×21.0cm

IV. かげった翼の下で、黒い存在が激しく噛みついてた

IV. Under the shadow wing, the black being was biting energetically

22.5×17.2cm

V. 月世界の巡礼

V. Pilgrim of the sublunary world

27.5×20.5cm

VI. 日の光

VI. Day

21.0×15.8cm

安井曾太郎  
YASUI Sotaro  
1888-1955

F 夫人像  
1939年  
油彩・カンヴァス  
80.0×66.0cm  
右下に署名：S. Yasui  
日洋589

Portrait of Mrs. F  
1939  
Oil on canvas  
80.0×66.0cm  
Signed lower right



来歴：福島繁太郎；福島慶子；福島葉子；個人、東京；2012年、石橋財団  
Prov.：FUKUSHIMA Shigetaro; FUKUSHIMA Keiko; FUKUSHIMA Yoko; Private Collection, Tokyo; 2012, Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh.：

1939、東京府美術館「第3回一水会展」；1940、三味堂ギャラリー、東京「安井曾太郎肖像画鑑賞会」；1956、国立近代美術館、東京「安井曾太郎遺作展」no.126；1978、ブリヂストン美術館「安井曾太郎展」no.87；1979、京都国立近代美術館「安井曾太郎展」no.72；2005、宮城県美術館・茨城県近代美術館・三重県立美術館「歿後50年安井曾太郎展」no.80；2009、ブリヂストン美術館「安井曾太郎の肖像画」no.10-1

文献 Bibl.：

1942、『安井曾太郎肖像畫集』造形藝術社；1951、福島慶子「安井画伯の肖像を描く」『文藝春秋』29巻4号；1951、安井曾太郎「私の描いた肖像画」『文藝春秋』29巻5号；1956、福島繁太郎「肖像画の理想」『心』9巻3号；1956、『安井曾太郎』美術出版社、no.25；1962、『世界名画全集続巻(7)安井曾太郎・坂本繁二郎』平凡社、no.21；1962、『日本近代絵画全集(6)安井曾太郎』講談社、no.31；1977、富山秀男編『近代の美術(42)安井曾太郎』至文堂、図版72；1979、嘉門安雄『安井曾太郎』日本経済新聞社、no.33、p.216

安井曾太郎（1888-1955）は、京都の聖護院洋画研究所で浅井忠、鹿子木孟郎の指導を受けたのち、1907年6月、19歳でパリに渡り、第一次世界大戦が勃発する1914年8月まで7年間、滞在した。そのうち前半の3年間、アカデミー・ジュリアンでジャン=ポール・ローランズに師事し、アカデミズムの伝統と堅実な人体表現を身につける。一方、ルーヴル美術館、リュクサンブール美術館などで実地に作品を見て、古典古代から同時代美術までを幅広く学ぶ。ギリシア彫刻、ジャン=フランソワ・ミレー、カミーユ・ピサロ、ビエール=オーギュスト・ルノワール、そしてとりわけポール・セザンヌの影響を強く受ける。帰国後、日仏の風土や環境の違いなどから、約15年間の低迷期を送る。長い模索を経て、1929年に突如として、のちに「安井様式」と呼ばれる明快な輪郭と芳醇な色彩の新しいスタイルを発表した。以後、人物画、風景画、静物画のそれぞれの分野で、考え抜かれた構図を豊かな色彩で覆う作品を制作する。1934年に発表した《玉蟲先生像》と《金容》によって、肖像画家として高く評価される。こののち没年にいたるまで、肖像画制作の依頼が間断なく安井に寄せられた。

この《F夫人像》のモデル、福島慶子（1900-1983）は、美術コレクター、美術評論家であった福島繁太郎（1895-1960）の妻。フランス滞在中の1929年、慶子はアンドレ・ドランに肖像画を制作してもらおう約束をしていたが、慶子の病気で流れてしまう。帰国後、慶子は肖像画をしかるべき画家に描いてもらいたいと希望していた。繁太郎は、「二科会に安井先生が出品された、和服の婦人像に非常に感心したので、安井先生にお願いすることにした」という。黒い冬服姿で開始したが、途中で中断する。白地に黒く細かい縞のある夏服に変えて慶子はポーズをとった。故意に描きにくい服装を選んだらしく、慶子は「安井殺し」の服と言っている。この肖像画の出来に満足した福島夫妻は、これをきっかけに安井と晩年まで親しく交わった。

青木繁  
AOKI Shigeru  
1882-1911

上京途中スケッチ

1902年

鉛筆・紙

11.4×18.8cm (右)、

11.6×18.8cm (左)

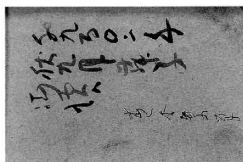
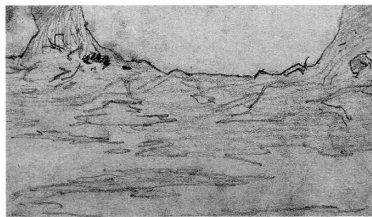
裏面にも鉛筆によるスケッチあり。

裏面書込：「吾恥島」、「千九百〇二年 / 秋九月

舞子海浜」(以上は青木の筆跡)、「青木繁筆」

(坂本筆)

日洋586



裏面

On the Way to Tokyo

1902

Pencil on paper

11.4×18.8cm (Right)、11.6×18.8cm (Left)

来歴：個人蔵、北九州；2012年、石橋財団

Prov. : Private collection; 2012, Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh：1980、石橋美術館 / プリヂストン美術館「青木繁の息吹き 青木繁未発表作品と資料」no.23, 25; 2011、石橋美術館 / 京都国立近代美術館 / プリヂストン美術館「没後100年 青木繁展—よみがえる神話と芸術」no.9

作品は坂本繁二郎旧蔵。青木スケッチの鑑定へのお礼として福岡のコレクターより贈呈されたもの。裏面に坂本の筆で「青木繁筆」とあるのは、その際の鑑定書だろう。1902年、青木は徴兵検査のため久留米に帰省。同年秋、坂本と共に上京途中立ち寄った兵庫県舞子でのスケッチと思われる。裏面のスケッチは、舞子より淡路島をスケッチしたもの。このスケッチは、坂本との交友を証するものとして、また青木初期のスケッチとして貴重である。同じ時同じ場所でスケッチしたと思われる松の木の根元に腰掛けた坂本像も知られている。

---

野見山暁治  
NOMIYAMA Gyoji

1920-

あしたの場所

2008年

油彩・カンヴァス

194.0×194.0cm

右下に署名：Nomiya

日洋587

The Place Tomorrow

2008

Oil on canvas

194.0×194.0cm

Signed on right

来歴：2012年、石橋財団

Prov.：2012, Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh：2011、石橋美術館 / プリヂストン美術館「野見山暁治展」no.81

2011年、石橋美術館とプリヂストン美術館で野見山暁治の回顧展を開催。展覧会の実施について協議を始めたのは2008年末で、それ以降、野見山は新たな様式を打ちだそうと取り組む。この作品は、その前の段階で特に完成度が高く、色調のわりに躍動感ある作品となっている。

---

野見山暁治  
NOMIYAMA Gyoji

1920-

かけがえのない空

2011年

油彩・カンヴァス

131.0×162.0cm

左下に署名：Nomiya

日洋588

The Irreplaceable Sky

2011

Oil on canvas

131.0×162.0cm

Signed on left

来歴：2012年、石橋財団へ寄贈

Prov.：2012, donated to Ishibashi Foundation.

展覧会歴 Exh：2011、石橋美術館 / プリヂストン美術館「野見山暁治展」no.88

前述の回顧展に向けて制作された作品。この赤は、今までにない色調の赤で、ステンドグラス制作の影響もうかがわれるが、野見山絵画の新たな展開のひとつと見られる。2012年に入ってえがいた作品にも、同じ赤が確認され、この表現に成功した最初の作品と位置づけられる。また、野見山は石橋美術館とプリヂストン美術館の展示室サイズに合わせ、カンヴァスをやや小さくしてきたのだが、この作品は実際のサイズ以上の勢いが感じられる。

---

新収図書

ブリヂストン美術館

	購入	寄贈	計
和書	27 冊	46 冊	73 冊
洋書	45 冊	62 冊	107 冊
計	72 冊	108 冊	180 冊

(展覧会図録・逐次刊行物は含まない)

石橋美術館

	購入	寄贈	計
和書	54 冊	60 冊	114 冊
洋書	0 冊	0 冊	0 冊
計	54 冊	60 冊	114 冊

(展覧会図録・逐次刊行物は含まない)

## 修復記録

	作品	修復報告
1	《伊勢集断簡 石山切（にさへや）》 平安時代、IMA、日書45	紙本墨書 / 20.2×15.4cm 調査・写真記録、絵具の剥落止1、解体、絵具の剥落止2、本紙肌裏紙の除去、本紙裏面の調査・写真記録、本紙肌裏打ち、台紙の肌裏打ち、元裂の肌裏打ち、本紙・台紙の増裏打ち、折り伏せ、本紙・台紙の切り継ぎ、中裏打ち、台紙・表装裂の切り継ぎ、総裏打ち、仕上げ、収納（太巻芯および箱の新調）、処置後の写真記録・報告書作成
2	《伊勢集断簡 石山切（ももしき）》 平安時代、IMA、日書46	紙本墨書 / 20.4×15.8cm 調査・写真記録、絵具の剥落止1、埃の除去、解体、絵具の剥落止2、本紙肌裏紙の除去、本紙裏面の調査・写真記録、本紙肌裏打ち、台紙の肌裏打ち、元裂の肌裏打ち、本紙・台紙の増裏打ち、折り伏せ、本紙・台紙・表装裂の切り継ぎ、中裏打ち、総裏打ち、仕上げ、収納、処置後の写真記録・報告書作成
3	《伊勢集断簡 石山切（みそめすも）》 平安時代、IMA、日書47	紙本墨書 / 20.2×15.7cm 調査・写真記録、絵具の剥落止1、解体、絵具の剥落止2、本紙肌裏紙の除去、本紙継ぎ手の浮き止め、本紙裏面の調査・写真記録、本紙肌裏打ち、台紙の新調・肌裏打ち、元裂の肌裏打ち・補絹、増裏打ち、折れ伏せ、本紙・台紙・表装裂の切り継ぎ、中裏打ち、総裏打ち、仕上げ、収納（太巻芯および箱の新調）、処置後の写真記録・報告書作成
4	尾形乾山《不二図》 江戸時代、IMA、日書50	紙本著色 / 23.6×50.8cm 調査・写真記録、絵具の剥落止1・クリーニング、絵具の剥落止2、解体、本紙肌裏紙の除去、本紙裏面の調査・写真記録、絵具の剥落止3、亀裂部の補強、本紙肌裏打ち、増裏打ち、折れ伏せ、増裏打ち、表装裂地の新調、切り継ぎ、総裏打ち、仕上げ、収納（太巻芯および箱の新調）、処置後の写真記録・報告書作成

\* 修復報告欄に載せる内容は、修復担当者による報告書に基づく。

---

## 〈保存環境調査の実施〉

---

ブリヂストン美術館とブリヂストン美術館永坂分室（以下永坂分室とする）の収蔵庫および展示室の環境測定、虫菌害調査をおこなった。調査日、実施日、場所、内容は下記の通りである。

1. 調査者       ：イカリ消毒株式会社 深川営業所 関東 CPS
2. 調査実施日：・ブリヂストン美術館   2012年8月27日（トラップ設置期間：8月27日－9月18日）  
                  ・永坂分室                   2012年8月30日（トラップ設置期間：8月30日－9月21日）
3. 調査場所    ：・ブリヂストン美術館   1F正面エントランス、搬出入口、2F展示室（1室－10室、彫刻ロビー、収蔵庫、展示室倉庫等）  
                  ・永坂分室                   展示室（1室－2室）、エントランスホール、修復室、閲覧室
4. 調査項目    ：・ブリヂストン美術館  
                  (1) 空中浮遊カビ調査   (2) 室内浮遊塵埃数調査   (3) 昆虫類捕獲調査   (4) 温湿度調査  
                  ・永坂分室  
                  (1) 空中浮遊カビ調査   (2) 室内浮遊塵埃数調査   (3) 昆虫類捕獲調査   (4) 温湿度調査  
                  (5) 照度・紫外線強度調査



*Matisse, Paires et Séries*

Centre Pompidou / March 7 – June 18, 2012

- 1) アンリ・マティス 《縞ジャケット》(外洋57)

---

「セザンヌ―パリとプロヴァンス」展

国立新美術館 / 2012年3月28日－2012年6月11日

- 1) ポール・セザンヌ 《水浴群像》(外洋30)

---

「美の宴 東洋の古美術、印象派や古地図が織り成す珠玉の世界」展

和泉市久保惣記念美術館 / 2012年10月14日－2012年12月2日

- 1) クロード・モネ 《睡蓮の池》(外洋23)

- 2) ピエール＝オーギュスト・ルノワール 《カーニユのテラス》(外洋33)

---

「ぬぐ絵画 日本のヌード」展

東京国立近代美術館 / 2011年11月15日－2012年1月15日

- 1) 百武兼行《臥裸婦》(日洋2)
- 2) 安井曾太郎《水浴裸婦》(日洋142)
- 3) 古賀春江《鳥籠》(日洋164)

---

「中国近代絵画と日本」展

京都国立博物館 / 2012年1月7日－2012年2月26日

- 1) 和田英作《チューリップ》(日洋65)

---

「日本の印象派・金山平三」展

兵庫県立美術館 / 2012年4月7日－2012年5月20日

- 1) 金山平三《田沢の春》(日洋119)
- 2) 金山平三《石母田の堤》(日洋121)
- 3) 金山平三《習作・女》(日洋222)

〈展覧会カタログ〉

「パリへ渡った『石橋コレクション』一九六二年、春」(特別展)  
*Ishibashi Collection Selected for the Exhibition in Paris, Spring, 1962*

本文：

「パリへ渡った『石橋コレクション』1962年、春」展によせて /  
 島田紀夫(pp.6-7)

For the Exhibition, “*Ishibashi Collection*, Selected for the Exhibition in Paris,  
 Spring, 1962” / Shimada Norio (pp.76-78)

「石橋コレクション」とベルナール・ドリヴァル / 田所夏子(pp.8-13)

The “*Ishibashi Collection*” and Bernard Dorival / Tadokoro Natsuko (pp.79-83)

カタログ：

〔作品編〕 コラム：記録映画「石橋コレクション・パリ」/ コレク  
 ターとしての酒井億尋 / 「パリにおけるコレクション展  
 について」/ ピカソ《女の顔》と石橋正二郎

〔資料編〕 ジャック・マレシャルによる画面洗浄修復 / 輸送梱包作業、警備について / パリにおけ  
 る「石橋コレクション」展関連記事目録—1962（昭和37）年開催当時の記事を中心に（田  
 所夏子編）

ブリヂストン美術館と1962年パリの「石橋コレクション」展、およびベルナール・ドリヴァル関連略年譜（田  
 所夏子編）

作品リスト（英文併記）

図版（カラー47図、参考20図）

執筆：島田紀夫、田所夏子

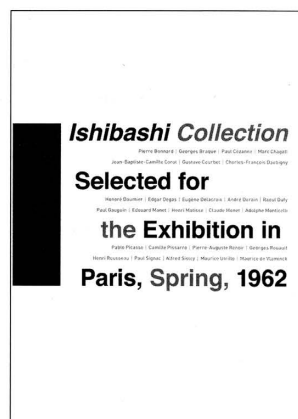
翻訳：小川紀久子

表紙デザイン：梯 耕治

制作・印刷：アート印刷

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2012年1月)

26×19cm 85 p



「パリへ渡った『石橋コレクション』一九六二年、春」(特別展)  
*Ishibashi Collection Selected for the Exhibition in Paris, Spring, 1962*

出品目録

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2012年1月)

30×21cm 三つ折りリーフレット



「あなたに見せたい絵があります。

ーブリヂストン美術館開館60周年記念」(特別展)

The Bridgestone Museum of Art at Sixty: You've Got to See These Paintings

本文：

「あなたに見せたい絵があります。

ーブリヂストン美術館開館60周年記念」展に寄せて / 島田紀夫 (pp.9-15)

You've Got to See These Paintings: On the Bridgestone Museum of Art Sixtieth Anniversary Exhibition / Shimada Norio (pp.199-206)

ギュスターヴ・カイユボット作《ピアノを弾く若い男》について / 新畑泰秀 (pp.142-149)

岡鹿之助《セーヌ河畔》、1927年のパリ風景 / 貝塚 健 (pp.150-156)

図版：

- 1章 自画像
- 2章 肖像画
- 3章 スード
- 4章 モデル
- 5章 レジャー
- 6章 物語
- 7章 山
- 8章 川
- 9章 海
- 10章 静物
- 11章 現代美術

コラム：ウフィツィの自画像コレクション / 東京芸術大学の自画像コレクション / ルノワールとパトロン  
/ 家族の肖像 / 美術教育（アカデミー） / マティスとモデル / 近代美術とサーカス / 絵画の主  
題 / 青木繁と古事記 / 芸術家コロニー / 芸術家の旅 / 坂本繁二郎の連作 / スーラージュとザ  
オ・ウーキーのブリヂストン美術館訪問

作品解説 / 作家解説 / Commentaries on Chapters / Biographies

出品作品リスト / List of Works

図版（カラー109図、参考28図）

監修：島田紀夫

編集：貝塚 健

執筆：島田紀夫、貝塚 健、賀川恭子、新畑泰秀、田所夏子、中村節子、平間理香、森山秀子

翻訳：ルシー・S・マクレリー

表紙デザイン：若林伸重

制作：印象社

発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2012年3月)

28×23cm 233 p ISBN: 9784901528139



「あなたに見せたい絵があります。」  
—ブリヂストン美術館開館60周年記念」(特別展)  
The Bridgestone Museum of Art at Sixty: You've Got to See These Paintings

出品目録  
編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2012年3月)  
30×21cm 8 p



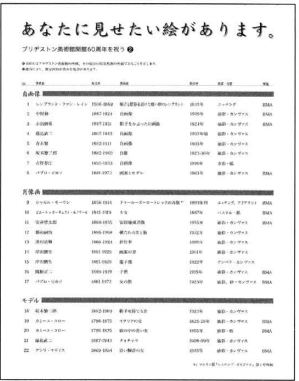
「くらべる。つながる石橋コレクション」  
—ブリヂストン美術館開館60周年を祝う①」(特別展)

出品目録、作家解説  
図版(カラー10図)  
編集・発行：石橋財団石橋美術館(2012年3月)  
28×23cm 12 p



「あなたに見せたい絵があります。」  
—ブリヂストン美術館開館60周年を祝う②」(特別展)

出品目録  
編集・発行：石橋財団石橋美術館(2012年7月)  
28×21cm 二つ折りリーフレット



「ドビュッシー、音楽と美術—印象派と象徴派のあいだで」(特別展)  
Debussy, la musique et les arts : entre impressionnisme et symbolisme

本文：

「なにか口火を切らねばならないでしょうから」 / ギ・コジュヴァル(pp.12-13)

Puisqu'il faut bien commencer par quelques mots / Guy Cogeval (pp.207-208)

東京におけるドビュッシー展—印象派と象徴派のあいだで / 島田紀夫(pp.15-18)

L'exposition Debussy à Tokyo: Entre impressionnisme et symbolisme /

Norio Shimada (pp.209-213)

「自分の音楽的夢想を書きたい……」 / ジャン=ミシェル・ネクトゥー(pp.19-29)

「影の側に」—象徴主義者ドビュッシー / ジャン=ダヴィッド・ジュモー=ラフォン

音楽は絵のごとく—ドビュッシーと美術、ドビュッシーと日本 / 新畑泰秀(pp.58-63)

La musique est comme la peinture: Debussy et les arts: Debussy et le Japon /

Yasuhide Shimbata (pp.214-219)

ペレアスを探して—ドビュッシーの傑作と舞台の危うさ /

ギ・コジュヴァル ; インタビューアー、ステファン・ゲガン(pp.124-129)

独立芸術書房をめぐる人々 / ドウニ・エルラン(pp.148-157)

生の形式としての印象主義—1920年代にドイツ人はドビュッシーをどのように鑑賞したか /

マルタン・カルテネッケール (pp.170-175)

彩色の極致 / ユーグ・デュフル(pp.198-200)

カタログ：

第1章 ドビュッシー、音楽と美術

第2章 《選ばれし乙女》の時代

第3章 美術愛好家との交流—ルロール、ショーソン、フォンテーヌ

第4章 アール・ヌーヴォーとジャポニスム

第5章 古代への回帰

第6章 《ペレアスとメリザンド》

第7章 《聖セバスチアンの殉教》《遊戯》

第8章 美術と文学と音楽の親和性

第9章 灵感源としての自然—ノクターン、海景、風景

第10章 新しい世界

ドビュッシー略年譜 / 主要参考文献 (ブリヂストン美術館編) / Bibliographie

出品作品リスト (欧文併記)

図版 (カラー151図、参考72図)

編集：石橋財団ブリヂストン美術館、日本経済新聞社文化事業部

執筆：ギ・コジュヴァル、ジャン=ミシェル・ネクトゥー、ユーグ・デュフル、ステファン・ゲガン、  
ドウニ・エルラン、ジャン=ダヴィッド・ジュモー=ラフォン、マルタン・カルテネッケール、グザヴィ  
エ・レイ、島田紀夫、新畑泰秀、賀川恭子

仏文和訳：梅宮典子、賀川恭子、谷川かおる、長谷川光明

和文仏訳：小川カミーユ、カトリーヌ・アンスロ

編集協力：鶴園紫磯子

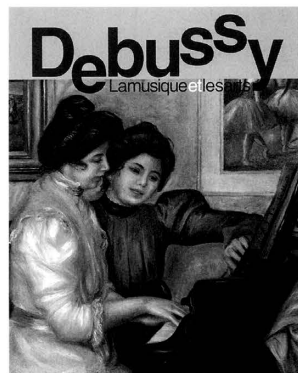
デザイン：田中久子

制作：アイメックス・ファインアート

印刷：大日本印刷

発行：日本経済新聞社、石橋財団ブリヂストン美術館

27×22cm 235 p



「ドビュッシー、音楽と美術—印象派と象徴派のあいだで」(特別展)  
Debussy, la musique et les arts: entre impressionnisme et symbolisme

出品目録

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館、日本経済新聞社(2012年7月)

30×21cm 8p



「気ままにアートめぐり—印象派、エコール・ド・パリと20世紀美術」  
(コレクション展示)

Art Walk: Selections from the Collection of the Bridgestone Museum of Art

出品目録

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2012年10月)

30×21cm 三つ折りリーフレット



「8人の作家たち」(コレクション展示)

出品目録

図版(モノクロ1図)

編集・発行：石橋財団石橋美術館(2012年10月)

30×14cm 三つ折りリーフレット



---

## 〈その他の刊行物〉

「石橋正二郎とブリヂストン美術館」

Ishibashi Shojiro and Bridgestone Museum of Art

本文：

はじめに

石橋コレクションの形成—久留米時代

石橋コレクションの形成—東京時代

石橋コレクションの拡充

ブリヂストン美術館開館

パリ里帰り展

展覧会の記録

その他の文化活動

コラム：水浴図としての裸婦像 / 藤島武二の滞欧作 / ピカソ《女の顔》

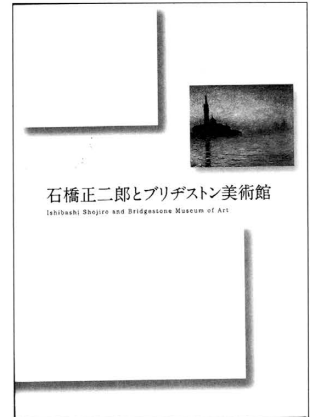
巻末：ブリヂストン美術館展覧会一覧

装丁・デザイン：若林伸重

制作：印象社

編集・発行：石橋財団ブリヂストン美術館(2012年3月)

30×21cm 59, [20]p ISBN: 9784901528122





---

「館報」60号 (2011年度)

Annual Report of Bridgestone Museum of Art & Ishibashi Museum of Art

内容 :

設立趣旨、機構・運営

展覧会 (コレクション展示、特別展)

教育普及 (講座、ギャラリートーク、ファミリープログラム、  
インターンシップ、サポートボランティア、実習生受入など)

入場者数 (2011年度)

新収蔵作品 (作品6点)

新収図書

修復記録

作品貸出記録

刊行物一覧

研究報告 エドゥアール・マネ《自画像》(下) / 島田紀夫(pp.91-98)

ギュスターヴ・カイユボット《ピアノを弾く若い男》/ 新畑泰秀(pp.99-108)

岡鹿之助《セーヌ河畔》、1927年のパリ風景 / 貝塚 健(pp.109-116)

アルフレッド・シスレー《森へ行く女たち》/ 賀川恭子(pp.117-121)

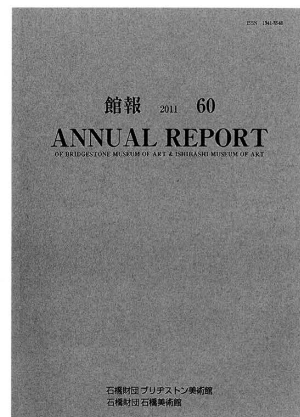
美術館案内

石橋財団職員

編集・発行: 石橋財団ブリヂストン美術館、石橋財団石橋美術館(2012年3月)

印刷: モリモト印刷

26×19cm 123 p ISSN 1341-8548



## 関根正二《子供》のいま

貝塚 健

### 1. はじめに

澄んだ水色を背景に、鮮やかな朱色の着物を着た5、6歳の少年が座っている。筆者には、床に腰を下ろしているのではなく、椅子に腰掛けているように思えるのだが、下半身は描かれず断定はできない。両手を軽く前に組み、少年は斜め右をまっすぐに見つめている。その確信的な眼差しは、子どもながらに、未来を真摯に受け止める決意に満ちているようだ。画家の遠藤彰子はこんなふうに語っている。

この少年の姿には、少なからず衝撃を受ける。この肖像が、少年の属性をあまりにも備えているように見えるからだと思う。普遍性を持ちながらもいたって個性的であることにも驚きだ<sup>1)</sup>。

石橋財団ブリヂストン美術館が所蔵する関根正二の《子供》(fig.1)は、大きさ、縦60.9センチ、横45.7センチ。画面左上に「1919 / masaji」という年記と署名があり、1919年6月16日に20歳2カ月で肺結核により亡くなった関根の、最晩年の油彩作品であることを教えてくれる。前年9月、《信仰の悲しみ》(fig.2)、《姉弟》、《自画像》を第5回二科美術展覧会に出品した19歳の関根は、有望新人に与えられる梶牛賞を受賞する。それから一年経たず、関根は慌ただしく逝ってしまった。貧しく画材が十分に与えられなかったため、我々に残さ



fig.1  
関根正二《子供》1919年、油彩、  
石橋財団ブリヂストン美術館

れた彼の油彩画は少ない。最晩年の関根の画業を知る上で、この《子供》は貴重な作例となるだろう。また没後の神話じみた熱狂とも、この作品は関わっている。本稿で、この作品が持っている情報を整理し直し、その位置づけをあらためて考えてみたい。

### 2. 切断と再制作

1989年、この作品を額縁から外そうとしたとき、石橋財団ブリヂストン美術館の保存担当芸員だった田中千秋には確信があったに違いない。《子供》は、画面の下層に現在の図柄と異なる絵具層があるのが、肉眼でも見えるからだ。作品を額縁から外した田中は、期待通りの事実、額縁で隠れていたカンヴァスの張り代部分に下層の図柄の絵具が続いていることに満足しただろう。田中はこの下層の図柄を突き止めていく。のちに田中は、関根による作品の切断と再制作について、こんなふうにまとめている。

現在ブリヂストン美術館に所蔵される《子供》については、肉眼による状態調査の段階で以下のようなことが判っていた。①右辺の側面にまわったカンヴァスの端の部分「耳」には、画面とは無関係の絵具が残っており、それは明らかに途中で切断されている。②他の3辺の側面には絵具の外側に鋸の跡のある古い耳が残っている。③背景の青い絵具は、画面の端で切れているが、一部は耳にもまわっている。④下辺の耳には子供の着物の朱色が残っている。

以上のことから次のような推察が可能となる。



fig.2  
関根正二《信仰の悲しみ》1918年、油彩、大原美術館

まずこの作品は、以前に制作されたより大きな別の作品の上に、塗り重ねるように描かれた後、制作の途上で切断された。そして現在の本枠に張り換えられ、最後に背景等に手を加えて仕上げられたのではない。

ではどんな絵の上にこの作品は描かれたのであろうか。背景の青色の下層には肉眼でも白と朱の色相を確認出来るが、その形や構図を読みとることは困難であった。そこで赤外線テレビカメラを用いた観察を行うことによって、右から左に広がる扇状の「白い面」と、中央で画面を左右に分ける「境界線」が上部と下部に確認できた (fig.3)。先ほどと同じように今度はこの赤外線写真の左辺が下辺となるように90度回転させると、これらの「白い面」と「境界線」は、《神の祈り》(fig.4)をはじめとする他の作



fig.3  
《子供》の赤外線写真

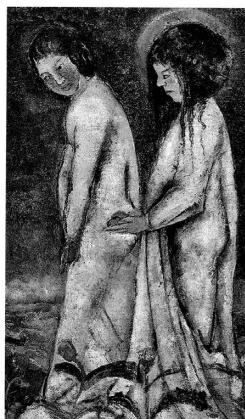


fig.4  
関根正二《神の祈り》1918年、  
油彩、福島県立美術館

品に繰り返し出てくる女性の「衣服の裾」と「地平線」とに対応している。また画面上や右辺の耳に見られる白と朱の色面から、元のカンヴァスにはこれら二色の衣服を着た二人の女性像が描かれていたと考えられる。

従って切断される前の本作品の上半分には女性の上半身が描かれていた筈であり、該当作と思われる《三人の顔》(fig.5)との写真の合成が試みられた。結果は《子供》の右辺の耳に残された色面と《三人の顔》の下辺端の色面が完全に一致し、二つの作品が繋がっていたことが確実となった (fig.6)。恐らく《三人の顔》の方の子供から描きはじめたが(女性の顔を塗りつぶしてしまうのは憚られたのか)途中で止め、新たに左に移って《子供》を完成させたと考えられる。画材を満足以買うことの出来なかった関根は、下層に描かれた女性の衣服の朱色を《子供》の着物の色に流用したのであろう。

また、下層にあった元の二人の女性像は、ちょうど《神の祈り》の左右を反転した鏡像のようであり、構図も非常によく似ている。両者を比較すると、この作品の画面向かって左の女性像は《神の祈り》の右側の女性像と同じく手



fig.5  
関根正二《三人の顔》1918年頃、油彩、個人蔵



fig.6  
《子供》と《三人の顔》の合成写真

に捧げものを持っているが、頭に輪光はない。  
《神の祈り》は夜の情景と思われる暗い背景であるのに対して、この作品では黄色と朱色の壁がん状の明るい背景に踊る男達と思われる不思議な図が描き込まれ、異質な空間となっている。また、本作品の左側の女性の衣服の白い絵具の下にはヴァーミリオンの層が認められ、当初の段階では二人の衣服の色は共に朱色だったと思われる。このことは、《神の祈り》の二人の女性が白い衣服であるのと対照的である。更にこの作品が切断される以前の、元の画面サイズは91×65cm (P30号に相当)と推定され、《神の祈り》を大きく上回る、よりモニュメンタルな作品であったことが想像できる<sup>2)</sup>。

《子供》と《三人の顔》が関連を持つことは、村田真宏が、「《三人の顔》と呼ばれる作品の、《子供》(ブリヂストン美術館蔵)のエスキースが描かれる以前に完成されていた横向きの二人の女性」<sup>3)</sup>と指摘しているように、以前から知られていた。田中によって、この2作品が当初は一体のキャンバスだったことが発見されたのである。

こうした関根の再制作については、友人たちが証言している。たとえば、三渚末松は「油の方は経済上の関係もあって、気に入らなければ片端から塗り潰しては其上へ描いてゐた」<sup>4)</sup>と述べ、村岡黑影は「猶彼は物質的に非常な圧迫を感じながら只管製作に努めた。彼の家は彼の製作に満足するだけの材料を与ふるに困難であつた。けれども家人は良く理解し絶対の自由と出来得る限りの補助とを与えてゐた。それで絵は二度三度塗りつぶしたキャンパスになつてゐるのがいくらかもある。」<sup>5)</sup>と記している。

《子供》は、女性像の衣服が描かれた画面を下地にして、その上に新たに描かれた人物像ということになる。留意しておきたいのは、関根が古キャンバスの下地のマチエールや色彩を再制作で生かしていたことである。それが、重厚でありながら同時に新鮮さを失わない味わいを醸し出し、再制作作品の魅力の一つになっている。

### 3. モデル

この人物画に描かれた少年がだれなのかという問題について、ながらく「近所の小児」と考えられてきた。関根の小学校以来の友人で、最晩年の関根とも親しく交わった太田鶴三郎が、関根が亡くなって2カ月後、すなわち《子供》が描かれて

間もない時期に、次のように語っているからである。

最後の作は二十五号の自画像と二科へ出品の五十号『慰められつゝ悩む』と十二号の赤い着物を着た小児とです。小児のは実に短時間で成された物で家人が外出して私と留守居してゐる間に近所の小児を呼んで画いたものです。その時の有様は今でもはつきりと眼前に浮んで来ます<sup>6)</sup>。

以来、そう信じられてきたのだが、関根研究に多大な貢献を残した土方定一が、モデルは関根の末弟・武男だという新説を発表する。土方は、関根の足跡を訪ね網羅的に関係者から聞き取り調査を行った。制作から54年後の1973年に、以下のよう

に書いている。関根正二のいちばん末の弟さん〔武男〕がおられることなどは予想もしなかったとほくは書いたが、ほくの研究が関根正二の故郷、福島県白河市搦目から出発し、そこの戸籍抄本から出発したために、関根の父、政吉が搦目にいたときの政吉の家系はでているが、東京にでてきてから生まれた新しい家系を知るのを怠ったためである。調査というものの面白さもこんなところにあるのかも知れない。それより、現在、ブリヂストン美術館に飾られている例の「子供」像、背景を濃い青の空色とし朱の着物を着、両手を前にあわせ、こちらを見ている子供の確信的な像は、「私の子供のときの肖像です」といわれたときには、ほくは「ほんとうですか」とあやうく驚きの質問を發しそうになっていた。というのは、この「子供」は、偶然、遊びにきていた子供を関根が二、三時間で描いたといわれており、ほくもそう思っていたからである。そういわれて、その方の顔を見ると、そこに、なんとなく幼いときの風貌が背後の映像のように浮かんでくるから不思議である、こういう経験は、誰でも同窓会などに出席して、そこに出会う級友たちの年齢の変化の背後に、いつの間にか浮かんでくる若き日の映像の経験と似ている<sup>7)</sup>。

関根武男は、1913年1月14日生まれである<sup>8)</sup>。だから《子供》が描かれたとき、満6歳になったばかりということになる。描かれた少年の年格好にふさわしいといえるだろう。

因みに、武男は兄・正二の日記に二度登場してくる。例えば、1917年9月3日の条には、「弟武男をつれて、上野山〔清貢〕の所へ行く。十二時迄遊ぶ。伊東〔深水〕に逢つて帰る」<sup>9)</sup>とある。14歳違いの末弟を、関根は可愛がっていたようだ。

では、「近所の小児」と何なのだろうか。目撃者だという親友の証言を一方的に否定はしにくい。おそらく、太田は武男を知らなかったのではないだろうか。太田と二人で自宅にいた関根が、外で遊んでいる武男をモデルにするため呼び入れたとき、わざわざ太田に紹介しなかったのだろう。関根が武男像を描いているのを、その弟と知らずに、太田は固唾をのんで見守っていたのだと考えてみたい。

このモデルの問題を、画面の署名と絡めて考えてみよう。《子供》は、めずらしく「masaji」と署名されている。この署名について、伊藤匡は、こんなふうに述べている。

このうち、子供を描いた作品群で注目したいのはサインである。前述の《子供》のサインは masaji くまさじ」となっている。このたび初めて公開される作品群の中にも男児を描いたものが4点あり、そのうち3点にやはり masaji のサインがある。同じサインの入った作品はもう一点《少女の顔》(fig.7) という題のつけられているペン素描があるが、これも描かれているのは少女というより幼児である。1918年から19年にかけて、関根は集中的に子供、特に男児を描いていることになる。しかも、masaji サインはすべて男児または幼児の像である。《死を思う日》に Shoji Sekine というサインを入れて以来、つねにくしょうじ」を示す S. SEKINE という



fig.7  
関根正二《少女の顔》1918年、インク、  
個人蔵

サインを入れていた関根が、子供を描いた絵に限ってくまさじ」サインを入れていることには、彼なりの意図をみてもよいだろう。それは一種の自画像であり、幼い頃の自画像とでもいうべきものではないか。そしてそこには、純真、無垢な自己というものはや現実にはかなえられない夢想を託しているように思われる<sup>10)</sup>。

伊藤が、この署名を「純真、無垢な自己というものはや現実にはかなえられない夢想を託している」と見ているのはとても興味深い。関根は、画家として「しょうじ」で通したが、本名は「まさじ」であり、家族からは「まーちゃん」と呼ばれていた。「masaji」署名の作品群をていねいに見極めていく必要があるのだが、この署名は、端的に、おそらく家庭内の出来事を意味しているのではないだろうか。《子供》が末弟・武男を描いたものであるとするならば、まさしくそう呼び合った兄弟どうしの協働作業ということが出来る。この署名は、「武男説」を補強するものと考えたい。同じく「masaji」署名がある素描《少女の顔》(1918年)は、《子供》と同じ武男を描いたものではないだろうか。

#### 4. 来歴

次に、《子供》の来歴について整理してみよう。ブリヂストン美術館は、この作品を1956年9月、東京画廊から15万円で購入した。そのときの経緯を、後年、同画廊の山本孝が大原美術館長・藤田慎一郎に、以下のように語っている。

藤田 この作品〔関根正二《信仰の悲しみ》〕も、大原〔總一郎〕さんはことのほか気に入って「関根の数少ない絵の中でも傑作だから、大切にしてお所へは貸し出しするな」と僕に言っていた。

ところで、この作品が大原美術館に入って、石橋〔正二郎〕さんが残念がられたと聞いているが。

山本 その通りです。

この作品が大原に入った後に出てきたのが、今、ブリヂストン美術館にある同じ関根の「少年像」だった。僕の家内の親戚で大塚〔銀次郎〕というのが、戦前、神戸画廊というのを経営していて、元町画廊の顧問のような仕事をしていて。そこに「少年像」が出てきて「いい絵だから買っておけ」という連絡が入ったので、翌日、

神戸に行って引き取ってきた。

そこへ、どこから噂を聞きつけてきたのか分からないが、ブリヂストン美術館の岩佐新さん（当時、ブリヂストン美術館美術部長）が汗を拭きながら飛び込んで来た。まさかその時は関根を見に来たとは思わなかった。その前に「信仰の悲しみ」が大原に入った時、岩佐さんが悔しがったという話は聞いていたけれどもね。入ってくるなり「何か見せろ」と言う。出したのが気に入らなくて「もっとあるだろう」と言うので「少年像」を見せたらもう駄目。「石橋が駄目と言っても、何としてでもくどくから、値段はいくらでもよいからこっちへよこせ。大原にはもう『信仰の悲しみ』が入ったんだから、東京にも一点置いておけ。倉敷まで見に行くのは大変だから」と言われて、それではということになった。石橋さんはとても喜ばれた。

美術商にとっては、銭金じゃないこうした喜びは格別だね。画商の務めは格のある所へ絵を納めることで、いくら「少年像」が高く売れるからといっても、その作品に見合わないお客さんは避けるべきだと思う。前にも触れたけど、かつては反町さんに光琳の「紅白梅図屏風」をお勧めした時、「いや、これは私が買うものではない。格が違う」と言われたことがある。コレクターはこれくらいの気位を持って絵を集めてほしいですね。

藤田 その通りだと思う<sup>11)</sup>。

1950年代の、ブリヂストン美術館と大原美術館が繰り広げた作品収集のつばぜり合いが活写されている。ブリヂストン美術館主事（のち事業部長）・岩佐新の、関根作品収集にかける強い情熱を伝えるエピソードである。《子供》が東京画廊に入ったという情報を、岩佐がどのように入手したのか、興味がそそられる。

東京画廊は、大塚銀次郎を仲介して、神戸の元町画廊から《子供》を入手している。大塚は元毎日新聞記者で、1930年、神戸の下鯉川筋に「画廊」を開いた人物である。この草分け的なギャラリーは、のち他と区別するため通称「神戸画廊」あるいは「鯉川筋画廊」と呼ばれた。1943年に閉鎖されるまで40回以上の展覧会を開催し、1932年よりパンフレット『ユーモラス・コウベ』（のち『ユーモラス・ガロー』）を毎月発行、関西の美術家たちが出入りする憩いの場所、拠って立つ重要拠点となった。

大塚の作品入手先、元町画廊の佐藤廉は、こん

な思い出を記している。

詩人・竹中郁先生といえば小磯良平先生と神戸二中の同級生で、一生を大の親友として貫いた方である。渡欧も一緒、その時のパリでの背広も写真で見ると同じである。小磯良平作品集にも「竹中郁像」が再々出て来ている。その竹中先生が須磨の東、月見山（須磨離宮のある所）に住んでおられ、私が須磨寺の本店から支店を元町に出した当時、山陽電車で竹中先生とよくお逢いしていた。

私の母が、竹中先生の義母と小唄仲間であった関係で、大変親しくしていただいていた。先生はさすがに美術の造詣が深く、こんな思い出がある。

元町画廊の店頭に前田寛治作「婦人像」二十号を陳列していたが、誰も知らない。また関根正二作「弟」二十号（現在ブリヂストン美術館所蔵で絵ハガキになっている名品、NHK日曜美術館で紹介される）等、当時は数十万円台の売価であったが、世間的に余り知られていないために売れない。関根正二は二十歳の若さで他界した天才作家で、よほど美術通でないとき常時は一般に知られていなかったが、その作品をほめていただいた。私自身も関根正二をもう一度認識し直したほどである<sup>12)</sup>。

《子供》は第二次世界大戦後、しばらくのあいだ元町画廊の店頭を飾っていたらしい。また、同じく元町画廊に務めていた岡田弘は、筆者に次のように語っている。

昭和30年頃、関根正二作品を画廊に飾っていた。その頃は全くだれも目もくれなかった。その頃、大塚銀次郎さんと親しくしていて、学ばせてもらっていた。大塚さんに「ちょっと貸してくれ」といわれて、11万円で渡した。元値は10万円だったが、1万円引いて、2万円乗せた。2カ月して、『芸術新潮』にブリヂストン美術館所蔵としてカラー図版で紹介されていてびっくりした。東京に行ったときには、今でもよくブリヂストン美術館に立ち寄っている。関根作品は、画商を始めたころに手がけた作品で、自分の精神的な拠り所になっている。この作品は、京都の藤井弘文堂という表具屋さんから入手したものだ<sup>13)</sup>。

元町画廊は、第二次世界大戦後、藤井弘文堂か



ら《子供》を入手している。筆者が藤井弘文堂に問い合わせたところ、その入手先は、今はもう分からないという。注目しておきたいのは、1941年10月に大礼記念京都美術館（現・京都市美術館）で開催された「現代美術十月陳列」の出品目録に、

十五 関根正二 小児 内貴清兵衛氏蔵と記されていることである。写真資料がなく、この《小児》がブリヂストン美術館の《子供》かどうか、決め手はない。しかし京都に住んだ稀代のコレクター・内貴清兵衛が持っていたものと一致する可能性は高いのではないか。その類い希なる審美眼は、関根の代表作を所有するにふさわしいものだ。

今度は逆に、この《子供》が制作された時期からたどってみよう。

この作品は、完成後まもなく、1919年6月2日から25日まで東京・神田裏神保町の兜屋画堂で開催された「第一回新進作家油絵展覧会」で発表された。目録には、

1 男児の習作 1919 P.12 80yenとある。兜屋画堂は5月3日に開設されたばかりだった。この出品を生前の関根が喜んでいたことを、斎藤与里がこんなふうに語っている。

其の内兜屋画堂開店の話があつて、関根君にも出品して貰ふ事にもなつて居たし、又関根君の方でも、画堂の出来た事、同時に君自身も自由に出品する事になつたので、何でも大層嬉ばれたさうです。之れは関根君のお母さんや、君の友人などの話しだが、何でも初めて君が兜屋に『子供』を出した時、『俺れの絵も兜屋に陳んだから是れで死んでも好い』と云つて嬉んで居られたさうです。其の頃は体の方も悪かつたのでしたらうが、其の後急に死くなられたのでした<sup>14)</sup>。

このとき、売価80円だったが作品は売れなかった。

次にこの作品が公開されるのは、同年9月3日から25日まで同じ兜屋画堂で開催された「信仰の悲しみ—関根正二遺作展覧会」である。目録には、  
30 子供 八〇、〇〇とある。やはり売価80円だった。関根の死そのものが付加価値をつけたのか、このときは買い手がつく。村岡黒影は、以下のように振り返っている。

人としてはこんなことで誤解され、芸術として又非アカデミックとして所謂社会的冷遇を受

けながら、九月兜屋に開催の遺作展覧会は予想外の好結果を来した、出品の絵は全部買約になった。そして買つてくれた人々は総て彼を理解し彼の芸術を好む人であつたことを知つた僕等は衷心感謝と喜悅とを持つものである<sup>15)</sup>。

《子供》の新しい所蔵者は、奥田駒蔵である。『美術写真画報』1巻8号（1920年9月）に載った川路柳虹の「夭折したる二人の画家—関根正二と村山槐多の作品について」という記事の挿図として、《子供》が掲載され、

小児像 関根正二 鴻之巢主人蔵というキャプションが付されている。奥田は、京橋区南伝馬町二丁目（現・中央区京橋2丁目）にあった西洋レストラン「メイゾン鴻之巢」のシェフ・経営者で、与謝野晶子と親しく交流し、鴻巣山人と号して三越で日本画の個展も開く才人だった。奥田が《子供》を入手したのは、おそらく遺作展のときだろう。奥田は、関根作品を熱心に収集し、その画集刊行計画に加わることになる。『みづゑ』1921年6月号の情報欄に、「故関根正二氏、遺作遺稿の出版を協議す可く知友は五月十五日午後二時からメーゾン鴻の巢に集会」とある。また、1921年8月の新聞記事には、次のような興味深い事実が記されている。

一昨年六月、廿一で夭折した天才的洋画家関根正二君を追慕し、その遺された芸術を熱愛する人たちによつて、遺作画集の編纂が着手された。主として骨を折つてゐるのは鴻の巢の主人なる鴻巣山人と、洋画家瀬津伊之助氏等で、右画集には遺作油絵三十点、素描八十点、並びに遺稿を網羅し、一千部に限り一部価廿円で頒かつ計画なさうだ。それに就ても思ひ出されるのは関根君が第五回目の二科展で樗牛賞を得た出世作「信仰の悲しみ」だが、この原画は今兜町辺の村上濱吉といふ人の手許にあつて、当時八十円とかで買取られたものだと言ふ。さる呉服屋さんの若旦那で余り絵画蒐集に凝るので禁治産の宣告を受けかゝつてゐるといふ変り者が、最近買ひ入れた二枚折り「楽器を持てる女」は、千百五十円といふ関根君の作としては記録破りであつた。で、此等の二点が今度の画集に収められるのは勿論、瀬津氏所蔵の「死のおどり」外数点、鴻巣山人所蔵の油絵十一点、小説家久米正雄氏所蔵の数点など、準備は大分整ひかけてゐるので、目下はその出版費用一万五千円の調達に奔走中だとの話<sup>16)</sup>。

1920年代初頭、関根をめぐる熱い思いが東京を駆け巡っていた。だが結局、画集刊行は計画倒れに終わる。売価20円という高価な画集が出版されていたならば、現在所在不明の作品を含め、我々に貴重な情報をもたらしてくれたことだろう。

この新聞記事は、奥田駒蔵が関根の油彩作品を11点も所有していたことを伝えている。当時確認できた油彩30点のうちの3分の1を持っていたことになり、歴史上、最も重要な関根正二コレクターだったといつてよい。奥田は、1925年10月1日、43歳で亡くなった。その死は、永井荷風の『断腸亭日乗』にも記されている。おそらくその時点まで、関根作品コレクションは奥田家にあったのだと思われる。

さて《子供》は、どのようにして東京から京都に移動していったのだろうか。気になるのは、奥田が北大路魯山人と親しかったことである。魯山人が京橋区南鞘町（現・中央区京橋2丁目）に開業した大雅堂美術店と美食倶楽部は、メイゾン鴻之巣と目と鼻の先だった。魯山人はこの西洋レストランを好んで毎晩のように訪れていたらしい。店がはねた後、同じ歳の奥田と魯山人は連れだって飲み歩いたという。メイゾン鴻之巣の看板は魯山人が彫ったものだったし、魯山人の発案で奥田はスッポン料理店「丸屋」も出店している<sup>17)</sup>。1923年9月1日の関東大震災によって、メイゾン鴻之巣と美食倶楽部は焼け落ちた。奥田は同じ場所にレストランを再建し、魯山人は1925年3月、永田町に星岡茶寮を開業する。奥田が亡くなったのはそんな時期だった。その遺品整理に魯山人が関わり、それがきっかけで魯山人と縁の深い京都の内貴清兵衛のもとに《子供》が移っていったと想像してみたくなるのだが、いかがだろうか。

来歴を整理すると、以下のようになる。

#### 関根家

1920年9月以前、奥田駒蔵、東京

(?) 内貴清兵衛、京都

藤井好文堂、京都

元町画廊、神戸

大塚銀次郎、神戸

東京画廊

1956年9月、石橋財団（ブリヂストン美術館）

メイゾン鴻之巣からブリヂストン美術館へ、京都と神戸を回って、《子供》は再び東京・京橋の地に戻ってきたことになる。その間、20世紀の日

本の美術界に足跡を残した人物、機関が関わった。由緒ある歴史といつてよいだろう。

#### 5. 最後のスタイル

最後に、《子供》の表現を考えてみよう。

関根の最後の油彩作品、《慰められつゝ悩む》は、1919年9月の第6回二科展に出品された後、関根家にあったが、関東大震災のときに一時避難のために持ち出されて以来、所在不明となっている。50号とも60号ともいわれるこの作品は、いま、二科展にあたって作製された絵ハガキ (fig.8) によってしかその図様と色彩を知ることができない。空を思わせる青を背景にして、アザミが咲く野原に立つ3人の女性と一人の少年を組み合わせた作品である。《慰められつゝ悩む》と《子供》は、色



fig.8  
関根正二《慰められつゝ悩む》の  
絵ハガキ



fig.9  
関根正二《三星》1919年、油彩、  
東京国立近代美術館



彩と描法においてそれまでの作品と一線を画している。

もう一つ、1919年の年記を持つ油彩画に、『三星』(fig.9)がある。恐らくこの年の早い時期に描かれたものに違いない。自画像を姉と恋人がはさむ人物画と考えられているこの作品は、背景が暗く、『信仰の悲しみ』から繋がる情念の世界を浮かび上がらせている。筆致も荒々しい。闇の世界といってもよいものである。16歳のときの二科展初入選作、『死を思う日』から『三星』にいたるまで、依頼された肖像画をのぞいて、関根は一貫して重々しい闇の感情を油彩画で描いてきた。『慰められつ、悩む』と『子供』のみが、明るく澄んだ色彩に被われているのである。夜から昼の世界に飛び出してきたかのようなのである。

また、描法も異なっている。田中千秋は、『子供』の筆致について以下のように詳述している。

顔、頸の肌身部は他の部分より念入りに描かれている。筆致はストロークを使わず細かく筆先を押し付けて絵具を置く手法をとっており、絵具層の厚みはかなり薄いが粘稠度は高く、筆の離れた跡が鋭く立ち上がっている。また、陰影部の黒や褐色の混入は少なく、代わりに青や朱などを使っている。これらは関根の他の作品にはあまり見られない描き方である。

衣服の朱は薄塗りで、胸と下腹部の間では下層の朱をそのまま使用している。また、背景の青は粘稠度が低く、人物が描かれた後一気に塗られており、顔の輪郭はこの青で決定されている<sup>18)</sup>。

眉、まぶた、鼻梁、唇、頬、顎は、鋭い描線で形づくられている。ペンによる素描と共通する硬質な線で、その硬さが作品全体の印象をシャープなものにしている。しかしそれでいて、画面にはよそよそしさが無い。色彩とマチエールの力によるものだろう。これらの特徴は、『三星』とそれ以前には見られなかったものである。

こうした変化は、関根が最期を意識したからの集大成というよりも、新しいスタイルへの転換の萌芽だったのではないだろうか。関根に時間が与えられたならば、この新しいスタイルは深化を遂げていったに違いない。今さらながら、その早世が悔やまれてならない。

また、田中は、『三星』、『子供』、『慰められつ、悩む』の関連について、『三星』の赤外線写真の所見から、次のように述べている。

『三星』の赤外線写真では、中央の人物の頭の後に輪光が、また、胸には乳房と思われる線が確認できる。友人の証言によって、関根の自画像とされるこの中央の人物は、少なくとも下描き段階では女性像として描かれていたと考えられる。そして、『三星』の構想が当初三人の女性像であったとすれば『慰められつ、悩む』の三人の女性(中央の女性はやはり輪光を頂く)との関連を再検討すべきであろう。今のところ人物の容貌の類似性といった漠然とした印象でしかないが、『三星』の三人と次にとりあげる『子供』の肖像が、絶筆となった『慰められつ、悩む』の画面に展開、昇華して行ったとの推測も成り立つ<sup>19)</sup>。

1919年前半の6カ月間に、関根は新しい展開を着実に遂げていたのである。その軌跡を、『子供』は鮮やかに印している。

## 6. おわりに

『子供』は、現在、存在が確認されている関根正二の油彩画約30点のうちで、最後の作品である。短い画業においても鮮烈な展開を示した関根の、最晩年の様式を雄弁に語る。またこの作品は、没後3カ月で開かれた遺作展以来、関根を愛する人々に順々に手渡されてきた来歴を持っている。画集刊行計画など、熱い思いの中心に位置している。

残されている課題は、最後の様式がどのようにして生まれてきたのか、どのようなきっかけがあったのか、最後の数カ月に関根はどのように制作に立ち向かったのか、を描き出すことだろう。この作品と関連が深い『慰められつ、悩む』が、ふたたび現れることを願わずにはいられない。行方が分からなくなってから90年になるのだが、希望は捨てずにいたいと思う。

本稿を、故・田中千秋氏の思い出に捧げる。

## 註

- 1) 遠藤彰子「少年のいる情景十選(5) 関根正二『子供』」『日本経済新聞』2002年7月16日付。
- 2) 田中千秋「関根正二の『三星』と『子供』―塗り重ねと切断―」『現代の眼』453号、1992年8月。
- 3) 村田真宏「関根正二作『天平美人』屏風について」『福島県立美術館研究紀要』第3号、1988年3月、p.68。
- 4) 三浦末松「関根君と靈感其他」『信仰の悲しみ―関根正二遺作展覧会』兜屋画堂、1919年(再

- 
- 録：酒井忠康編『関根正二 遺稿・追想 新装版』中央公論美術出版、1991年1月、p.210。
- 5) 村岡黒影「関根君の事ども」『信仰の悲しみ—関根正二遺作展覧会』兜屋画堂、1919年（再録：『関根正二 遺稿・追想 新装版』、pp.216-217）。
  - 6) 太田鶴三郎「思ひ出ずるがまゝに」『信仰の悲しみ—関根正二遺作展覧会』兜屋画堂、1919年（再録：『関根正二 遺稿・追想 新装版』、p.225）。
  - 7) 土方定一「関根正二、続遺聞」『繪』111号、1973年5月、pp.12-13。
  - 8) 堀宜雄・伊藤匡編「関根正二年譜」『生誕100年 関根正二展』（図録）神奈川県立近代美術館ほか、1999年。
  - 9) 酒井忠康編『関根正二 遺稿・追想 新装版』中央公論美術出版、1991年1月、p.82。
  - 10) 伊藤匡「新しい神話—関根正二の人間像」『生誕100年 関根正二展』（図録）神奈川県立近代美術館ほか、1999年。
  - 11) 藤田慎一郎『大原美術館と私—50年のパサージュ』山陽新聞社、2000年12月、pp.180-182。
  - 12) 佐藤廉『画商の眼』神戸新聞総合出版センター、1996年1月、p.246。
  - 13) 筆者が、2001年3月26日、岡田弘から電話で聴取したもの。
  - 14) 斎藤与里「関根正二君遺作展覧会に際して」『信仰の悲しみ—関根正二遺作展覧会』兜屋画堂、1919年9月（再録：『関根正二 遺稿・追想 新装版』、pp.199-200）。
  - 15) 村山黒影「関根正二君を憶ふ」『みづゑ』178号、1919年12月（再録：『関根正二 遺稿・追想 新装版』、p.185）。
  - 16) 「ビールの泡」『讀賣新聞』1921年8月17日付。
  - 17) 中村伝四郎「美食倶楽部以前」『星岡』63号、1935年12月。山田和『知られざる魯山人』文藝春秋、2007年10月、p.250。
  - 18) 田中千秋「作品調査報告」『館報』40号（1991年度）、石橋財団ブリヂストン美術館・石橋美術館、1993年2月。
  - 19) 前掲註2。

---

## 美術館案内 Guide to the Museums

### ブリヂストン美術館

### Bridgestone Museum of Art

---

所在地 東京都中央区京橋1-10-1(〒104-0031)  
TEL (03) 3563-0241  
URL <http://www.bridgestone-museum.gr.jp>  
開館時間 午前10時～午後6時  
午前10時～午後8時(祝日を除く金曜日)  
休館 毎月曜日 年末年始  
入場料 個人：  
一般 800円 シニア(65歳以上) 600円  
大・高生 500円 中学生以下無料  
団体(15名以上)：  
一般 600円 シニア(65歳以上) 500円  
大・高生 400円 中学生以下無料  
なお、特別展の場合は変更することがある。

Address 1-10-1, Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo  
104-0031, Japan  
Phone +81 (3) 3563-0241  
Hours 10:00 to 18:00  
10:00 to 20:00 (Friday except for holidays)  
Closed on Mondays, New Year holidays  
Admission Individual :  
Adults ¥800; Seniors 65 or over ¥600;  
Students ¥500; Children under 15 free  
Group (15 or more):  
Adults ¥600; Seniors 65 or over ¥500;  
Students ¥400; Children under 15 free  
Different fees will be charged during special  
exhibitions.

### 石橋美術館

### Ishibashi Museum of Art

---

所在地 福岡県久留米市野中町1015(〒839-0862)  
TEL (0942) 39-1131  
URL <http://www.ishibashi-museum.gr.jp>  
開館時間 午前10時～午後5時  
休館 毎月曜日 年末年始  
入場料 個人：  
一般 500円 シニア(65歳以上) 300円  
大・高生 300円 中学生以下無料  
団体(15名以上)：  
一般 400円 シニア(65歳以上) 200円  
大・高生 200円 中学生以下無料  
なお、特別展の場合は変更することがある。

Address 1015, Nonaka-machi, Kurume-shi,  
Fukuoka-ken 839-0862, Japan  
Phone +81 (942) 39-1131  
Hours 10:00 to 17:00  
Closed on Mondays, New year holidays  
Admission Individual :  
Adults ¥500; Seniors 65 or over ¥300;  
Students ¥300, Children under 15 free  
Group (15 or more) :  
Adults ¥400; Seniors 65 or over ¥200;  
Students ¥200, Children under 15 free  
Different fees will be charged during special  
exhibitions.

(2012年12月現在)

---

石橋財団職員

常務理事                      西嶋    大二

事務局

---

事務局長	深堀    幸男
部長	竹中     正
総務課    総務課長	森田麻利子
総務課課長	菊地     浩
	鈴木   弥生
	田所   夏子

ブリヂストン美術館

---

館長	島田    紀夫	学芸課	学芸課長	新畑    泰秀
総務課    総務課長	小藪    泰生		学芸課課長	貝塚     健
	金森   大輔			中村   節子
	小原田鶴子			賀川   恭子
	石川   久子			細矢     芳
	久野   朝子			

石橋美術館

---

館長	島田    紀夫	学芸課	学芸課長	森山    秀子
総務課    総務課長	後藤    純子			平間    理香
	原     朋子			伊藤絵里子
	平島たか子			泉田    佳代

2012年12月31日現在





